
Cool Night Smoking

LUTE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cool Night Smoking

【Nコード】

N5942A

【作者名】

LUTE

【あらすじ】

法術と呼ばれる力が使われるその世界で、個人経営の探偵事務所を開く一人の男。相棒兼經理の一人の女と二人で営むそこに、相棒が一つの仕事を持つてくる。スタイリッシュハードスモーキング(?)アクション煙術士より改題

1 BOX ONE

ライターの火が、まだ日の昇って間もない時間の薄暗い部屋を照らし出す。

煙草を近づけ、火をつける。

ライターをポケットにしまった後、煙を肺いっぱいにためる。

十分に味わい、その紫煙を吐き出す。

どこか乾いたものを感じながらも、自然と落ち着く。

特にやることがないので、暇つぶしに、新聞配達のおっさんが朝が
んばって運んできてくれたであろう朝刊を広げる。

いくつかめくつていくと、気になる記事が目に入った。酒、煙草の増税。酒はてんでダメなんで関係ないが、煙草は困る。すいすぎと常日頃から言われている俺としては、死活問題だ。最近では喫煙で
きる場所も制限されまくってやがるし、愛煙家としては窮屈な世界
になったと思う。

急に気になって、煙草の箱の中を見る、もう十本しか入っていない。
どうやら次の収入まではこれだけで過ごさなきゃならぬらしい。
イラついてきて新しいのを吸おうとするが、そのイラつきが煙草が
残り少ないことが原因ということを感じ出し、踏みとどまる。

もう一つ、気になる記事を見つけた。最近こちら一帯で起きてる、
連続猟奇殺人事件の記事だ。どうやら新しい被害者が出たようだ。

法術に使用される遺留品が見つかったことから、犯人は法術士の可
能性が高いと見て以前捜査中らしい。

法術ってのは、まあ、おとぎ話に出てくる魔法ってやつだな、そう
考えてくれてぜんぜん問題ない。すごいもんなんで、犯罪にやらな
んやらにいろいろ使われるってわけだ。最近は凶悪犯罪の大半が法
術犯罪だしな。俺も法術士なんだが、別に悪いことはしていない。

新聞も読み終わりばうつと煙草を吸おうか吸うまいか考えていると、
バイクが我が家の前で止まるのを聞いたので、窓の外から下の様子

を見る。申し訳程度につけられた『空煙法術士事務所』の看板越しに、女性の姿。客じゃあない、どうやら相棒のようだ。

我が家、といったが、正確には事務所兼俺の部屋、だ。三階が俺の部屋で、二階が、俺と相棒が経営している法術士事務所、一階は何もないし、俺が借りた部屋でもない。仕事内容といえば、猫の捜索から浮気の調査まで、何でもござれの探偵事務所に、ちよつと法術士関連の仕事がついたくらいだ。

意外と経営状態は良好なのだが、なぜか俺の煙草は少ない。

階段の駆け上がる音のしばらく後、ノックもなしに部屋のドアが開けられた。

「おつはよー叢紫！ 珍しいじゃん！ 朝から起きてるなんてさ！
！」

朝っぱらから元気のいいこの女が俺の相棒、剣龍司 真理。苗字が非常に強そうだが、実際こいつ自身も強い。まあ、外見としては、美人だろう、性格もそんな悪くない。いかんせん手が出るのが早すぎるから、俺はそういう面ではパス。

「ん？何じろじろ見てんのよ？」

「あ、ああ。そういえば新しい服だな、けっこう似合ってるぞ」

「え、そう……へへ」

顔を赤くして顔を俯ける。

何照れてやがるんだか、それにしても一度も見たことがない服だな。

……

「……てちよつと待て！！ また新しい服買いやがったのかよ！

俺は今吸う煙草も苦勞してんだぞ！」

「だってあんた全部煙草に使っちゃうじゃん！ しかもどんどん吸っちゃってすぐなくなるんだから、自業自得でしょ！？」

ぐ……確かに、言い訳を出来ない事実だ。自分でも、煙草への金の比率はまずいと思っている。

「んじゃ、お前の服はいくらだったんだよ？」

「え……一万ぐらい……」

言いよどみつつも、煙草を何ケース買えるか考えたくもないような額をいう。

「ありえねえ！ マジありえねえ！？ んだよそれ、絶対おかしいだろ！ だってこの前も服買ってたか！？」

「あ、あれは五千だよお……」

後ろに身を引くようにやや体を丸めて、見上げるような視線でおずおずと答えてきた。なかなかかわいい動作だとは、思う、だが、言っていることが許せん！

「絶対俺とお前の報酬の差おかしいだろ！？ 事務所の維持費以外は等分にするんじゃないのか！」

当初の約束を守ってはいない気がする、確かに、経理については任せっぱなしなので、俺のせいでもあるのだが。

「これは、大体貯めてたお金だし、それに、ほとんど等分にしてるもん」

今度は開き直ったような態度で言ってきた。

「ほとんどってなんだよほとんどって！？」

「あゝもう、うるさい、殴るよ！？」

その声は衝撃に揺れた脳で意味を理解するのには時間が掛かった。さらに一泊遅れて鈍い痛みが右ほほあたりに感じる。張ったような痛みではないことから、手の形はグーと判断できた。

「言う前に殴ってんじゃないやねえよ！ だあ、もういいや！ お前と話してるといくつ体があっても足りねえ！ 俺はあんま金ねえんだ。」

よって、空煙法術士事務所としては仕事が欲しいわけだ。ということ、仕事はないのか？」

殴り始めるとその話題について真理は殴ることを容赦しなくなるため、これ以上口答えすると身に危険が生じると判断して、話題を変える。

「えつと、いまんとこ特になんだけど、あ、そうだ、これ追ってみない？ 生死問わずで賞金額も高いよ！」

指差したのはさっき読んでいた猟奇殺人の記事だ。どうやら犯人に

は賞金がついたらしい。

法術士事務所等を経営するときにも必要なのだが、国に申請して、国家試験に合格すれば、国が認可して、国家公認の法術士と言うものになれる。利点はあまりない、英語検定と同じくらいだが、履歴書に書いたって特に意味をなさない。

それを取得している場合、警察組織だけでは処理しきれない、度重なる法術犯罪に歯止めをかけるため、国が施行した制度により、特定の法術犯罪者の逮捕を自由に行えるようになる。もちろん、捕まえたときには国から報酬が支払われる。

やってることがまるで賞金稼ぎなので、そのまんま賞金稼ぎとかいわれたり、報酬のことを賞金といたりする。だが、これは少々厄介な仕事で、生死問わずの指定を受けていない犯罪者を殺してしまった場合、自分が殺人で逮捕されちまう。しかも大概そういうやつ
の報酬は安い。逆に、生死問わずの犯罪者は、よほど凶悪で、自分が簡単に殺されちまう可能性がある。しかも、どちらもそれになるハードルが高い、つまりは生死問わずにしろ問わないにしろ、みんな危ないやつらってわけだ。

「これか、なかなか面白そうだけど、危なくないか？」

「あんた一級法術士でかなり強いことになってるんだから、そんなの平気でしょ！」

俺は一級、ちなみに真理は準一級。俺のほうが強いらしいが、一対一では勝てる気がしない。

「俺がやらないっていったってどうせ無理やり引つ張ってくんذارいいよ、やってやる。まずはユー二に情報をもらいに行くぞ」

「よし。早速行こう！」

特に急ぐ必要もないので、ゆっくりと立ち上がった。

だが、それを彼女は許さないようで、首が絞まる勢いで襟首をつかまれる。

一瞬意識が飛びそうになった……

結局引つ張られながら、事務所を後にすることになった。

目的地であるコンビニに入ると、レジには単なるコンビニの制服だというのに、少々色気の出すぎている女性がいた。目的の人、ユーニである。

金さえ積みめば、世界の闇の奥深くから、明日の天気まで教えてくれる、情報屋だ。

情報屋なんてものを使うのまで、賞金稼ぎっぽい。しかしこれは警察とは違って裏のルートで捜査できる点であるので、アドバンテージになる。

「ユーニ。買いに来た」

「わかったわ、ちよつと裏で待ってて」

煙草を吸いながら、いわれたとおりにコンビニの裏で待っているといちいち私服に着替えてきたユーニが来た。体のラインが際立つその服は、無駄とっていいほどまでに彼女の色気を濃縮していた。

「上がってきたわ。私、煙草苦手なの知ってるでしょ。消してくれて？」

機嫌を損ねると支障をきたす場合があるので、言われたとおり足で踏み消す。場合によってはこちらの命に関わる。

半分ぐらい吸い損ねちまった。

「ありがとう。で、欲しい情報って？」

「あのお、これについての知ってることを、教えて欲しいんですけど？」

俺の代わりに真理が話を持ち出す。

バックにはすごいのが控えてるのか、それともすごいもののトップなのか知らないが、ユーニに喧嘩を売ったら、三日で自殺したくなるような悲惨な責め苦が待っているとのうわさが流れていて、事実、昔一度ユーニに突っかかっていた男が次の日からどこにも姿を現さなくなっていることから、真理でさえもおどおどしている。

おれも、思い出したくも無い苦い経験をしたことがある。正確には、俺の元相棒だが。

だが、彼女の情報は正確で、他人が知りえないようなことまでも知っている。

「ああ、それなら四割ね」

しかし、問題がある、異常に情報料が高いのだ。ふざけて天気を聞いたやつが、1万ぼったくられたって話も聞いたことがある。

「それはないだろ？ 何でそんな高いんだよ？」

「量が多いし、情報があれば簡単に犯人見つかるからよ」

「二割だ、それ以上は出したくねえ」

「いいわよ。別に。じゃあ、教えてあげるわ」

やけに簡単に折れやがった。明らかにおかしい。まあ、教えてくれるようなので聞くが。

「じゃあ、殺害方法から、まあ誰でも知っての通り、ばらばら死体なんだけど、頭が独特よ。舌が引き伸ばされて、挟まれた眼球と一緒ににあごの裏にくだいて打ちつけられているの」

ご丁寧に写真まで見せてくれやがった。もはや人の顔と思えない、ぞつとしないもんが写ってた。

「で、ばらばらの死体は白線で描かれた模様の上にちりばめられてたわ。で、これが死体が見つかった場所の地図」

番号の振られた赤いシールが張られた地図を渡される。

「ほう、で、次は？」

「あら？ もうないわよ？」

「それだけなのか？ 意外と情報がないんだな」

「いいえ？ ただ、ここまでがあなたたちとの契約の情報料分よ？」

もつと聞きたくて？」

さも当然のように、とぼけた感じに聞いてきた。

くそ、さっき簡単に折れやがったのはこういうことかよ。だが、これだけでもいける可能性はまだある。まずは、この手札だけで動いて、それでもわからなかったらもう一度ここに来ればいいと判断する。

「もういい。ありがとう。いちおう礼をいっとく」

「礼よりちゃんとお金払いなさいよ？」

「わかってる。行くぞ、真理」

地図で確認した後、真理の返事を待たずにとっと歩き出す。

真理が、ぺこりとお辞儀をユー二にした後、追いつく。

歩きながら、次の煙草を左手で取り出してくわえる。

自分たちで調べるために、地図に記された現場に向かうことにした。

「やっぱり、こういうのの犯行現場は廃ビルよね」

なぜかは知らないがうれしそうにビルを見上げながら真理がつぶやく。

確かに、こういった類の犯行は廃ビルの一室で行われる可能性が高いが、ユー二に渡された地図を見ると、全てが廃ビルで起こっているようだ。といっても、今ではそこしこに廃ビルが建っていて、なおかつ人目に触れにくいので、犯行に使っていただけなのだろうが。

ビルの手前、警察が敷いた立ち入り禁止区域を示す黄色いテープのところまで来る。

一番最初の殺人があった場所に來たのだが、どうやらまだ規制は外れていないようだ。

当然のように入っていく。普通は見つかったら補導物なのだが、二級以上の法術士免許の権限によって、中に入ることが出来る、実際はまずは警察に申請を行う、もしくは警察関係者の同行が必要なのだが、どうせ見つからない、見つかったとしても何とかなるから、入る。

奥のほうに行くと、もちろん電気は通っていないく、奥にいくにつれ日が届かなくなり、暗くなってくる。

煙草に火をつけるついでにライターで周りを照らす。

炎を、法術によって明るさを上げる。これは、略式法術や、無詠唱法術といわれ、特に準備することなく、意識するだけで使用できる法術の一種だ。もちろん、効果はそれなりに低いが、私生活にお

いて使うのは問題ない。

「便利だよねえ、それ、私も出来るようになりたいな」

こいつは準一級といえど、特化型の体質変化型近接法術士だ。内面的な法術しか用いることが出来ない、いわゆる筋肉馬鹿。よってこんな簡単な法術もうまく使用できない。

ちなみに俺は媒体使用型遠距離法術士。媒体使用というのは護符などのものに自分の法力を集中させ、それを用いて法術を使う。

術化法陣成型などと違って準備を前もって行なっているのですぐに放つことが出来るが、護符なら護符、カードならカードというように、特定のもののしか媒体に出来ないのだからなくなったときはどうしようもなく使い物にならない。

といっても、俺は媒体使用型に分類されているが、特異な性質の法術を使うため、実際は法陣成型に近い。

「いいじゃねえか、お前なんか目を強化すりゃ暗闇でもぜんぜん平気だろうが」

煙を吐き出しながら、どちらかといえばの方が性能がいいと思う体質変化法術士の長所を口にする。

「んん、そうだけども。それじゃ自分だけしか意味ないじゃん」

「それでいいだろ、自分だけで」

「ええ、だって……」

不満に顔を膨らませるのがライターの明かりに映る。

「お、たぶんここだろ、血が床に染み付いてやがる」

何か言いたがっていた様子だがそれを無視して部屋の中に入る。

そこは三階の部屋の一つで、血がところどころに染み付き、凄惨な様子を物語っていた。

床を照らすと、一角に白線で描かれた何かが見えた。

「おお、これが。……地図？」

かなり要約されたものだったが、それはどうやらここ周辺の地図のようだ。

手帳を取り出し、メモをする。

メモを終えると、次の煙草を口で挟んで引つ張り出しながら周りを見渡す。やはり捜査の後なのだから、何も残っていない。

とりあえず外周にそって歩いて距離を測る。どうやら正方形に近い。メモをもう一度開き、現場全体の様子をメモする。

「よし、行くぞ」

「え？ もう次！？ だつてまだ何にも探してないよ？」

「警察の後なんだからどうせなんか探したつて見つかるわけないだろう。もしなんかあったとしても、だ、大人数でやつても見つかなかったものを俺たちだけで探してたら日が暮れちまう。」

「うう、たしかに。じゃあ、次」

吸い終わった煙草をそこらへんに放り捨て、ほかの場所に向かうことにした。

結局、どこも似たような結果に終わり、今朝の朝刊に載っていた事件の場所、つまり最新の事件現場に着く。

やはり、同じように廃ビルだったが、どうやらまだ現場検証が続いているようで警察の姿があった。

その中に一人、見知った顔を見つける。

「よう、賢時じゃねえか」

「また、お前らか」

煙たがるような反応を示したその男の名前は谷本 賢時、刑事をやっている、何度か首を追っているときに出くわした。

嫌そうにしているが、けっこう人がよく、簡単に中まで入れてくれた。

「なあ、煙草持っていないか？」

「あるが？」

「くれ」

「断る」

何もそこまで、というほどのかなりの反応速度で断られた。

「別にいいじゃ……」

「最近の高いんだ。断る」

俺だって高いから困ってるんだ。

しょうがなく自分のを一本取り出し吸う。現場検証中だというのに、別にいいのだろうか？

賢時を伺うが、何もとがめられず……というか自分まで吸い始めやがった。

「一応言つとくが、禁煙だ」

「自分が吸いながら言っただけ」

いくら自分の担当だからって少し横暴すぎると思う。

だが周りもなれているようで、誰も咎めはしない。逆に、最近の警察の不振の理由もわかった気がする。

「ここだ。まだ時間がたつてないからくせえぞ」

生々しい血痕が残る事件現場まで通された。真理は外で待っていることにしたようだ。

「まだ俺たちがやってるんだ、何もさわるなよ」

「わかってる」

とりあえず、今までどおり周りを歩いて部屋の広さを調べ、状況をメモする。

「なあ、どんな感じだったんだ？ 死体は」

「全身細切れ、舌と目は串刺しにされて、あそこの地図の上にはばら撒かれてたんだ。少し、足りない部位が合ったが、それがどこにあるのかわからん。後、犯行現場を示す位置に頭がおかれていた。おそらくその地図に何か隠されてて、次の犯行現場を暗示してるんだ。まったくなめた野郎だ」

どうやら描かれていた地図はそのためのものだったようだ。勘ではなくなった部位が何かを示すか、もしくは、そのちりばめられた肉片に規則性があるかだろう。

「で、その何かは？」

「まだみつかつたらん」

苦虫をかみ殺したような渋い顔をしながら、手掛かりは無しといっ

てきた。

「ほかにほ？」

「教えられるか。お前らが捕まえると警察は上がったりなんだよ。まあ、犯行時刻ぐらいなら、な」

「おう、ありがとうな」

第一の被害者からこの被害者までの全ての犯行時刻を教えてくださいることになった。やはり、案外優しい。

「……とまあ、こんなもんだ、ほかに教えるものはない。わかったらとっとと出て行ってくれるか？ 邪魔だ」
しつしと煙たがるように手で追い払われる。

「へいへい。じゃあ、失礼させてもらいますか」

適当に手を振りながら出て行き、扉の前で待っていた真理と合流する。

「帰るぞ。後は事務所を考える」

「えっと、じゃあ私はもう少し回りに聞き込みとかしてみるね」

「ああ、頼んだ」

そんなことはしても無駄だといっても、それこそ彼女にとっては無駄だろう。ほっというて帰ることにした。

帰ってからの二本目を吸いながら、帰ってからずっと見っぱなしのメモ帳と地図をまた見る。

何でこんながんばってんだろうか。

おそらく、金のためっていうよか、煙草のために俺の心はなっている気がする。

「やっぱりなあ、情報が少なすぎんだよなあ」

本当にユーニは四枚のうちの二枚のカードを提示してくれていたのだろうか？

それとも本当はもっと手札が少なかったんだろうか？

どうもぼったくられている気がする。いや、絶対やられてる。

実際なら、ユーニか賢時どちらかから、ちりばめられた体のパーツ

の位置まで把握したかった。

だが、その情報は手に入れられなかったのでそちらへの思考は排除、別の線から考える。

まずは、情報の整理、犯行現場の部屋はどれも十メートル四方。どれも時刻は午後九時前後。白線で描かれた地図の上に、ばらばらにされた死体がおかれていて、そのうち頭は犯行現場の上におかれていた、と。

これだけか、地図は無視して、ほかに現場の状況に何かないか探す。「……つってもなあ、絶対それが怪しいしな」

やはり、少ない。どうしたって見つかる気がしねえ。描かれた地図と、犯行現場に印をつけた地図を遠くしたり近くしながら見比べる。

ふと、何かが重なったような気がする。だが、描かれていた地図じゃない。

何回かやってみる。

ああ、そういうことか……

不意に答えがわかった。どうやらついてるらしい。

重なったのは白線の地図ではない、それが描かれた、部屋全体を表した図のほうだった。

ユー二に渡された地図は、警察も使用している一般的な地図で、形は正方形に近い。

そして、部屋も正方形。

そして、重なったのは、次の殺人が行なわれた場所と、部屋に描かれた、地図自体の位置だった。

なんてわかりにくいことしやがる。警察への挑戦状だったとしたらもつとわかりやすく示せての。

最後の犯行現場の図と照らし合わせ、地図に大体の位置の見当をつける。

その中にある廃ビルのは数は一つだった。確実に次の犯行現場はここだ。

「よし、後は時間になってそこいきや犯人がいて、とっつかまえておしまい、と。考え疲れた、寝よ」

時間が来るまで寝ることに決め、隣の寝室まで足を運ぼうとするが、それもめんどくさくなって日ごろから使っているソファに寝転がる。なんか引つかかることがある気がしたが、めんどくさいので起きてから考えるでしょう。

目が覚め、煙草を吸いながら準備を整えた後、地図の乗った机の上を見ると、何か置き書きがあった。

『見つけといてくれたんだ。ありがとう。先に行ってるね。もし私だけで捕まえたら分け前は七対三でことごとく』

七対三だと？　　ったく、調子に乗りやがって、誰のおかげで見つけられたと思ってやがるんだ。そもそもユー二より横暴だ、それは。

地図で場所を確かめようとしたところ、不意にさっきの疑問の答えがわかった。

地図の印を線で結んでいく。そして、不要だと思う線を消すと、やはり浮かび上がった。

それは、大規模な術化法陣だった。おそらく、戦争に使われる、戦略級法術が発動される。

この線で次の犯行現場を警察は予測することが出来なかったのだろうか？

ここまで大きなものを発動させようとなると、かなりの大人数が必要になってくる。

となるとこの事件は、組織ぐるみの犯行ということになる。

総仕上げとなる今回は、おそらくかなりの護衛と法術を発動するための人員を動かすはずだ。

なら、どんな組織がこんなことをする？　街一個を消そうとするなんて狂ったことをしようとしているのは？

暴力団？　それは、無い。あいつらは自分の利益に従って行動する。こんな自分の居場所まで壊すようなことをするやつじゃない。

マフィア？ これも行動理念はさほど変わらない。おそらく違う。となるとやはりテログループ？ 一番可能性が高い。そうなら自らの命さえ考えてない狂人たちだ。

いくら真理でも援護する俺がいないと危険だ。

時間は八時三十分をちょうど過ぎたところ。まだ戦闘が始まっていなければいいが、とにかく、早く行かないとまずい。

目的地につくと、時間はすでに八時四十五分だった。

廃ビルに入ると、すでに戦闘は始まっていたようで、犯人グループと思われる人間たちが転がっている。もちろん、死んではない。だが、かなり人数が多い、かなり大規模な組織の全体で行なわれた犯行のようだ。

一階に真理の姿はない。どうやら戦闘の場は二階にまでうつされたようだ。

階段を駆け上がっていくと、二階に着いたと思った途端、男の体はこちらまで飛んできた。

「アブね！」

思わず声を出しながら避ける。止めてくれる障害物がなくなった男は、一回までそのままの勢いで叩きつけられる、さすがに死んだかと思ったが、小さく呻いて気絶する姿が見えた。

振り返ると、投げ飛ばした張本人、真ん中で男たちの中で大立ち回りをしている真理もこちらへ振り向く。

「もお！ おっそ〜い！！」

「お前が急ぎすぎなんだよ！」

どうやらまだ無事のようだ、特に外傷は見当たらない、とんだ体力馬鹿で筋肉馬鹿だ。

真理が階段の近くまで来て、近距離タイプを遠距離タイプが援護しながら戦う、基本体勢に移る。

迫ってきた男たちを法術によって金属並みの硬度を持たせた足で次々と真理が蹴り倒していった。

どれも骨を何本か折る程度で昏倒させられていた。

「おい、生死問わずになつてんだ。別に本気だしやいいだろ？」

「いいの！　こんなに殺したらまずいでしょ！　それに、殺したらそれで終わりじゃない」

「甘いつて、おまえは」

箱から煙草をはじき出し、左手で口に持っていく。

真理が、一人の懷に潜り込み、電気うなぎの要領で掌打に雷撃を纏わせ、失神させる。

だが、すぐに周りを敵に囲まれる。

そんな中、俺は、煙草を吸う。

そして、肺に煙を満たす。

俺の家系は代々の法術士でもあり、一つ特殊な能力を持っていた。煙を吐き出し、それを指でなぞっていく。べつに、こんな状況で遊ぶつもりはない。

真理が敵の攻撃を避けるために、足を開脚して、地面すれすれまでかがみ込んだ。それに合わせ、法術を放つ。

「貫け……」

何十もの豪速の槍が空間に現れ、敵の腕や足を貫いていった。かなりの数がそれを避けてきた。

結局、彼女の言い分にしがって、致命傷を避けるように狙った俺も、甘い、か。

特殊な能力、それは、煙草を媒体とした法術だった。これは世界でただ俺たち空煙家だけが有していた能力だった。

さらに、その法術は強大であり、俺の能力は並みの法術士のはるか上に行く。

交戦は続く。

「我、鎌鼬の赤き爪を右手に纏う！」

真理は、左手のつめを赤く鋭い引き裂くための爪に変化させ、当たる寸前まで来ていた足を切り裂き軌道をそらす。さらに背後から迫るナイフを持った敵にもすばやく反応し、ナイフを蹴り上げ鳩尾に

右拳をたたきこんだ。

不意に四方から法術によって紡ぎだされた矢を、真理は飛んで避ける。

そこに、追い討ちをかけるように三条の矢が放たれた。

「我、神使の黒き翼を背に纏う！」

一瞬だけ背中からカラスを思わせる黒い翼を広げ、姿勢を制御、それをかわして着地。

目には、獲物を狩る動物のような力強い光が宿っている。

今の彼女は筋力、反応速度、五感の鋭さ、どれをとっても人の規格外だ。銃弾でさえも見切るそれは、並みの法術じゃ捉えきれない。敵が真理に翻弄されている間に、煙をなぞり、術化法陣を築く。

「燃ゆれ……」

真理が敵の男の頭を踏みつけながら天井すれすれのバク宙を決め、その隙を埋めるように、地を這う炎が男たちを覆う。

足を焼いて戦力を奪おうとしたが相手も法術士が多い。火などものともせずに突っ込んでくる。

彼女も両腕に青白く光る雷光を纏わせ迎え撃つ。

敵に触れるたびに激しい光がほとばしるが、殺さないように調節された雷撃だ。

もう一度煙を吐き、なぞる。

「ごめん！ 二人行っただけ！」

いわれたとおり、術士が二人こちらに向かって突っ込んできた。

おそらく、片方は媒体型、もう片方は何かはわからないが近接だ。真理のほうも手一杯らしい、自分で何とかするしか、ない。

読みどおり、媒体型が懐から何かを取り出して投げつけてきた。それに対し、途中まで組み上げていた法陣を無理矢理簡略化して、相殺するだけの威力で放つ。

投げたものから雷撃が走るとともに、煙からも爆炎が生じ、ぶつかったところで光がほとばしるだけに終わる。

だが、その光にまぎれて、剣を持った近接型がこちらに飛んできて

いた。

一足飛びに後退しながら、そいつに向けて、ポケットから取り出したライターの口を向ける。

相手の射程内に入る寸前、略式によって巨大化された炎を放つ。

とっさに相手は両手で顔をかばった。外傷は、威力のない略式ではまったくついていない。

だが、一瞬、視界と両腕を塞ぐだけで、十分だ！

後退の力を、余すことなく片足に乗せ、反動で一気に敵に肉薄する。ちょうど相手は腕を下ろしてきた。一瞬視線が交錯する。

その右目に、短くなった煙草の火を、灰皿で火を消すかのように押し付け、焼く。

痛みに剣を振り回して暴れだすが、何とか胸板を蹴りつけて媒体型のやつまで押し返す。

二人で絡まって倒れている間に、ライターで法術を放った際に新しくつけておいた煙草で法陣を描き出す。

全員を吹き飛ばすほどの強力な法陣を、すばやく描き出す。

「真理！ 絶縁しとけ！」

こちらの声に片手を上げて答える。

「雷光よ……」

法陣を纏わせた右腕を地面に叩きつけると同時、まばゆい蒼い光が部屋を満たす。

光が収まった頃合で目を開くと、ちょうど真理が残っていた一人を殴り、全員が倒れたところだった。

こちらの意図を判断して雷撃に対しての対抗法術を築いていたのが何人かいたようだが、彼らも強い光までは対処していなかったようだ。

体の表面を絶縁化して、さらに目の表面にサングラスのように黒い膜を張って視界を確保していた真理が、目くらましに動けなくなつた敵を倒していた。

遠距離が援護する体勢といったが、この体勢には逆の意味もある、

前衛が時間稼ぎをして、後衛がでかい法術を放つという、多人数を一掃する戦法だ。

名残惜しいが吸えないほど短くなった煙草の火を消す。

法術で使うと楽しめないから困る。

「ふう。やっぱりここが締めになるか。まずいな、時間がない。完成してなけりやいいんだが」

「どうということ？」

「あゝっと、な。今までの一連の事件は戦略級の法術を発動するための儀式だったんだ。死体の体の一部が欠損してることから、おそらくそれを贄として発動する召還型。で、ここが最終地点、止めなきや街一帯が破壊される可能性がある」

「え！ やばいじゃんそれ！」

「だから急ぐんだよ！」

二階ではないことを調べ、三階まで駆け上がっていく。

三階は、巨大な術化法陣の青白い光によって部屋中が満たされていた。た。

もう術が発動しちまっていやがる。

術を発動させた八人は反動で命を落としていた。

個人のことをまったく考えられてない行動だ。それを平然とやってのけるやつらがいる組織ということは、よほど統率力があるということだ。

まあ、この非常にまずい事態を何とかすれば、そいつらが死んでいようと生死問わずなのだから金は手に入るのだが。

「どうしよう！ もう始まっちゃってるよ！」

法陣の軌跡は全て中央に収束し、そこから黒い点が広がっていく。異空間とを連結する穴が開き、召還されようとしていた化け物が、姿を現し始めていた。

「そいつを押し戻して、穴塞ぐしかねえ！」

鎖に覆われ、間からは何かが激しく蠢いているようなことが確認で

きる、見るものを戦慄させるグロテスクな頭が現れ始める。

完全に頭を穴から出すと、それだけで天井を突き破った、なんてデカサしてやがるんだか。

化け物が口を大きく開く、がたがたの歯と腐った肉のような口内が見えた。

するとその気味悪い口の中から、術の発動を示す蒼い光が漏れ出してきた。

「まずい！」

大量の巨大な刃が放たれるが、間一髪のところまで真理が俺を引っ張って範囲外まで逃げてくれた。

「じゃあ、私がひきつけるから一発おっきいの撃って押し戻して！」

「ああ」

役目を果たそうと、ポケットの中に手を入れるが、致命的なものが欠けていることに気づいた。

「やべえ。弾切れ、だ」

もちろん銃じゃない、俺はそんな便利な者を持ってはいない。現状での役立たず決定。

「……ええっ！ 煙草切れたの！ だからこういうときのためにとっておけていつも……きやつっ！」

もう一度刃が放たれ、それが真理の右太腿を引き裂いていた。

重症ではないが、機動力を奪うには十分な傷だ。畜生、俺のせいか！

「んっ……。じゃあ、私がここは何とかしておくから、叢紫は応援を呼んできて」

「無理だ」

無理だ、満足に動けない今の状態じゃ、俺が助けを呼ぶまで避け切るなんてことは出来ない。翼はこの狭い空間じゃ連続した移動には邪魔なだけだ。さっきのようにいちいち詠唱していたらいずれ捉えられる。それにそんなことをしている間に完全に出てきちまう。

「いいから。はやくっ！」

俺を説得しようとしてこっちに意識がそれた瞬間を狙って、もう一度刃

が放たれた。

「……馬鹿!?」

とつさに左手で彼女をかばう。

単なる素手で何本もの刃を払いのけたせいで、一瞬にして腕がズタズタになった。

「叢紫!?」

泣きそうな声を真理が上げる。

「いや……大丈夫だ。それよりも自分の面倒見てやがれ!」

煙草の利き腕でかばうなんて、俺も馬鹿か。いや、今は吸う煙草も無いただの役立たずなんだよな。馬鹿以下か。

「ごめん……」

もつと泣きそうになりながら謝ってきた。

さらに真理を狙って刃が放たれ、避けきれずに上半身を掠め、何かが飛散る。一瞬、彼女の血かと思った。

「おい! 大丈夫か!」

「あ……」

「どうした!?」

「私、煙草持つてるんだっ……」

少し間の抜けた声を上げて、周りに飛び散ったものを見回していた。

「ハア!? 何で持つてるんだよ! お前吸わないはずじゃ!」

さっき飛散ったのは、上着のポケットが破れて飛び出した、煙草だった。

「いいじゃん! とにかく、これで撃つて」

一瞬だけ横を走り抜けると拾った煙草を何本か手に乗せてきた。なぜかそれは俺が吸つてる銘柄と同じだった。

「ひきつけるのは頼んだ! 一発でケリをつける」

火をつけ、これ以上ないくらいに肺に溜め込む。

そして、十分に法力を乗せて、吐き出す。

先ほど使ったものより、数段精緻に、複雑に、法陣を描いていく。描き終わるが、まだ終わりじゃない。

そのころ、真理には避けきれずに細かい傷が体につき始めてきた。時間がない。

煙草の火が、赤々と、強く、光る。
激痛とともに左腕からぼたぼたと血が流れ落ちるが、そんなものを
かまっている暇はない。彼女が危ない。

すばやく手を動かし、火で、描く。

術化法陣に、さらに方陣が刻み込まれていく。

火の軌跡は残像を残し、方陣自体も次第に赤く光り始める。

さらに手は加速し、何重にも、深く、法陣を刻み込んでいく。血が
周りに飛散る。

法陣の紅き光はピークに達した。

「できた。真理！」

声を聞いて、こちらの背後まで真理が移動してくる。もうその体は
ぼろぼろだった。

「悪い。時間かけた」

継続して描きつつ、謝っておく。

「それで倒せなかったら、ただじゃおかないからね」

その声も弱弱しい、煙草を切らした自分が情けなくなってきた。今
度から気をつけるようにしよう、彼女に迷惑かけないように。

化け物がこちらを向き、口を開く。相手もケリをつけるつもりか。

今までよりも数段強い光が紡ぎ出されていた。

「時に型成す破壊の神よ

生を現し

死を現す

災禍の蒼炎よ

総てを葬り

蒼空を切り裂け

天無……龍蒼！！」

詠唱によってすでに質量を持った強大な法陣に、掌打を叩きつける！
この世総てを戦慄させるほどの殺気を放つ、巨大な翼を持った光の

龍が現れ、放たれた刃の群れさえ消滅させながら飛び立ち、化け物の顔面に直撃する。

激しいせめぎあいが行なわれ、龍と化け物の力が拮抗する。

「龍よ……閃けえ！」

翼を大きく広げ、心臓を鷲掴みにされるような、脳に直接響くような巨大な咆哮を上げる。

龍の体がひととき強く、蒼く光り、凄絶な力を発揮した。

空間に蒼い光が無数に疾り、化け物の頭部がズタズタに引き裂かれる。

化け物の力が弱まり、龍が穴の中へ押し返していく。

悲痛な叫び声を上げ、化け物が穴の中に落ちていった。

穴が閉じ始め、この世界と異界とのつながりが弱くなっていく。

穴が完全に閉じると、部屋を満たしていた召喚法陣の光が消えていった。

緊張がきれて、床に肘をついて仰向けに倒れ込む。

「ふう、終わったな」

「よかった」

首を上に向けて後ろを見ると、頑強で特殊な体を持つ体質変化法術士の傷は、もう癒え始めていた。

「なあ、なんでもってたんだ？　しかも俺が吸ってる銘柄」

「それは、叢紫が吸ってるの見てたら、どんな感じなのかなあ？」

「思っで、でも、ぜんぜんダメ、よくあんなもの平気で吸ってると思っただよ」

苦そうな顔をして舌を突き出すしぐさをした。

「……それに、なんか、叢紫が吸ってる姿が私は好きだし」

「ふん」

左腕の痛みでほとんど聞き流すように聞いていたせいで、ボソッと何をつぶやいたのかまでは聞き取れなかった。

まあ、これとにかく今回の仕事は終わった。

しばらくは、煙草の心配は、しなくてすみそうだ……

1・5 BOX MENTHOL

「毎度おなじみ、諸田真の一発芸でござい！」

別になんでもないのだが、通学途中に雑談に間が空くと俺はこんなことを言う。

目の前には女子高生二人、格好の的だ。

「あ？ マジ？ やっちゃう？」

おちよくる様に友人も乗ってくる。

「じゃーいっぺんに二人いっちゃいましょう！」

「よし、俺は白と縞に賭ける。いや、むしろ希望。」

「いや、片方は黒だ。もう一つは……白だ。てかキボンヌ」

「負けたらなんかおごる！」

「よしキタ！ ふおおあああ……！」

なんとなく雰囲気作りの掛け声を俺は発する、キモイかもしれない。ようはノリだ。

女子二人の、スカートあたりを指差し、シュツと上に動かす。

すると、今まで風があつたわけではないのに、急に、女子高生たちのスカート周辺にだけ風が発生し、

「うおおっすげえ！」

すっげえこと、それすなわちスカートがめくれること。

「ッてか、白とティーバックかよ！ 何だその差！」

思わず声を出した瞬間、二人が振り向いてきた。結構美少女。よく確認する暇は無いが片方はメガネ、白の方だ。

一目散に俺たちは逃げ出した。

下らないながら、こんな芸をできるんだから、俺は超能力者か何かの部類なんだろう。ただ、ほんとに大したことはできないので、お楽しみくらいのものにしか利用できない。実際俺も普段はこんなことが出来るのを忘れていくくらいだ。意味不明な能力（？）については特に気にせず、単位取得にあせりながら平穏な学生生活を送っ

ている。

「いや、俺は片方は大人なのつけてると思つて黒にしたんだけどな……まさかティーバックとは。色がよくわからなかった。痛みわけだな」

「ワロスワロス！」

リアクションがなんとなくそっちの世界だ……。

雑談を再開し、家路に行く。

「寄つてくか？」

「ん、ああ寄つてくかあ」

通学路には何軒かコンビニがあるのだが、なんとなくいつも寄る１軒がある。ちよつと買い食いしていくとちよつとよいタイミングで食い終わる、とか、なんとなくの理由ならいくらかでもあるが、やっぱり一番の目的はこの時間帯の、レジの人間離れた美女さんだ。店に入ると、ちよつとした食べるスペースみたいなのこにいつものジーさんたちがたむろしている。立ち聞きするとなかなか面白いのだが、この話はまた今度にしよう。

「やつぱりアイス！」

二人で冷凍庫を覗き込み、日々微妙に変動する品ぞろいの中から好みの一品を選び出す。立ち読みもしないし、品物を一通り眺めてみるようなこともしないタチなので、レジに直行する。

割り込むように店に入ってきた女連れの兄ちゃんが美女さんと二言三言交わして何を買うでもなく出て行つた。この店に変な客が来るは見慣れていた、というかそんな変な店といった感じが美女さんをいつそうミステリアスな魅力にあふれさせている感じがしていた。わーい、今日もカウンタ越しに美女さんに接近だあ。……と思うとまるで申し合わせたかのように奥から出てきた男性店員と入れ変わった。

「え」

思わず声が漏れたが、店員は気にする様子も無く、アイスを買うクレイジーな(?)学生に対してもロボットのようにマニュアル通り

の接客をこなした。部活もせずに不完全燃焼な俺の、ささやかな楽しみが……

俺の心の嘆き 八十五円

店員Aへの怒り 二十五円

この野郎、店員Aの分際で……バツが悪くなつてそらした視線の先。レジスターから吐き出されるレシート。

俺は確かに見た。

印刷された、

『オレノナゲキ 八十五円

Aヘノイカリ 二十五円』

意味わからない商品名と、額面。

さすがの俺も、こんなのを目の当たりにするのは初めてだ。自分でやつといて（あくまでおそろくだが）思いつきり噴き出した。うわゝ、俺、すごいじゃん。なんて思っていると、普段どおり低額なレシートにそうするように、店員は無関心に破り捨てた。

え、あんた今の見たろ、と思ったが、まあ大したことじゃ無いので、すぐに一歩引いて友人の会計を見守った。

それから、美女さんにかまって欲しいばかりに買ったアイスを食べながら、ちよつと心に寒さを感じながら家路に着くのだった。

次の日、なんだか近所で連続猟奇殺人なるものが起きているらしく、（実際は結構前から始まったものらしくいが今日の朝たまたまニュースで目にした）よくよく注意してみると警察やら怪しい人らやら、多分ホウジュツシとかいう世界のひとなんだろうけど、が町でちら視界に入り、なかなか物々しい空気に包まれていたらしい。

そして、その日が、俺を非日常へいざなつた日だった。朝からずつと頭に響くように耳鳴りがしてた気がするが、それだけでなくただ本当になんとなくだが、空気が張り詰めたような？ 感じがしたあの日。

いつものあいつはなぜか連絡無しに欠席。俺は一人で帰宅すること

となる。

体調不良とまでいかないもどかしい症状に悩まされた俺は、きっとコレはアレだ、美女さんが足りないんだ！ という結論に至り、あの店に寄る。

ただ、レジにいたのは店員A。美女さんいない！

……帰ろうかな。

回れ右し、2秒間停止。おもむろに頭上に手をかざす。足を前に出してプラプラしてみる。

うーん、俺ってばクレイジー……じゃなくて、自動ドアが開かない。ただそれだけだ。

ちっ……そっちがその気なら……！
いいよ、一品買ってくよ。

今日は確かに少し腹が減っている。アイスではなく、もつとしつかりとして簡単なもの。レジで「あんまん一つ」粒あんだつたらぶっ殺してやる。（誰を？）

表示はよく見れば粒あん

ついてねえなあ。

豆はいらねえ プライスレス

……来るか？

吐き出されるレシート。

来るか来るか？

『マメヌキデ 0円』

「キタ ！（爆笑）」

二回目ともなりやさすがに店員も気づくだろ、大爆笑……って、あら？

破り捨てた。ただ、前回とは何かが違う……？ 固い顔ながら感心したような複雑な物言いでこう言った。

「迷惑だな、機械干渉型か？」

……はあ？ 迷惑といわれましても、ん？ 俺のせいって気付いてる！？

「いいえ、A型です。さそり座の。RHはプラス」

とりあえずはぐらかす、さっさと逃げた方が得策だったかもしれないが、自己顕示欲つてのが少しあったのかもしれない。

「ふざけているのか？」

ん、旗色悪し。というか、口数が少なすぎて何を言っているのか意味が見えてこないぞ、この人。

「いや、ふざけてないっすよ、少なくとも小学校5年？ の時点ではそのでした。今は機械なんかかも知れませんがね」

……そういえば機械干渉型……とかいつてたな。何の話？ 俺のスーパーな能力の原因を知ってるってことかな、そんな人いたんだ。

「ちよつと来い」

腕をつかまれた。半ば引きずられた。奥の倉庫へご案内。

うわああやばいって！ 犯される！？ っていうか、数日前に目にしたニュースのアナウンサーの声と映像がフラッシュバックして、本気で身の危険を感じた俺は人生至上初の、全身全霊をこめたパンチ！！

異常なほどの手の痺れ？ っていうか、興奮状態だったせいかパンチを繰り出してから、大量のお菓子やらカップ麺やらが俺に向かってぶっ飛んで来て右手に例の痺れを感じるまでが切り取られたように思い出せない。どうやら店員Aは俺のスーパーアルティメットパンチで吹っ飛んだ拳句棚に衝突、反作用で棚の商品がぶっ飛んできたようだ。

って理解してるうちに立ち上がってコメカミから流れをつくる血を手で拭いながら一言

「今の……ということはいや、しかし……」

日本語になってない。

……イッチャッタ？

「だつ大丈夫ですか!？」

ぶつ飛ばしといてこの一言。実際まじで怯えてた。

「いや、心配無い」

「えええ……あ、あの。血っ血……あ、す、すいませんでした……」
何で謝ってんだ？ 俺……。どっちが悪いともいえないような状況じゃないか？

「それよりも……自分を知らないのか？」

質問の意味を図りかねた。自問自答してるのか？ やっぱり頭はま
ずかったかなあ、っていうか、俺ってあんなパンチ打てたのかよ？
思わず、痺れた右腕をさする。

「本当に何も知らないんだな」

「えっお、俺ですか？」

お兄さんは、棚から落ちてきたのであろう小さなホコリの塊を手の
ひらに載せて、

ぽふっ

一瞬だけ塊が紅く染まった？ ……燃えた!？

急に連れ込まれて、パンチかました相手に、いきなり手品を見せら
れて、俺はもう何がなんだか。

「なんですか？ 今の……？」

別にタネ明かしを求めている訳ではない。何のつもりでいきなり一
発芸？って聞きたかったのだ。

「お前も出来るだろ？」

仕込んでねえのに出来るわきゃねえだろ!! って一瞬思ったけど、
そうだ、俺ってば超能力者だったつけ。

物は試し。やってみた。

……

ぽふっ

まあ、そんなこつたろうと思ったけどさ。

……て、すげえなおい、俺いきなり出来たよ。

「……なんで分かったんですか？」

「俺は法術士だ」

「へえ、ハウジュツシさんには何でもわかるんですね……え？」

この兄さんは、法術士？　で、なんか火が出て、俺もなんか火が出て、……俺も、法術士？

「俺も法術士！？」

「そうだ、おそらくだが、特異なタイプだが、自覚が無いことから自然発動型、先ほどの空気圧を下げることによる拳の高速化からして、物理干渉を起こせるのだろう」

「それ……って何、すごいんですか？」

「正直、自然発動はかなり珍しい」

「……はあ」

なんのこっちゃ。

前触れも無く（あるはずないのだが）裏口のドアが開き、捜し求めていた美女さんが姿を現した！

「あら、その子は誰？」

「ああ、ユーニか。さっき見つけた」

美女さん、もといユーニ……ユーニさんの登場に心持いやな顔をしたのは気のせいだろうか？

「力を御することはできていないが、自然発動型だ、まだ若い」

「あら、使えるじゃない」

「使える、て、物ですか？」

「どうする？」

「あなたが磨きなさいよ」

「なぜ、俺がそんなこと……」

二人して必要最低限の会話、外野の俺はなんか取り残された感じ。なんとなく状況はまずい方に行っている気がする、嫌な感じが拭えない。

「あなたが拾ってきたんでしょ？　ならあなたがお守りをするべき

じゃなくて？」

「その必要は……」

「あら、彼女の言うことが聞けないの？」

どうやら恋人関係のようだが、何かずれている気が……

「いつ、お前が彼女になっ……！？」

急に言葉が止まり、不自然に思うと、ユー二さんがヒールで脚を踏みつけていた。

兄さんの黒い靴に、何かが染み出している気がしたが、きっと気のせいだ、そうに違いない、そう信じたい。

「あんまり口答えしてると……コロスヨ？」

素人でも分かるあまりにも壮絶な、殺気をみなぎらせていて、思わず「ひっ！」

小さな悲鳴が漏れてしまっていた。聞かれた！！？

こ……コロサレル？

が、こつちに向き直ったユー二さんの表情は恐ろしいほど柔和なものだった。美しい……でも、こ……怖いよおお……

「ねえ、僕は、こつちの世界に興味があつて？」

これは、脅迫か何かか？　っていうか、俺はユー二さんに

「興味津々ですー！」

いろんな勢いで即答だった。そうでないと俺は死んでいた気さえした。

……とにかく、そんなこんなで俺は法術士の世界に足を踏み入れる事になったのだ。

「そうだ」

帰り際、兄さん、更に奥の部屋へ。

「これを読んでおけ」

見た感じ小説版バトルロワイヤル2冊分な量を貸していただいた。うええ。

「でも、俺まだほんとにやるかどうかは……」

「残念だが、ユー二にああ言った時点で……」
言いかけて俯き、目頭を押さえた。

2 BOX ULTRA MILD

仕事も無いのでぐっすり寝たら、起きたときは昼の十一時をさしていた。

ぼんやりと、なんも考えないで煙草を吸い始める。

この一本で今吸ってる箱がちょうど切れ、所持数は二箱＋新しく買ったシガレットケースに常備された八本。

金もあるので、仕事もメシも心配しなくていい。

真理が俺の寝てる間に来た様子は無い。

大体来ていたら、せつかくの休日なのに起こされているが。

いや、休日というのも筋違いか？

探偵なんて仕事が無かったら休日、仕事のある日はそりゃ仕事だ。

毎日の休日にたまたま仕事を入れられてしまうようなものだ。となると休日は俺にとっては平日のようなもので、ならこれは休日といわず平日なのか？ いや、だが働く日こそが平日という気もする、休んでいるから休日なのか？

……ダメだ。職業病が出た。

探偵なんてやってると急にろくでもないことで考えすぎちまう。

とにかく、今日はゆっくり休める、はずだ。即日の依頼が来なければ。

昼時も過ぎ、適当に事務所の窓から顔を出して煙草を吸っていると、せまつくるしい路地に、一台の高級車が、走るとはいいがたいゆつたりとした速度で進入してきた。

普段、事務所の前の道の車の交通量は少ない。高級車となれば、なおのこと。

ちょうど真下あたりで、車が止まる、ああ、お客さんか。めんどくさいな。

近くに泊めただけかもしれないという考えもあったが、あいにくこ

の近くに店や人が住んでるところは一つもない。廃ビルに囲まれた非常に静かな場所だ。

家賃が非常に安かった、というかタダ同然だったからここにしたいんだが、問題が出来た。

……ここまで客が来ない。

おかげで一時期そのタダ同然の家賃さえ払えなくなりそうなきが あった。

今はちよくちよく下請けの仕事を回してもらっているからその心配は無い。

車のドアを開けてSPらしき人物が二人出てきて、一つのドアを開けた。

中から出てきたのは一人の美女、きれいだ。

……というかユーニだった。

仕事の依頼？ あのユーニから？ 本能で身の危険をちょっと感じた。

俺の第六感に反応しようがしまいが、事は進んでいく。つかつかとハイヒールの音が階段を上ってくる。

とりあえず居住まいを正すと、事務所のドアがノックされる。強くは無いが、有無を言わず開けさせるようなノック。

「叢紫くん、いる？」

「開いてるよ……」

ちようどドアの向かいに位置するソファに腰掛けたまま、声を掛ける。

ドアを開けたユーニの顔は、相変わらずのポーカーフェイスの笑顔。この笑顔に、昔はめられた。

「こういうときは、男の子はちゃんと女性をエスコートしないとダメよ？ あなたがドアを開けなさい？」

「以後気をつけるよ」

真摯に聞いているような感じで答える。内心では従う気は無い、あくまでフリだ、あまりこの女の言うことは聞きたくない。

「で、ここにきたから仕事なんだろう？」

「ええ、そうよ」

向かい合うようにユーニが座る。

ユーニが持つてくる仕事なら、おそらく荒事。しかも飛び切りハイなやつ。

いや、もう一回はめようって言うのか？

「なぜ、俺、なんだ？」

俺以外にも、こんなことしてるやつは意外に多い、それに、法術士として稼ごうとしてるやつならもっと多い。

「この前の活躍を見て、かしらね？ そんなに警戒しなくていいわ、今回は本物」

何か裏がありそうな言い方、しかしその真意は笑顔の裏に隠され読み取れない。理由を聞いたってそれほど意味を持たない、詮索する必要は無い。

「依頼内容は？」

「あるものの奪取。相手は最近頭角を現し始め、この、街でも大組織になった『ソルエッジ』よ」

ソルエッジ、最近街の裏側で回り始めた名前だ、確か、かなり暴力的な集団だったはず。

そもそも、なぜ、存続出来ているのか、目的はなんなのかがはつきりしていない組織。ソルエッジという組織の行動は、徹底的な破壊であることが多かった。そして、その一つ一つの行為の意味さえ定かではない。テロ行為とも取れる破壊行為は、テロとしての根本的に存在するはずの、政治的、もしくは宗教的な、信条、信念というものが無い。

「ある物、とは？」

「これよ」

テーブルの上を滑ってきたのは複数枚の写真。

手に取り見比べていく。

写真に写っているのはすべて黒いキャリングケースのようなもの。

それ自体が光を吸収するような、まったく光沢の無い黒い金属で出来ている。

名前は忘れたが、核の直撃にも耐えうるといわれている術化練成金属だったはず。そしてその重量は鉄並み、重くはあるが強度の割には軽量なほうだ。

少し興味が沸いてきた。やるなら、本気で行く。

「なんでしたか？ この合金の名前は？ いったい何がこんな頑強なものに入っているのでしょうか？」

自らの口調を仕事用に変化させていく。相手の様子を常に伺い、自らが手に入れるべきは全て手に入れようとする姿勢。

「スナプライト軽合金よ。よくわかったわね。中身は……そうね。知りたい？」

「あなたがそういうのなら、けっこう。依頼主に話す意思が無い上、俺には関係のない話。仕事こなすさい出来るだけ相手に立ち入るな、は基本事項です」

内心ものすごく気になる、手に入れても開けはしないが、情報集めて探ってみるか。

「よくわかってるじゃない」

関わってしまったえば命の保障も無い可能性が出てくる。出来るだけ首を突っ込まないほうが懸命だ。中身が本当に今回の仕事に関係ないのならば。

「あなたのことです、この情報が得られなくて俺の仕事が失敗に終わる、ということは無いと信じておきます」

そう、ユーニからの依頼だ、ならば彼女が必要な手札を切らない意味が無い、切らなくて負けた、なんて醜態を彼女が晒したいはずが無い。

「そうね、それ自体に問題はないわ、あなたが、開けずに、私の元まで持ってきてくれるのならば」

「つまりは、開けるな、と？」

初めからわかってたがな。教えないといいながら、開けていいなん

ていう奴は、黄色い救急車に運ばれた方がいいかもしれないとさえ俺は思う。

「ええ」

「わかりました」

「で、引き受けるの？」

先ほどとさほど変わらぬ笑顔、だが、そこに宿るものは、優しさでなく、強要させる恐怖でもなく、相手を自然と従わせるような、魔力に等しい魅力。

「引き受けましょう。では、私のこの依頼での役目は？ 依頼品の在り処の特定からでしょうか？」

引き受けると決めたのは別にその笑顔じゃない、来た時からなんとなくは決めていた。

「その必要は無いわ。今回あなたたちを必要とするのは、探偵としてではなく、法術士として。情報はこちらから渡すわ。それと、今回はあなたたちと共に行動させるメンバーがいるわ」

共に行動するということは、同業者、なら、たいていの場合には友好的ではない。自分と同じ仕事をしていてそいつに仕事を取られたら誰だって嫌だ。こういう場合の連携作業は、足の引っ張り合いで逆効果に働く確立が低くは無い。

「その点なら安心して、あなたとは旧知の仲、久しぶりの仕事での再会、というところかしら？」

こちらの考えを見透かしたかのように、ユー二が言ってくる。見透かすのは俺の仕事のはずだ。

どうやら、俺の知り合いのようだ。仕事で何度か共にしたやつだろう。なら心配は無い。

真っ先に頭に浮かぶ顔があったが、そいつなわけは無い、何せ今は彼女の彼氏役、下僕といっても言い状況だ。ほとんどつききりでユー二にいるから、離れられない、ユー二が離さない。

いや、ユー二の気分次第では、今回の仕事のパートナーになる可能性が無いわけでもないということか。

集合場所に着けばわかることか、と、探偵としては致命的な、樂觀的、に考えた。

「では、この契約書にサインを」

ふふっ、と笑みを漏らしながら、手早くユーニが契約書にサインした。

もし、昔ちゃんとこれをしていたら、俺たちははめられることは無かった。彼女の笑みも、昔のことを思い出しているからだろう。

「それじゃ、私は行くわ。段取りはこの紙に書いてあるわ」

そういつて、何枚かのクリップされた紙を机の上に流し、俺の元に届けつつ彼女はドアに向かっていった。

俺は左手でその紙を取りつつ、右手で携帯を取り出し、真理の番号を呼び出す。

四コール後、彼女は大体そうだ。

「よお、真理か、仕事の依頼が入った」

きっかり四コール後、真理が携帯に出ると共に、ユーニが出て行ったドアの閉じる音がした。

集合場所は、事務所からの最寄の、地下リニアの駅に面した大通りにある、まだ新しい店舗のこぎれいなカフェだった。

入り口で待っていると、右手の方向から大声を出して手を振ってくる影、剣龍司 真理だ。

「おまたせー！」

「別に待ってねえよ」

吸っていた煙草を店の前に置かれていた灰皿に捨てつつそっけなく言う。

店の前に置かれている灰皿、嫌なにおいがするな。

「で、仕事って？」

「今回はチームを組むやつがいるから、ここで合流して、詳しく話し合うことになってる。だからそのときに話すよ」

「まだ来てないんだね？　じゃあ中で待ってようか」

「ああ」

あまり乗り気じゃない。嫌なおいがしてるんだ。

彼女はそんなことかまわずに中に入っていた、仕方なく俺も店に入る。

「いらつしやいませ！ お客様は何名様でしょうか？」

二十歳くらいの染め上げた茶髪が綺麗なウェイトレスが、手慣れた様子で聞いてきた。

「二名です」

真理がそれに答える、一瞬ウェイトレスの視線が俺と真理を見比べた。

「当店は全席禁煙となっておりますがよろしいでしょうか」

「よろしくない」

思わず反射的にそう言う。ウェイトレスが驚いて目を見開いた。

ほら、きた。だから嫌なおいがしたんだ。吸えないんじゃないこんなところにはいたくない。

「真理、俺は向かいの店で待ってるよ。一人で相手を待っていてくれ」

「ええー！？」

「うるせえ、見えやすいように窓側の席に座つとけよ」

俺は、とつとつその店を出て行った。

真向かいにあった店は、少し古ぼけた感じの、味が出ている喫茶店だった。

カランコロン、と入店を告げる鐘が俺がドアを開くと共に鳴ると、カウンターのほうから店員が黒髪の長髪とこじんまりとした制服のスカートをパタパタさせて早足でかけてくる。

「いらつしやいませ！ お客様は何名様ですか？」

メガネをつけた、高校生くらいの可愛らしいバイトの子だった。まだ働いて日が浅いらしい。しっかりとした接客だが、まだ動きがぎこちない。

「一人……煙草は、大丈夫？」

「はい、いいですよ。ご注文が決まったら伺いします」

……やはりまだ日が浅いらしい、少し口調が変だった。そんなふう
に思いながら去っていく後姿を眺めていた。

座った席は真理の姿が窓越しにしっかり見える位置。今真理が店員
に何かを注文した。

一本煙草を取り出し、ゆつくりと吸う。上に向いて吐いた煙越しに、
天井でのろのろと空気を攪拌している扇風機が目についた。

そのまま首を動かして見たカウンターの中には、人のよさそうな白
髪のお老人が立っていた。やることも無くて暇そうに、すでに磨き終
わったはずのグラスを磨いている。おそらくこのオーナーだろう。
時計に目をやると、時刻は午後二時三十分、集合時間の三十分前。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

店に入ったとき接客に来た子が注文を聞きにきた。周りを見回して
もほかの店員がいないから、ウェイトレスは彼女だけなのだろう。

「コーヒー、ホットで」

「はい、かしこまりました」

カウンターのオーナーのところへ戻っていく。真理と同じくらいの
長髪の黒髪が少し遅れて彼女の体についていった。

注文を聞くと、オーナーは豆を取り出しのんびりとした動作で挽き始
めた。どうやら挽きたてをいただけるようだ。

真理のほうに目を向けると、店員がトレイに乗せられたさまざまな
パフェを、全て真理の席においていた。その数4種類。

よく、あんな甘いものを、あそこまで食べるな。こっちまで甘った
るくなってくる。

太るんじゃないか？ と茶々でも入れてやりたくなかったが、あい
にく今は一緒の席にいないし、彼女の日ごろの運動量からしてみれば、
さほど問題の無い量だった。

うれしそうに口にはおぼる姿を眺めていると、

「コーヒーをお持ちしました」

自分の目の前にある机、つまりは自分の席に、コーヒーが置かれた。
ちょうど真理が三個のパフェを平らげたところだった。

いい香りのするコーヒーだ、飲まなくてもおいしいことが容易に想像できる。

シュガースティックの中身を半分ほど入れる。少量の砂糖は、コーヒーの味と香りを引き立たせる。

一口すすると、香りと苦味が口の中に広がる。熱さもちょうどいい極上、だ。時間が無いときに作るインスタントとは桁が違う。もちろん俺が真剣に淹れたときの味ともまるで違う。少なくとも、俺が飲んだコーヒーの中で最高の味わい。

おそらく、値段からして豆は上等だが最高級のものを使っているわけではない、ここまでおいしく作るのは淹れ方の問題だろう。教えて欲しいくらいだ。

今度から暇なときたまにここに来よう。煙草が吸えるところもいい。そうやっていろいろ考えてる間に時間は集合時間3分前になるところ。そろそろ相手が来てもいいころだ。

カラン……コロン……

この店に客が誰か来たようだ。入り口に目を向ける。

そこに立っていた男は、スリーピースのスーツを着、腰の前には、その服とはつりあわない日本刀を帯び、その鞘が右足へ向かって伸びていた。

秀麗な容貌に落ち着いた深き青の瞳と綺麗に整えられた金の髪を備えた、美丈夫とは、まさにこのこと。

「落ち合う場所を間違っているぞ」

その端正な作りの唇から発せられたのは、容姿に見合った落ち着いた男の声。

たしかに、旧知の仲で、久しぶりの、再会だ。だが本当にこいつだとは思ってなかった。

「八重刃……」

思わず、その男の名前が口をついて出た。

彼の名前は、八重刃 やえは 誠志 せいじ。かつての、俺の相棒だ。

とある事情によって、いま八重刃はユーニに彼氏として買われてい

る。ほぼ下僕に等しい関係だ。買われているというのがすでに彼氏彼女としてはおかしい。

「なんだ？ 早くあちらと合流して、行動を決定する」

八重刃があごで指すほう、向かいのカフェに目を向けると、真理がぎりぎり成年して無いだろう男の子に絡まれてた。

いや、絡まれているというより、双方の会話がかみ合ってなくて、単純な会話が長引いている感じ。その証拠に少年は焦りながら変なジェスチャーをして、真理が意に介していないように首をかしげている。会話が聞こえていないとただ少年が滑稽だ。

「あれ、誰？」

「今、俺が法術を教えている習い立て。今回の件に同伴する」

「ハア！？ そんなやつを現場に向かわせる気なのかよ！？」

「あの女の考えていることはわからない」

あまり表情は変わらないが、へこんでいるのは理解できる。

「……ああ、たしかに」

あの女とは、もちろんユーニのこと。

「あれじゃ埒が明かないな、とつとと合流するか」

いまだ珍妙なダンスを踊り続ける少年を横目に、煙草の火を消し、席を立つ。

「ああ」

右後方に、八重刃がついて歩く。いつもどおりの、なつかしのポジション。

コーヒーの代金を払い、二人で店を出た。

「ありがとうございます」

店員の声と、ドアの鐘が後ろで聞こえた。

真理のいたカフェの四人席に、俺、真理、八重刃、さつき真理と話していた少年が集まる。

俺の隣には真理、その前には、三種類のケーキが載っている。さすがに太るぞ。

幸せそうな顔をしてるが、会議の場面であまりこついうものを食べていて欲しくない。

向かいの席には、八重刃と少年、俺の前に八重刃、真理の前に少年だ。

「どりあえず自己紹介をしようか、俺は空煙叢紫、隣は同僚の剣龍寺真理」

「よろしく」

ケーキを口にほおばりながら、ぺこりと真理がお辞儀をする。

「俺は八重刃誠志、昔叢紫と組んでいた。こいつは諸田真、先日もろたまご法術に触れたばかりの新人だ」

「前、叢紫と一緒にいたのはあなただったんですか！ 誠志さんの名前、この町でも一二を争う近接法術士ってことで耳にしたことがあります」

同種の法術士としての羨望のまなざしを八重刃に向ける。

「俺だけで、その名は得られない。相棒に恵まれただけだ」

いつものように、謙遜した答えを八重刃が返した。だが、それは確実に嘘だ、たしかに、俺のおかげもあつたかもしれないが、こいつは数多もの研鑽を繰り返してきた。強さへの、努力を惜しまなかった。

「嘘だあ、こんなのと誠志さんじゃ天と地の差だって。誠志さん自身がんばったんでしょ」

くそ、俺をこんなと言つて八重刃には敬称をつけてやがる。

「人を過小評価するものじゃないぞ。案外、使えるやつかもしれないじゃないか」

くそ、二人して俺をコケにしゃがって。

「そうだねえ、で、君は新人ってことは仕事は始めて？」

話題が少年、諸田真に移った。俺のへのフォローはなし。

真は、特に印象が強いわけではなく、赤みがかつた様な色合いの黒髪、ここでの赤とは、赤髪の様な赤茶色のことではなく、一般の赤だ。その目のカラーは黒だった。

「あ、はい。初めてです」

少し顔を赤くして俯く、青春ってやつだな。知らない綺麗なねえちやんととしゃべって緊張してやがる。

「あ、ケーキ食べたい？」

俯いたときにちょうど視線に入ったものがテーブルの上にあるケーキだったのだが、真理はその動作をそう受け取ったようだ。今まで口に入れていたスプーンを差し出して訊ねる。

「あ、はい……じゃなくて、いい、いいです！」

しどろもどろのご様子だ。さらに顔を赤くして完全に俯いた。

「そう？」

首をかしげた後、さつきと同じようにケーキを口に運んでいく真理。

「ダッハッハッハッハ……」

爆笑だ、これは。笑えないわけが無い。いくらなんでも初々すぎる！ しかもハイついていいそうになってあわてて止めてたよ！ 昔自分にもこういうときがあった気がするがそんなことは無視して笑うしかない！

「な！？ なんですか！」

今度ははずかし紛れに俺に怒りをぶつけて顔を赤くしている。

「ウワッハッハッハ……」

「……？」

しかも原因が自分にもあるということとを真理が気づいていない！
ウける！

「死ね！ 死んでしまえ！」

ようやく気付いたか、初対面の俺に度胸ある怒りの言葉を飛ばしてくるが、拳までは飛んでこない。法術士の俺に勝てないのは承知してるようだし、こんな場所で喧嘩する気も無いらしい。

急に冷めた。いちいち些細なことで笑っている自分が馬鹿らしくなつたし、真がなりふり構わず暴走する馬鹿でもないことがわかったからだ。

「それくらいでいいか？ 早く仕事の話を進めよう」

まったく動じずに冷静に勤めていた八重刃が話を切り出す。

「ああ、そうだな、悪かった」

真顔に瞬時に戻し、仕事の話を聞く体勢をとる。真顔にするのも職業テクの一つだ、どんな依頼を受けても笑うようなことの無いようにする大切なテクニクの一つ。そのほか心情を悟られないこともあるが。

淡々と仕事の話を俺たちは進めていった。目的の品の移動時刻から移動経路まで、事細かに情報を八重刃が話した。敵の動向は丸裸だ。情報収集の仕事の効率の良さなら、ユーニは俺のはるか上に行く。ユーニが探偵を開いていたら俺の仕事はなくなっていた。もちろん、俺が実働部隊で、ユーニは情報のみを請け負っているのだから、そういう事態が発生することは無いのだが。

移動場所は、名前を聞いたことの無い会社名のビルから、海岸の倉庫群の十三番倉庫。

移動を開始する時間までそう長くは無い、さらに経路がわかってい
るのなら、移動前の厳重な警備がある可能性の中奪取するよりも、
移動中の比較的警備が薄くなる場面で行動したほうが吉だ。

「じゃあ、どこで襲撃する？」

「そうだな、おそらく相手も襲撃を想定してこの経路にしているの
だろう」

経路は、全て大通り、人の通行量が多い場所を選ばれていた。

この場合、大通りでことを起した場合、かなりの被害が出る。その
賠償金は、依頼主であるユーニが支払うが、もし、取り逃がした場
合、人生を金に変えても無理な請求が、こちらに来る可能性がある。
「なら、ここしかないな」

そういつて俺が指差すのは、海岸に面した浮島の形になっている倉
庫群と街をつなぐ橋。唯一人通りが少なく、相手方が避けては通れ
ない道だ。

「ああ、そこだな」

「大体、予定はこんなもんでいいな？」

およその段取りを決定し、そのあと少しの間細かい打ち合わせをした後、集合の時間まで自由行動になった。

俺は打ち合わせの間ずっと吸えなかった煙草を吸いながら、移動経路を適当にぶらぶらと歩いて時間を潰した。

左手で煙草を口に運んでいくついでに、腕時計を覗く。時刻は七時十分前。

完全に日がくれ暗くなりつつも、いまだ人通りが激しく一般人を盾にして進める時間帯だ。

橋に入り口に面する道に、俺たち四人は集まっていた。

「先ほど言ったように、七時ちょうどに敵輸送車はアジトを出発し、この橋を通過する時間は七時十七分前後。十五分間でこの橋を制圧する」

八重刃が、作戦の実行あたって敵の動向を再確認を行なっていく。

敵の配置は出入り口に八人、後は五十メートル毎に二人ペアが二組の計四人。この橋の全長は約二百メートルだから、護衛の合計は二十八人。さらに車の護衛は前後に一台で各四名の計十二人。出来れば合流される前に橋のやつらを沈黙させておきたい。

なぜ、制限時間が十五分かというと、二十分おきに護衛たちが定時連絡をいれるためだ。敵に悟らせないためには、定時連絡をいれ終わった7時以降に襲撃を開始しなければならない。定時連絡が無かった場合、相手の進路の変更や、輸送の中止の可能性が出てくる。

さらに、もし七時以降に襲撃し、敵を全滅できなかった場合、

「おそらく、車に乗ってる十二人はそれなりに強いだろうな。雑魚が混ざるとめんどくさいことになるぜ?」

こちらに不利になる可能性が高い。

「うん、そうだろうね。スピード勝負だ。だから私は別行動をとるんでしょ?」

真理もわかっているようで、気を引き締めている。彼女には今回、単独で倉庫側から奇襲してもらったことになった。一度二つの班に分

けて挟撃する案が出たが、倉庫側は巡回している警備がいて、感づかれずに移動するのが難しく、なおかつ倉庫群へつなぐ全ての橋に見張りがあるためその案は却下。そこで真理が単独で法術による翼を使って、敵後方の上空から奇襲する算段になった。ひとりにするのは心配だったが、仕方が無い。

「ああ、頼むぜ？　くれぐれも、ひどい怪我してくんじゃねえぞ？」
「わかってるって」

戦闘前だというのににこやかに返事をしてくる。そういえば一人、何もしゃべっていないやつがいる。まあ、新米がしゃべる機会などそもそも無かったわけだが。

「緊張してんのか？」

真の肩をたたきながら茶々を入れてやる。

そしたら本当に緊張してやがった、体が震えてやがる。がちがちじやねえか。

「だ、大丈夫ですよ」

恐る恐るといったようにこちらを見上げてきた、こいつは、おびえていた。自分の死を恐怖している目だ。

「ハア？　何なめたこと言ってるんだよ。近くで小便でも漏らされてもらっちゃ困るんだよ」

「叢紫さん！！」

よし、挑発に乗ってきた。わざと、笑ってやる。本当に笑ってるわけじゃない、芝居の笑いをする。

「ハッハッハ、おまえみてえな子供は家帰って縮こまってりゃいいんだよ！」

「あんたいくらなんでもなめすぎだよ！」

怒りをあらわにして殴ってきた、いい感じだ。

ゆるいパンチだ、さすがにあたってやるつもりは無い。左に頭をずらして避けようとした途端、何かに押されて、拳の軌道に押し戻されそうになる。踏ん張ろうとした途端、今度は足をすくわれ、そのまま何かさまざまな力に押され自分の体勢が訳がわからなくなり、

殴られはしなかったものの、こけてしまった。

少し唖然として真を見上げるが、明らかににはなつたのは不恰好なパンチだけ。

「なんだよ！ 叢紫さんなんか俺のパンチなんかでこけてるじゃないですか」

俺を侮辱しようとしつつも敬称付きなのが真らしい。少し息が上がっているが、心の揺らぎはなくなってる。

「ハハ、たしかに、しょうがねえな。で、緊張は解けたかよ？」

「あ……… すいません」

俺が意図したことをわかって、真が謝ってきた。震えはすっかり止まっているが、謝られるほどのことをしたつもりは無いんだが。

「なあ、今のは……… なんだったんだ？」

八重刃の耳元でささやいて問いかける。

「あれが諸田の使う法術だ」

「どうやって発動したんだ」

「彼は、自然発動型。主に、大気を操る法術を使用している。局所的な気圧の変化によって、風を巻き起こすことも可能だ。そして、本能的に、人をこかす術を知っていた」

「自然発動型か、そりゃすげえ」

驚かないやつなんていない。それぐらいに希少な存在だ。まったくモーションなしで法術を放てるというのは、反則に近い技だ。本来法術は、予備動作が出る。たとえば真理のような体内で発動させる法術でも、警戒すべき部位は外からわかる。だが、遠距離から隙なしの法術を放たれたら、ほぼ反応できない。問題として、たいがいの自然発動の法術士は力の総量自体が少ないということだったが。

「心配すんな、俺たちが必ずお前を守る、死なせやしないさ。俺だって、お前みたいな時期があったんだ。死ぬモンじゃないさ」

「嘘をつくな、初の仕事、それも真のような新米が無事にこの難度の高い仕事から帰れる確立は三割だぞ。俺たちがいたとしても五割

程度だ」

「八重刃！　こんなときまで素直じゃなくていいんだよ！　そもそも、それは近接法術士としてみた場合じゃないか。離れてりや安全なのは確かだぜ」

嘘をつくときの美味さはかなりのものなんだが、嘘が嫌いなタイプだから八重刃は困る。

「いや、いいです、自分のおかれた状況がすっかりわかってたほうが、気休めより安心します。まあ、気休めってわかりませんでしたけどね。それに、五割なんて十分っす」

やけにポジティブな思考してやがんな、まあ、これくらいの方がいいか。

「そろそろ時間だな、行くか」

時計は七時一分前。相手の定時連絡を確認後、行動開始だ。

煙草の煙を、肺の中に入れていく。

ゆっくりと吐き出すと、法力によって俺の正面に円形に広がり煙が固定される。

そこを指でなぞり、術化法陣の文様を描いていく。

今、発動させようとしているのは、橋をすべて包み込む電磁障壁。

「壁よ……」

小声で術を発動させる。

これで敵の連絡は不可能。派手に暴れてもかまわない。倉庫側も真理が塞いだから、直接応援を呼ぶことも不可能だ。

「一気に行くぞ」

一グループごとをまったく悟られずに倒すことも可能だが、それでは時間が足りない。あえて派手にやって敵をおびき寄せて一網打尽にする。

敵はまだこちらに気づいていない、俺が、先制攻撃を仕掛ける。

一網打尽にしようとしても、やはり先制出来るなら気づかれずに先制するべきだ。

煙を吐き出し、そこに右手で描き出しつつ、左手の煙草についた火でもう一つの法陣を描き出す。

「細き鋼よ……」

ごくごく微細な金属の糸が十六本法陣から飛び出し、音も無くそれは空間を渡り、八人の護衛に一對ずつ絡む。

ようやく敵は事態を把握した。

「瞬電よ……」

同時につむぎだしていた法陣から、鉄線に高圧電流が流れ、八人は何も出来ずに気絶した。

「流石だ」

八重刃が隣を駆け出しつつ呟いてきた。

今俺が行なった芸当は、法術の並行発動。それなりの高等技術を要する代物。力は分散されるが、応用次第では今のような相乗効果をもたらす。

「しつかり俺の後ろについてろ！ 真」

「はい！」

どんどんと先に行ってしまう近接法術士に、置いてかれまいと走る走り抜ける途中、俺が気絶させた相手の顔を見ると、見たことの無いようなやつらばかり、おそらくまだ実戦が少なく、手配書には載っていないやつらだ。ほかの橋の警備も全員まだ無手配の可能性が高い。

すでに八重刃が四人の敵を相手に戦っていた。

「殺しはタブーだ！」

「承知！」

鞘ぐるみで刀を腰から抜くと、石突で一人の胸板をついて失神させる。続いて横にいた相手の側頭部に柄を叩き込んで無理矢理意識を刈り取る。

八重刃が相手に何もさせないままその場にいた敵を全員倒したところ、後方から六人の増援が来た。

半分はすでに詠唱か何かを開始している。残りは八重刃に殺到しよ

うとしている。どうやら遠距離一人近接一人のペアでいたらしい。

「おい、真！ 出来るだけ大きい範囲でこっちから八重刃のほうへ5メートルほど風を発生させろ！」

真に指示を送りつつ、法陣を作ろうと煙草を吸う。

「そんな量細かい制御できません！」

「いいから適当にやって……」

あ……れ？ おかしい、息が、うまくできない。視界が白みがる。うわ、ヤベエ、気絶する。でも、何でだ？ なぜ今？ 理由もわからない。

視界全てが白く染まったあと、急激に暗転した。

「ねえ、ねえ！ おきて！ はやく！」

ぼやける視界に誰かが入る、え……っと、今俺は、

「やば！ 敵は！？」

「ふう、大丈夫、まだ車は通ってない。橋の上の人たちはもうノびてる。五分も気絶して無いよ。」

さつきから俺をゆすっていたのは真理だった。

それにしても、なぜ俺が気絶？

「起きたか、おそらく、気絶は諸田のせいだろう。彼には、戦闘している空間の大まかな減圧を行なってもらっていた」

つまり酸素濃度の薄い高山の上のような状態にしていたってことか、その中で体力ない俺が喫煙しつつ運動なんかすれば、気絶することだってあるだろう。

「たまげたね、そりゃ」

自分にあきれちまうぜ、そんなのも気づかなかったなんてな。敵の体力を奪うための法術だ、しかも、今の俺のように気づかないうちに体が重くなっていく。やはり自然発動型は厄介なやつだ。

「すいません」

「いや、謝らなくていい、こっちの不注意。大丈夫、もうならない」簡易の法術を築いて、自分の周辺の酸素の量だけを調節するように

すれば倒れることは無い。真理に至っては戦闘中常にベストの状態を保つために口内で酸素を精製してるしな。

「来たぞ」

見張りをしていた八重刃が静かに言う。目線の先には、三台の車。

「俺の、仕事だ」

立ち上がり、煙草に火をつけると、煙草の火で陣を築く。

「紫炎よ……」

だるい意識の中、法術を発動させる。赤き円から飛び出す力の奔流は、鉄さえ融解させるほどの青き炎。

巨大な炎の濁流は、敵の車全てを飲み込み、一瞬にして消失させる。予想通り、全ての人間が外に逃げ出していた。一人は目的のものを胸に抱えて、ほかの男に担がれている。どうやら非戦闘員のような戦うのは十一人。

思わぬ副収入だ。その面子は、どれも犯罪者。最近生死問わずになったばかりの活きのいいやつらばかり。さすがはソルエッジのやつら。

「殺してもいいぜ？」

「承知……」

冷徹な意思を静かに視線に宿らせ、八重刃が敵を睨む。そして、鞘に収まったままの柄を握り、彼独特の構えを取る。

「てめえ、ふざけてんのか！」

怒声を上げて、一人の男が八重刃の懷に飛び込もうとする。その瞬間、その体に左肩から股間に向け亀裂が入る。

怒声を上げるのも無理は無い。初見の相手からしてみれば、八重刃の構えは馬鹿にしているようにしか見えない。

腰を低くし、右肩を前にして鞘に収めたまま剣を構えれば、たしかに居合いのようだが、彼の場合、刀の向きがおかしい。逆なのだ。立っているとき、鞘は腰の前から右足へ向かって伸びていた。そのまま構えれば、もちろん鯉口は敵とは正反対の方向に向くことになる。

だが、そこから、彼は敵を斬った。両手を交差させる形で左手で鞘を持ち、右手で刀を抜く。刀は後方、上方を経由して大きく弧を描きつつ、敵の体へ吸い込まれるように打ち下ろされた。異形の構えから繰り出された、異形の縦の居合い斬りは、鯉口を切るのと敵を切り伏せるまで、ほぼ同時。

一瞬の出来事に、周りは何が起こったのかわかっていない。悠然とした動作で八重刃が刀を納める。

収めているところを、さらに二人が襲おうとする。

「遅い」

振り返るように腰をひねりつつ、すばやく手を入れ替え左手で抜刀し、横一文字の斬撃。同時に二人の胴が割れる。

さらに追い討ちをかけるようにいなくなった二人の壁をすり抜け、真理が敵に追いつく。迎え撃とうとして振りぬかれた近接法術士の刃をかがんで避ける。

「我、氷狼の白き腕を左手に纏う！」

左腕周辺の空気が急激に冷却され、ダイヤモンドダストが発生した。敵の刃の斬り返しにその拳を叩き込む。途端に刃が凍結し、霜が表面につく。さらに流れるように右腕での剛力の一撃を加えると、刃は粉々に破砕した。

鋭利な散弾と化したそれは、至近距離にいた真理と武器を持っていた敵に迫る。あらかじめ想定していた真理は散弾を急速後退で回避するが、敵は反応出来ずに直撃。ぼろぼろになって地面に倒れた。ちょうどその時、敵の一人が遠距離法術を完成させた。

巨大な雷撃がこちらに迫る。俺に当たる位置だが、その場を離れずに術化法陣を築くことに専念する。

「叢紫！！」

動かない俺を見て驚き、何とか避けさせようとこちらに近づいてくるが、それよりも早く俺の前に一つの影が雷撃との間に割り込むように滑り込む。

「崩刃」

雷撃に向かつて、その影が刀を振り下ろす。瞬間、まるで、そこには初めから電撃系法術など存在していなかったかのように、消え去る。跡形も無く、無に帰る。

「閃光よ……」

八重刃が敵の法術を消すと同時に、俺の法術が完成。法陣の周囲から十条の光が撃ち出され大きく弧を描いて迂回し、光条を帯びつつ敵を追尾、二人の敵に殺到する。

俺が放った光弾を追うようにして、八重刃が敵集団へ迫る。光弾の直撃を受け崩れ落ちる敵の横を、八重刃が駆け抜ける。

法術を消された敵は、啞然としたまま体に穴を開けて倒れた。

八重刃が使う、独特の法術は、正確には法術を組み上げる過程に存在するものであり、法術といえるものではないと彼は言っていた。

法術とは本来、複雑な計算式により、無を有に変える計算を築き、何も無い空間から有を作り出しているものらしい。なぜ、らしい、かというと、法術士は普段法術というものを感覚で使用しているため、その大半が根源まで理解をしていない、俺もその一人だからだ。で、その数少ない法術の原理の理解者である八重刃は、敵法術を解析、改変を行い、さらに新しい計算式を代入し、ゼロから生み出された有をまたゼロに戻すという、敵の法術を消し去る法術を用いる。さらに八重刃は、法術の過程で生み出される膨大な式を用いて、湿度や地面の摩擦係数、風力、などの周辺の事象の計算、統計学を用いた行動予測から、さらには敵体内に流れる筋組織を操る微弱な電気信号までも読み取り、先の先を取る法術が使える。つまり、ごくごく近い未来を予測することが出来る。

煙をいったん肺にため、吐き出して空間に停滞させる。第二撃を準備するため、すばやく法陣を描き出していく。

「真理！ 前衛を一人頼む」

俺や真のいる後衛のところまで一度引いていた前衛二人が、再び前へと突進する。

残る敵は、後衛の法陣形成型が一人と、詠唱型が一人、武器を持つ

た二人の前衛。武装強化型と物質生成型。もう一人、武器を持っていない体質変化型の前衛。

八重刃が先ほどと同じ、抜きつけの一撃を物質生成型に打ち下ろすが、敵は反応し、左腕に法術で紡ぎだした鉄の盾でそれを防いだ。右手に持った得物は八重刃と同じく日本刀。剣術の心得はあるのか、勝ち誇った笑みが口に張り付いた。

居合いには、鞘の内にて勝敗を決す、という言葉がある。すなわち初撃の速さにあり、刃が鞘から放たれた刹那には敵が倒れてなきやいけない。居合いの使い手はその技術のみを突き詰めているため、もし最初の一撃で相手が倒せず、斬り合いにもつれ込んだ場合には、存外もういということがよくある。

しかし、そんな穴が八重刃の剣術にあるはずが無い。居合いはたしかに恐ろしかったが、彼が格闘戦で常に勝者であるのは、刀を鞘に戻さなくなつてからの千変万化の攻め手があるからだ。

鞘に戻ることを忘れた刀は、目にも留まらぬ速さで無数の斬撃を縦横無尽に疾らせる。

相手は盾と刀を使って必死にそれを防ぐが、連撃に意識を取られ死角ができたところを、体中を覆う法術の鎧の隙間を正確に射抜く八重刃の膝蹴りによって均衡が崩れ、ものの数秒とせずに決着がつく。

「凍れ……」

術化法陣前方で冷却され、液化した大気の奔流を、後衛の一人に発射する。軌道上にある水分を固体化させ、周辺の物体を凍てつかせながら、相手の元へ向かい、見事命中。完全な氷と化した人間は、風に揺られて倒れ、床に触れた途端に砕け散った。

流れるようにして次の法陣を俺は描く。標的はもう一人の俺と同系統の後衛。敵の法術を観察し、大体の法術の種類を予測し、すぐにも相殺できるような法術を選択して描き始める。これで決着がつく。

ほぼ同時に、真理が体質変化型の敵と戦闘を開始する。同じ体質変化型同士、すでに話になっていなかった。はるかに法術の数が多い

真理が圧倒している。相手もよくもっているほうだと感心するべきかも知れない。

「我、火竜の赤き炎を吐息に纏う！」

すつと大きく深呼吸すると、肺の中の空気を全て吐き出す。呼気は獄炎に変わり、敵の足を焼いた。

重度の火傷によりショック症状で気絶した相手を置いて、後方の法陣を築く相手に迫ろうとする。いつもと違う、真理らしくない。この人数なら、真理は炎で気絶した敵までも、簡易の治療を施すはずだったが、それをしないで突っ走ってやがる。まるで何かに焦っているようだ。

撃ち出したばかりでまだ俺の法陣は組みあがらない。

相手の後衛を見る、やはりあまりいい法術じゃない、だがその分完成するのが早い。おそらく後三秒ほど。

真理が完成しようとする法術を潰そうと迫るが、距離が遠すぎる、あのまま突っ込めば至近距離で法術を食らうことになるはずだ。彼女もいつもならそれをわかっているはずなのに、前進が止まらない。確実に焦ってる、だが何を？

いや、理由なんてどうでもいい、とにかくまずい、このままじゃ真理が！

八重刃は残り一人の前衛と戦っている、助けに行ける状況じゃない！俺はどうやって走っては追いつけない、今から最速で法術を築いても間に合いはしない！

「避ける！ 真理！」

叫ぶが、その時相手が急に足元をふらつかせ、法陣の形成が遅れた。ぎりぎりのタイミングで、結局法術を放たれる前に真理が敵に到達、鳩尾に鋭い蹴りを食らわせ吹き飛ばした。

今の崩れ方は、おそらく軽い貧血、眩暈の類だ。どうやら真の法術が効いていたらしい。

八重刃のほうに目を向けると、すでに敵は事切れていた。

「でかしたぞ、真。助かった」

全ての敵を倒し、使う必要の無くなった法術の煙を散らしつつ、後の真をほめてやる。

「あんたに言われるほどでも」

なんだ、今の言い方？ まだ根に持っているのか？

一言かけている間に、八重刃が真の傍らについた。

「よく、生きた」

「はい！」

やはり役に立てたことがうれしかったようだ。明るい笑顔を八重刃に向けていた。

真は八重刃に任せておくことにして、それよりも気になるのは、真理だ。

「おい！ 真理！ 何であんな危ないことした！」

「別に……。どうせあんなの当たらなかったよ！」

なんだよ？ まるで駄々こねる子供じゃねえか、真のほうがよくばどました。

「何でつてきいてるんだよ！」

「いいじゃん、なんだって！」

今の言い方から察するに、なんでもないわけじゃなくて、何か理由があったわけだ。しかし、すねて顔を背けたままで、どうやら話してくれそうに無い。

「はあ、しょうがねえ、なんだっていいよ。とにかく、無事でよかった。あんま心配させんなよ？」

ほんと頭に手を乗せてやる。はっとした顔をして真理がおれを見上げてきた。

「うう、ごめん」

「ごめんって？ なんか謝るような理由だったのか？」

「いいの、なんでもない！」

まだ不機嫌なようだ。さて、何が悪いんだろうかね？

「さて、ケースのほうはどうしようかね？」

ケースを持っていた運び屋らしき人間は、法術の戦闘のあまりの迫

力に圧倒され、何もされていないというのにノびていた。
気絶しているというのに、しっかりと抱えられているケースを男の
体から引き剥がす。

持ったとき、妙な違和感のようなものを覚えた。

「ん？ これは……」

中身から感じるのは、異常な量の法力だ。高密度の圧縮の掛けられ
た法力が中に目いっぱいに入っている。密閉されたケース越しにそ
の圧力を感じるほどだ。大体、中に入ってるものが予想できた。

「さて、これで八割方仕事は終わりだ。後はユー二に届けるだけか」
「それは、俺がやっておこう」

「いや、いい。ちよつと直接話したいことがあるんでな」

警察に連絡を入れ、処理を頼みつつ、押し付けつつ、惨状と化した
橋を後にする。

ケースをユー二に渡す場所は、結局俺たちの事務所になった。

俺の前にユー二が座っている。そのやや右後方に八重刃がボディガ
ードのように立っている。

隅のほうで、真が座っている。なぜ八重刃と並んで無いかというと、
「誠志ちゃんと一緒にいる時間を邪魔しないでくれる？ ついでに
言うておくと、弱そうなボディガードがいると、逆に狙われやすくな
るのよ」

らしい、かなり辛辣な言葉だと俺は思う。俺が言われたわけじゃな
いのでどうってこと無いが。

「これが、依頼の品になります」

横に座っていた真理からケースを受け取り、テーブルの上におく。
まだ取っ手から手は離さない。

「で、これについて、二つほど疑問点があるのですが？」

「聞いてはあげるわ。答えるかはわたし次第」

「それで結構。それでは、一つ目です。正直これは推測でしかあり
ません」

聞く体勢に入ってくれている、何も言わないでただ続きを促してき
た。

「これは、高濃度の法力が大量に詰め込まれていた。もしかしてこ
れは、展開式の巨大法術ですか？ 解凍装置を使つてかなり大規模
な法術が発動するのではないのですか？」

「ご名答。それで？」

推測は間違つていない。そもそもこんな異常な量の法力、これ以外
に考えられないんだが。

「一体これで何をしよう？」

「さあ？ 私に聞くことじゃないわ」

そう簡単に答えてくれないか。そもそも俺の考えが間違つてい
たら本当にユーニに聞いてもしょうがないが。

ようやく俺はケースから手を離す。

それを後ろにいる八重刃が抱えた。

「それじゃ、用件は済んだかしら。もういくわ」

「待つてください、少し、話に付き合ってくださいませんか？」

上げかけた腰を、もう一度下ろしてくれた。

よし、こつからが俺の名推理の始まりだ、名推理と書いて、あてず
っぽうと読むものだ。

「じゃあ、何から話しましょうか。いろいろと調べてみたんですが、
そうですね、まず、どういった経緯でこの代物がソルエッジに渡つ
たかを話しましょうか？」

ここで、間を作り、話にリズムを刻むために、煙草を吸いたいんだ
が、いかんせんユーニの前だ。それは出来ない。

いや、待て、ここで俺の一つの推測が出来た。

「すいません、煙草を吸ってもよろしいでしょうか？」

「ええ、いいわよ。この部屋がすでに煙草くさいからどうでもいい
わ。早く出て行きたいからさっさと話を終わらせて」

あきれ返った表情を全面に出してきてユーニが承諾してくれた。

「じゃあ、失礼」

やはり、予想通り、すでにユー二には耐え難い空間だったわけだ。ユー二の、不快度が十から十二に変わろうがかまわないという寛大さも考慮に入れた俺の交渉。

煙草に火をつける。煙を吐き出すときはユー二のほうに行かないように注意する。

「で、どうやって渡ったかということでしたが、やはり、強奪でしたね、それも、ここ一帯で最大勢力の、マフィア『オルタネイト』の幹部の手から奪われたものでした。幹部がどうやって手に入れたかは調べませんでしたけどね。それをやると、堂堂巡りになるもので」

もう一度吸い、紫煙を吐く。換気扇を回し、窓も開け放つてあるというのに、やはり煙は空間に停滞する。

「この『オルタネイト』は今、次期党首候補が二人いて、幹部同士の勢力が二分化されています。これを奪われた幹部は現党首とは血縁関係の無い次期候補、デビット・ハンス側の者でした、まあ、どちらについていたとしても私刑は免れません」

テーブルの上においてある灰皿に押し付け煙草を消すと、新しい煙草を口にとっていく。

ソファから立ち上がると、少し部屋の中をうろつく。真が興味津々、だがいつユー二の逆鱗に触れてしまうのだろうかという恐怖を混ぜた表情でこちらを見ていた。どうやら十分に彼女の怖さは知っているようだ。

「次に調べてみたのは、ソルエッジが、これをどうしようとしていたのかというものです。かなり苦労したんですが、何とか調べはつきました。どうやら、これ売りさばき、資金源にしようとしていたらしいのです。売買先は、カジノ『JD』。このカジノ、ただ賭博をしているかと思いきや、よく調べてみると裏でオルタネイトに繋がっているようです。おそらく、資金洗浄のための賭場でしょうね。よくある話です」

ユー二から遠く離れたところで、窓から煙を外に吐く。空はのんき

に雲が流れる晴天だ。

「そもそも、ただのカジノがこんな兵器を買うはずがありませんね。ただ名を使っただけでしょう。このカジノ、どうやら次期候補、うまく調べられず、相手デビットが血縁関係ではないことから現党首の実の子供だろうという推測しか出来ませんでした。その次期候補側のもののようです。これはどういうことでしょう?」

「どの点について?」

そう、この問いにはさまざまな疑問が浮かぶ。

この際、子供は一体誰なのかという点は考慮する必要は無い。必要なのは、今回の依頼についてだけだ。

「まず、奪われた品を買い戻す点。さして重要なものではないものを、一方的な損害をこうむり買い戻す必要があるのでしょうか?」

「同じ組織といえど対立関係にあるのよ? 買い戻すというのは適切な表現じゃないんじゃないかしら」

あえて、俺は間違った問いをした、それを冷静にユー二が訂正した。「そうです、その点です。どちらにせよ、なぜ、なのです。あえて対立関係にある、敵といってもいいデビット側が奪われたものを買取り、精神的優位に立とうとでもしていたのでしょうか? いえ、違うのでしょ、おそらく今回は、俺たち雇われ法術士を利用した、対立勢力の排除」

「どうして?」

「私が調べたものは、先ほど話したケースの出所についてと、買い手についての二点。それと後もう一つ、生死問わずとなっていた、運搬役の犯罪者たちについて。調べた結果、どうやらソルエッジの人間だけではなく、私たちのように雇われていた者もいたようです。再び席に戻った俺は、吸っていた煙草を終わらせ、灰皿へと棄てるが、まだ次の一本は吸わない。

「彼ら、雇われた者には共通点がありました。全員、オルタナイトに多かれ少なかれ関わっていたという点です。つまりは……」

あえて言葉を切り、合いの手を待つ。ここでだんまりだったら、興

味が無いというわけだ。

「つまりは？」

ユー二はどうかやら俺の推理を面白がってくれているようだ。ならこの調子で続けよう。

「つまりは、まず、実の子供の側、少し長いですね。性別がわからないですがここでは息子としておきましょうか。息子側が手に入れたこのケースを、あえて横、デビット側に流す。つぎに、ソルエッジを手引きしてこれを奪わせる。これによりデビット側の一部の幹部は責任を問われ力を失います。さらに、ソルエッジの売買の手引きまでも息子側は行い、邪魔な人物を運搬の任につかせた。一緒に俺たちも息子側が雇った。情報が筒抜けだった点はこれが理由です」
一息つくために、新しい一本を取り出し、火をつけ一服する。

「なにせ自分が計画したものですからね。そして、俺たちを使ってケースを奪取し、邪魔な連中を消させれば、この件は無事解決。裏に息子側の陰謀が潜んでいようと、実行に移したのはなもわからぬ法術士集団。足がつきそうな点も、適当にしらを切れば、デビット側は公に報復を行なうことはできない。それにもし、俺たちが任務を失敗したとしても、被害は兵器一つの値段のみ、こんなものはオルタネイトとしては蚊に指されたくらいでしょう。以上、推理終わり」

少しおどけたポーズをして拍手なんかを待ってみる。

「面白い推理ね。でもなぜそんなもの私に聞かせるの？」

「どうやら拍手はしてくれないようだ。」

すぐには返答せずに、じらす。ユー二の表情を見るが、やはりあの笑顔。

さっきの煙草が吸い終わるころ、ようやく俺は返事を返す。

「正解なのか、当事者に聞きたかったわけです。ユー二さん」

「あら？ 私がそうとでも？」

「ええ、そうです。とはいっても、証拠といえば、彼、八重刃を、今回の仕事に同伴させたことくらいでしょうか。彼は一応あなたに

とってさまざまな意味で重要な存在のはずです。さらに、八重刃は確実に殺すべき敵を殺していた。生死問わずといえど、必殺までは普段の彼なら行ないません。これは、八重刃が自分の役目を知っていたからじゃないでしょうか？」

そう、あまりにも詰めが甘い推理、穴だらけ、というより線が一本しかないような状況。

探偵の推理なんてこういうものだ、と俺は考える。少ない情報からあてずっぽうに、巧みな話術を用いてそれらしいようにしゃべるだけだ。詐欺師と大差ない。俺が今までやってきて導き出された解答「さらに、しいて言えば、この俺の話を最後まで聞いたところですかね」

さて、これで答えてくれなかったら、それはそれでしょうがない。別に俺に損は無い。

「あなたの推理は正しいわ」

案外と簡単に、彼女は認めてくれた。

これでやっと、彼女がどんな組織にいたかわかった。オルタネイトだったわけだ、そりや怖い目にもあうさ。

「じゃあ、あなたはどのあたりのポジションなんですか？」

「それはね……」

そつと、耳元に顔を近づけてくるユーニ。

「ヒ・ミ・ツ」

まるで耳に息を吹きかけるように、頭を痺れさせるような甘ったるい声。

俺は趣味じゃないからいいが、こんなのがタイプだったらイチコロ。顔を戻し、こちらの反応を楽しむかのように笑顔で俺を見ていたが、こっちは無反応を貫く。

「そうですか。残念。それじゃあもう一つ、はじめにした質問、これを何に使うか、答えていただけますか？」

「それはあなたに関係ある？」

「いえ、あまり関係ないのですが。これを使用し、もし、街が破壊

されるようなことがあるのならば、私は全力でそれを止めてみたいと思います」

「大した正義感ね」

別に、ヒーロー気取りたいわけじゃない。正直、街がなくなっただけで俺が困ることは、新しい仕事場を探さなくちゃいけないことぐらいいだ。

「まあ、そこは気にしないで。大きすぎる力は、抑止力にしかない。場合によっては自らさえ傷つけるようなもの、持っている価値は無いわ。そうね。軍にでも売ろうかしら」

まるでリサイクルショップに中古品を売るかのような気軽さで言うてくる。まあ、軍に売るのなら心配は要らないようだ。

「報酬は後ほど振り込んでおくわ。それじゃあね」

今までのことが何もなかったかのような、緊張感の感じさせない声を出して手を振りつつ事務所から出て行く。八重刃と真が後ろについていく。

「あ、そうだ」

ふっと何か思い立ったようで、ドアの前で立ち止まった。ぴたりと八重刃は止まるが、反応できずに真は八重刃にぶつかりそうになった。

「今日は、誠志ちゃんを貸しといてあげるわ。旧友との親交を深めてちょうだい。これは、私からの余興へのご褒美」

俺への褒美というより、八重刃への休暇だな。

「ハイ、じゃあ諸田が荷物を持って」

なぜ、八重刃だけ名前にちゃん付けなのだろう？ 疑問が浮かぶが

これを質問する気にはなれない。

いつの間にかユー二の手にあったケースを真に押し付けるように渡すと、さっさと出て行ってしまった。

渡されたケースを重そうに両手で抱えながら、あわててユー二のあとを真が追いかけていった。呆然と立ったままの八重刃だけが残された。

これで部屋にいるのは、俺と八重刃と、真理だけになった、ようやく平穩が訪れた。

「はあ、疲れた」

姿勢を崩し、ぐったりと前のテーブルに頭を乗せる真理。

「お前は何もしゃべって無いだろ」

俺の声に反応して、顔だけこちらに向けてくる。

「しゃべりたくないほど緊張した。蛇ににらまれた蛙って感じだったよ」

「聞こえてるかもよ？」

どきりと体をこわばらせて周囲を見回した後、焦点が八重刃に合う。

「嘘だつて。それに大丈夫、こいつはそんなことユー二に言ったりしねえよ。どっちかというところち側の人間だ。つまり味方」

「なんだ、よかった」

ホツと胸をなでおろす真理。あわてすぎだつて。

「それで、八重刃、休みがいただけちゃったわけだが、何したい？」

「そうだな」

背中側の首の付け根辺りに右手を当てて考え込む八重刃。考えてる
ときのこのポーズは、八重刃の癖だ。

「今からのことは特に思いつかないが、夜は酒、飲みに行かないか？」

「しょうがねえ、付き合ってやるよ」

3 BOX SUPER MILD (前書き)

今回、時々暴発する持病にも似た俺のアビリティ「ああ！？ 書きたいこと書いてたら予定していた量の三倍だったよ！？ シャアじやん！」が発動し、予想以上の量(三倍)になってしまったため、この後に書くこうと思っていたアクションシーンが次回に持ち越されてしまいました。そのためアクションは含まれていません

3 BOX SUPER MILD

「しょうがねえ、付き合ってやる」

そういつて俺は席を立つ。しょうがねえといいつつも、実際はそれなりに楽しみだったりする。

横で緊張がほぐれてグニヤリとした感じにだれていた真理も一緒に立った。

「じゃあ、私は入ったお金で買い物してこようかな!! 最近連日の依頼を成功させて儲けてるし」

その言葉に反応し、なぜか八重刃はいつもの首筋に右手を当てる癖、考える動作をしていた。

「ならば、俺が荷物を持とうか?」

おつと、そういうことか、すごい紳士的な考えだ。しかも昨日あつたばかりの女性の買い物の荷物持ちを自ら引き受けるなんて。俺は真理と一緒に買い物も行った事がないというのに。

「え…… 大丈夫だよ。行きたいところとかあるだろうし、荷物持ちとか、迷惑なことだろうし」

さすがの真理も遠慮するのは当然だろう。

「生憎、今はすることがない」

「そうだな。真理はかなり酒がいける口だ、だから、今日は俺たちと一緒に行動すればいいんじゃないか?」

八重刃はかなり酒を飲むのだが、俺は下戸なのでまるでダメだ、俺じゃ酒のおともに付き合いきれないが、真理ならいい相手になってくれるだろう。

「……じゃあ、お願いします」

真理も賛成した。これで今日は、八重刃と一緒に真理のショッピングに付き合うことに決定した。

「それじゃ!! 行こうか!」

うれしそうに真理がドアから出て行った。さりげなく、八重刃がド

アを開けてエスコートしている。

こちら辺は、昔から変わらなく、かなりのキザだ。しかも、押し付けがましく感じない。

「相変わらずだな」

感心するように、あきれるように俺が言う。

「女性に優しくするのは、当然のことだ」

はあ、ごもつとも、俺は面倒だからあまりしたくないな。

「それにしても……」

俺が、意味ありげに呟く。

「ん？」

それに反応して、八重刃が、周りから見れば無表情なのだが、俺から見たら、不思議そうな顔をした。

「お前、ユー二に染められてないか？ 前より、その、なんていうか、女に跪くかのような……」

「……それを言うな……」

自分でも、自覚するところがあるのか、誰から見ても、落胆した表情に顔をゆがめた。

ユー二には、かなりのプライドを砕かれてきたのだろう。俺じゃなくてよかった。

「まあ、気にするなよ。下で真理が待つてる、早く行こうぜ？」

「ああ」

再び、気を引き締めていつもの顔に戻しつつ、八重刃が俺の後ろを付いてきた。

先日落ち合う場所に使った、ここ近辺で一番主要なあの駅前の大通りを歩いていた。

人ごみの中でも、八重刃の美しさは際立ち、通りがかかる男女からの視線が目立った。

さすがに慣れているのか、そんなものは気にもせず、堂々と人ごみを割って八重刃は歩いていく、割ってというより、芸術的なその男

が通る道を、人が作り出すように、勝手に割れていく。その後ろを歩いている俺と真理は、なんだか冴えない感じかもしれない。

そうは言うものの、俺と八重刃二人で歩いているときは、俺を完全無視するわけではなく、一緒に声を掛けられたりするので、そこまで悲嘆することは無いかもしれない、そのときは、決して俺は単なるこぶでは無いと信じたい、いや、一人で歩いていても時々あるから、それは無いと思う。つまり、俺はもてないわけじゃない。

「どこに行くんだ？」

「ええっと、見たい服屋が三軒あって、後、小物類も見たいし、靴は痛んできたから新しいの買わないと危ないし。……あ！ 後、気になるケーキ屋さんがあるから、そこでデザート食べよ？」

「あー、好きにどうぞ」

けっこう計画的だな、まあ、こういうところは女は細かくチェックしてる人が多いか。

「それで、何で八重刃は先に行ってるんだ？」

そう思ってたなら、急に一軒の店の前で立ち止まる。

そしてこちらを振り向いた、視線は、質問した俺ではなく、真理へ。

「この店が好みじゃないか？」

「え？ あ！？ すごい、私が行こうとしてたお店、ここ……」

口元に手を当てて真理が驚いている。俺も、驚いたが、それよりも感じたことは、

やっぱり、キザだ。

ということなわけで、ホストとかが天職なのじゃないだろうか。

「誠志さん、何でわかったんですか？」

「君を見れば……わかる。入らないのか？」

その言葉に、少し真理が顔を赤くした。よく考えれば、好みを目で判断するのはまだしも、その好みが、一体どこの店にあるのか把握していることのほうがすごかったりする。

やはり、さりげなくドアを開けて真理を中へ入れる八重刃。一応、そのまま開けておいて俺も通してくれた。

そこはBGMにヒップホップが流れる、軽い感じの、若い子むけの店だ。

服屋に入ったものはいいものの、俺には肩身の狭い場所だ。

まだ、上品な高級店なわけではなかったから、幾分かましだが、居心地がわるい。適当に端のほうのイスに腰掛けた。

女性用の服しかないというのに、なぜか八重刃は慣れた様子で立っている。真理の少し後ろに立ち、服を選ぶ姿を見守っている。まるで、彼氏と彼女だ。ただ、見方によっては、無表情で佇む姿が、ボディガードを連想させるのだが。

「誠志さん。これとこれなら、どっちがいいですかね？」

八重刃のほうを向き、交互に服を体に当てながら聞いた。

「こっちだな」

青と水色の内、八重刃は水色を選んだ。俺には、服の違いなんて色ぐらいしかわからない。どっちが似合ってるかと聞かれたら、俺は困る。

それを、八重刃は悩まずに、即答した。無表情なので、本当に選んだか疑わしい。

「えーッと、どちら辺がいいと思ったんですか？」

やはり真理も気になり、選んだ理由を聞いていた。

「君はスタイルがいいからな、丈や柄がこちらのほうが似合う。この二択なら、申し分なくこちらだ」

八重刃からしてみれば、断然水色を押すらしい。水色の大差の勝利だ。それとなく、真理のプロポーシオンをほめている点も見逃せない、セールの基本的手口。

「へえ、そうなんだ。じゃあ、こっちを買おうかな」

八重刃に促された結果、やはり水色を真理は選んだ。

「これが合うだろう」

さらに八重刃は、そこらへんにあった、上に羽織るものを一着取ってきていた。

よくわからない俺でも、たしかにあわせると、いい組み合わせの気

がした。女性の服まで選べるとは、恐るべし、八重刃。

その後もしばらく服を眺めて、計五着ほどの服を買って、その店を出た。

「すごい、いい買い物しちゃった。ありがとうございます」

ペこりと、荷物を持っている八重刃に真理がお辞儀をした。かなりご機嫌のようだ。それほど、八重刃のセンスがよかったんだろう。

「まだ、二軒行くのだろう？ 礼を言うのは早い」

荷物を持った美男子が言うのも、少し滑稽なものだ。いや、まず言葉が微妙か。

だが、女性としては頼もしいと感じるかもしれない。

「そうですね！ どんどんいきましよう！！」

前を指差したりなんかして、今度は真理が先頭を行った。

その後も、順調に真理の買い物は済んでいく、行こうとしていた残りの服屋二軒では、俺は、用事もないので外で煙草を吸って待っていた。

八重刃は服選びを手伝い、さらに荷物まで持っているというのに、俺はまったく役に立っていない。役に立つつもりもあまりないが。ならばそもそも、この買い物に俺まで付き合う必要はあったのだろうか？

……いや、あるな、こいつら二人にしてしまえば、本当にデートのようだ。それはなんだか許せない。

ちょうど俺が煙草を吸い終わり、灰皿に捨てたところで、アクセサリーショップから二人が出てくる、八重刃の荷物がまた増えていた。すでに一人ではきついような気がするが、慣れているのか、苦労している様子は微塵もない。

「次、靴を買いにいこー」

これまた店から出てくるたびに上昇していく真理のテンション。顔は邪気の無い満開の笑み、足取りも非常に軽い。実年齢よりも少し幼く見えた。

アクセサリーショップから程近く、靴屋に到着する。俺も、靴は買

おうか迷っているんで、一緒に中に入った。

男物のほうに行くのは俺だけ、やはり八重刃は真理をエスコートしている。

とうの真理は、女性が履くような靴ではなく、スポーツシューズ、もしくは戦闘に向いた靴の類を見ている。日ごろから、いつ何が起きてもいいようにと、靴だけは、動きやすいものを真理は履いている。

「ほお、靴は機能的なものを選ぶか。なら……」

そういつて、荷物を持ったまま八重刃が棚を眺め、やがて一つを両手がぼぼふさがった状態で器用に手に取る。

「これはどうだ？ 戦闘中、君は足技の類が多い、ならばこれのよ
うに、ソール以外、全面的に頑強な作りのほうが良いだろう。ソールの部分も、この素材なら、君の踏み込みの摩擦にも耐えうる」

どうやら、この前の戦闘のとき、つぶさに真理の戦闘まで観察していたらしい。おそらく俺も見られていただろう。女性だけ見る、マニアでは八重刃は無い。

俺は、自分が目当てとする棚を全て眺めたが、どうもしっくりするものが見つからない。まあ、まだ履けるから、今度買えばいいことにしよう。

少し遠くにいる八重刃と真理の会話に再び聞き耳を立てる。

「そうなんですか。あ、それかわいいですね。それにしようかな」
「気に入ったか。今、君は何足靴を持っている？」

少し、指をあごに当てて考え込む真理。

「えーっと、これを合わせて、普段から履く靴は三足になるかな。
他にも五足ぐらい」

「三足か。となると、この靴を履く頻度を平均週三回とした場合、さらに週一回激しい運動をすると考慮した場合、約四カ月がこの靴の寿命だ。それ以降は性能が落ちる、買い換えたほうが良いだろう」
「いつもはあまりしゃべらないのに、今日はやけに饒舌だ。女性と接するときはいつもこんなものなんだろうか？」

「あ……はあ」

最初の印象とは違って少し驚いたのだろうか。真理が八重刃の説明に少したじろいだ。

「……すまない……少し口を挟みすぎたな」

どうやらそれを八重刃も気づいたらしい、だが、肩を落とす、ということまではしない。現状では、肩を落とせば荷物が落ちる可能性がある上、さらに八重刃自身感情を表に出すようなことをあまりしないからだが。

「いえ、でも、すごく参考になってます。さっきから何もしてくない叢紫よりずっとましです。あ、これを、買いますね」

結局、また真理は、八重刃にすすめられた靴を買った。俺よりずっとましなのはたしかだろう。そこはあえて否定しない。

靴屋をでて、再び街を歩き出す。

「これで、全て買い物は終わったか？」

「ハイ。……あ、まだ買いたいものがあるんだった。ここです。叢紫はちょっと待っててね」

ん？ 少し引つかかる言い方だな。今まで待っていることしかしなかった俺に、なぜ改めて待つように言うんだ？

まあいい、どうせすることは煙草を吸うだけだ。

通りがかった店に真理たちは足を運ぶ、何を売っているか見ないまま俺は人ごみを眺めながら煙草を吸い始めた。

俺が一本吸い終わるころ、二人が店を出てきた。かなり早い、おそらく買うものをすでに決めていた場所なんだろう。

「じゃあ、デザートを食べにいこー！ 少し歩くから、荷物手伝いしましょうか？」

「ああ、だったら俺が手伝うよ。何にもしてなかったしな」

さすがにここで俺が何も言わなかったらろくでなしだろう。

「いや、大丈夫だ」

どうやら一人で持ったままでいいらしい、正直のり気じゃなかったから助かった。

何も持たない普通の男一、それなりにかわいい女性一、荷物持ち担当の美男子一で、そのまま街を歩いた。

駅を中心に、買い物をした場所からほぼ対極の位置の店につく。少しじゃねえ、俺からしてみれば十分遠い。

「このケーキがおいしいって評判なんだ」

こじやれたケーキ屋、食べるところは二階のテラスのようだ。持ち帰りが主な場所か。

真理がケーキが並んだ棚を真剣に眺めている。

「どれにしようかな……さすがに全部はなあ、お金がもつたいないし、次に取って置きたいし……」

お前は金さえあれば全種類を食べたと言うのか、腹に入っただと言うのか、その体のどこにそんな場所がある!?

とりあえずは、俺は苺ショート、王道に行く、甘いものは別に嫌いじゃない、おそらく真理にせがまれるだろうし。

「じゃあ、苺ショートと、ホットコーヒーを一つ」

店員に言くと、すばやくかつ丁寧に店員はケースからケーキを一切れ取り出す。

「あ、それ私も頼みたかったやつ」

「いいよ、食わしてやる」

「やた! じゃあ、私は、ミルフィーユと、シフォンケーキ、季節のフルーツのタルト、あとアイスマルクティーを一つずつ」

「三つもたべるのか」

「いいじゃん別に」

顔をほころばせつつも、一応俺に講義してくる真理。とにかくケーキが食べれることに幸せなようだ。

「俺は、バイクドチーズケーキとホットコーヒーをもらおう」

甘さを控えたチーズケーキを八重刃はチョイスする。

テラスで待つと、すぐにテーブルにケーキが並べられた。同じようにケーキを食べている客は十八人、ちょうど俺たちでテーブルが埋

まった、人気が高いのは本当のようだ。

ケーキを食べる前に、まずコーヒースティックシュガーを流し込む、例のごとく半分は残す。それを八重刃に渡した。いつものように八重刃がその残りを使った。

砂糖が、コーヒーのおいしさを引き立ててくれることを教えてくれたのは八重刃だ。そのおかげで、いつの間にか、俺が半分使い、その残り半分を八重刃が改めて使うという構図が出来上がっていた。真理は二本のスティックシュガーを紅茶に入れた。

なぜか、俺たちの行動を注視している真理がいた。手元を見ないせいで少し砂糖が的を外れ、ぱらぱらとコースターに落ちる。

「二人とも息ぴったりだね……」

なぜか少し不満が混じった声を出す真理。

「どうした？ 急に？ まあ、長いからな」

「べつになんでもない」

そんなこといつつも顔には不満の成分が混じったまま。表情が豊かだから、とにかく顔に出やすいタイプだ。

理由を聞き出したいが、意外と頑固なので無理と判断する。

予想としては、妬いてる、のかもしれない。いや、そんなわかりやすくはないか。

「さあ、ケーキ食べようか」

とりあえずは、放っておいてケーキをほおばる。クリームの甘さと苺の酸味が口に広がる。真理もケーキを食べれば機嫌を直すだろう。機嫌を損ねつつもタルトを口に入れると、途端に真理は笑顔に変わる。

「おいしいよ、これ！ 叢紫も食べる？」

「いや、全部食べていいよ。それよりも俺の食うか？」

「ありがと！ ……さすが苺ショート、やっぱりおいしい」

完全に機嫌は改善されたようだ。単純な性格で助かった。

俺たちの会話を聞きもせず、どこか一点を見て八重刃は何か考え事をしている。

もくもくと片手でケーキは口に運ばれている。

「どうした？」

「ああ、ここならば……一軒、寄ってみないか？」

どうやら今度はお誘いまでするようだ。めぼしをつけている服がある店が、近かったようだ。

「あ、いいですけど？」

「ならよかった」

そういった後、また考え込む八重刃、どうやら悩みは店に寄る事だけじゃない様だ。

しばらくして、俺のほうを向く八重刃。

「お前次第だな」

「は？ なにが？」

意味深な言葉を吐いてくる。いや、口数が少ない故に理解しにくいだけだ。

無事真理が三個プラス俺の半分を平らげ、八重刃が眺めていた方向の店の前。

少し高そうな、落ち着いた白を基調とした店。

ショーケースを眺めると、意外と若いデザインというか、スポーティーなような、たしかに真理が着れるような服が置いてある場所だ。

「へえ、私、ここに来るの初めて……」

早速二人は入っていく、俺は外で待つとする……

「お前も来い」

「は？ なんでだ？」

しょうがなくついていくことにする俺、結局三人で店に入る。

「君に、似合いそうな服がある」

「そうですね。かつこいいのが多い。でも、私なんか……」

真理の返事を聞かないまま、服を選び始める八重刃、やはり器用に、荷物は持ったまま。

「これだ。着てみる」

なぜか珍しく強引な八重刃だ。まさに一押し、なのかも知れない。

「あ、はい、じゃあ試着してきます」

素直に返事をする真理。服を持って試着室まで歩いていった。

その姿を見届け、俺の横に八重刃が座ってきた。

「お前、よくそんな荷物持って平気だな」

さすがの八重刃に感心する。

「これぐらいはまだましだ。ユーニにつき合わされてみる……」

そういわれ、想像する、金もある、無駄遣いもしそう、出てきた映像は、埋まるほどの荷物を持ち上げる八重刃の姿だ。

「うわ……勘弁したいな……」

「なぜ、女性は着もしない服まで買うのだろう？」

独り言のように、頭を抱えたかのような声で八重刃が呟く。

たしかに、ショッピング、買う過程を楽しむ女性もいると聞く、買うだけ買って、着もしない膨大な服が原因で破産する女もいるらしい。

「まあ、真理はそんなことねえよ、買った服はちゃんと着てると思う」

いったいどれほどの服を買ってるのか知らないが、普段の服のバリエーション、購入の話を聞く期間、今回の買い物で見た、一度に買う服の量、これらを総合すると、さほど無駄遣いは多くないはず。

今回は、金があるせいで多めに買っているとみれば、この推理は正しいはず。

「そうなのか？」

再び、悩むような無表情を浮かべる八重刃、どうやら女性に対し、偏見を抱いていたらしい。今まで付き合ってきた女性によるものか、ユーニ一人によるものかは推理しがたい。

「それにしても、何で俺を？」

「あの服は、少し値が張る」

その言葉に、思考をめぐらせる。今まで真理は買い物をしていた、もう金を使つつもりはあまり無いだろう、さらに高いのなら、買う

気が起きないかもしれない。ならば、服をすすめた八重刃が買っべきなのかもしれないが、金は全部ユー二に搾取されるため、おそらく持ち合わせが無い、あったとしてもそれは今夜の酒の軍資金のみ、ということとは、三人の内残った一人、つまり、俺に金を払って欲しいということだ。

「なんで、俺？」

「気に入れば、少しは買う気になるだろう？」

俺が買えば、真理へのプレゼントということになる、八重刃は、俺と真理の仲を取り持とうとでもいうのだろうか。

「まあ、気が向いたら、だな」

俺の買う意欲をわかせようとするとは、よほど似合っているのだろうか、あいにく持っていた服がどんなものか確認していない。

やがて、試着室のカーテンが開く音がする。

柱の陰から、真理が出てくる。

「どうかな？　にあ……う？」

少し照れたように顔を赤らめて言う真理。もちろん、恥ずかしくなるような服装ではない。

俺はしゃべらない、俯いた。

あまりの急襲、そして真理がきれい過ぎて顔を紅くしかけた、何とか急いで心臓を落ち着かせる。

冷静になったところで、もう一度よく見る。

服装だけで、こうも違うものだろうか？

店と同じで、白に統一された服、ところどころに赤いワンポイントがある。スポーティな作りで、真理のしなやかな肢体をしっかりと際立たせる感じ、全体的に、すごく大人びて見える服。

真理の、少し大人の女性のような一面を見てしまい、さっきはマジで危なかった。唐突な変化に人間はついていけないものだ。

「どうなの？」

俺があまりにもぼうつと眺めていたせいか、真理が不安な顔をする。その瞳にも、大人の女性としての光が浮かんでいる気がした。

「い……や……すつげえ、似合ってると思うぞ？」

ここで顔を背けてしまえば、おそらく真理は嘘だと思い込む、何とかそらしそうになる衝動を押さえ、目を見て言う。

「ほんと！……でも、この服、少し高いんだよね」

先ほど思ってたとおり、購入の一步はすぐには踏み込めないようだ。いきなり、初めての店でなじみの無い服を選んで買うのは、なかなか度胸がいるものだ。

しょうがねえ、八重刃に頼まれてたことだし……

「いいよ、俺が買ってやるよ、似合ってるし、プレゼントだ」

自分がそんなことをするなんて思ってもいなかった、おかげで、くさい台詞になっている気がする。

「ほんと！？　ありがとー！　大切にするね」

うわ、プレゼントだからって大切にするとまで言われてしまった、逆にこっちが恥ずかしい。

そこにはやはり、いつもどおりの、実年齢よりも三歳ほど若く見える真理がいた。

俺が決めたわけじゃない、八重刃との打ち合わせでそうになっていたんだ。しかし、その言葉は八重刃の面子のために言い出せない。

服を元通りにするため再び試着室へ戻る真理の後姿を目で追ってしまった。

「どうだ？」

「かなり、似合ってたよ」

正直に感想を述べる、まさかここまですごいものを選ぶとは、さすが、八重刃様。

「彼女なら、もう少し上の年齢の着こなしが出来ると思ってな」

「ほお」

「それに、お前が、真理を子供にしかみていないような気がしてな。考えを改めさせようと思った」

そんなことは無い、俺はちゃんと真理を大人として見ていた。子供として見るなんて、そんなことは……無い。

「あゝあ、はやく煙草すいてえ」

わざと話しをそらす、実際、ケーキ屋への道のりからずっと吸っていないかった。

ちようと真理が試着室から出てくる、いつもの真理、もちろん手にはさっきの服。

一緒にレジまで行き、俺が会計を済まし、店を出た。

煙草を吸いながら、来た道を戻る。荷物を置きに、俺の事務所まで帰還することになった。

最後の店からは、真理が独り暮らししているアパートのほうに近いのだが、真理の断固たる拒否により、一度事務所に運び、改めて真理が持ち帰るそうだと。

そりゃ、急に異性を部屋に入れるのは避けたいだろう。特に、気になる異性があるとすれば。

外で待つていればいいのだが、それさえも極力回避したいらしい、場所そのものを知られたくないようだ。その点については、すでに探偵としてのお仕事で調べはついてしまっているのだが。

「まだけっこう時間があるねえ」

日が傾きつつはあるものの、まだ朱に染まることの無い空を見上げながら、真理が呟く。

駅前、人通りの激しい場所で、荷物満載の美丈夫が、急にその歩みを止めた。

やはり、何もいわずにどこかを注視している。いや、すぐに見えている場所はわかった。

彼の目の前には、柱しかない。もちろん、柱をただ眺める精神障害者ではない。柱には、一つの張り紙。

『本日、午後一時から七時にかけて、武器市を開催』
と書いてある。様々な武器商店が集い、大規模な市を開催するようだ。

もちろん、俺も少しは興味があつたが、常に日本刀を携帯している

ほどの八重刃にとっては堪らない市だろう。

「行きたいのか？」

しょうがなく聞いてやる、すでに、八重刃の目に留まってしまった以上、俺たち三人の行動の選択肢は一つしかない。

こちらを見、純粹無垢な子供のような瞳でコクリとうなずく八重刃。戦闘に関するもの全てに異常な執着を見せる八重刃は、少し破綻した精神構造を持っているといってもいいだろう。

武器に金は惜しまない、努力も時間も惜しまない、命と武器なら武器を選びかねない。

行くまで頑として動かなかったらう、変に義理堅いため、一人で行くようなこともしなかっただろう。

「おい、真理、また行く場所が出来た」

気づかずに先に行き始めていた真理を呼び止める。

「八重刃の趣味に付き合ってくれ」

急遽予定を変更し、俺たちは武器市の会場に向かうこととなった。

そこには、鎧、刀剣、銃から、はたは戦車まで、ありとあらゆる武器がそろっていた。

いや、よく見ると戦車は非売品のようだ。法律でも、大雑把に説明すれば、一個人の所有できる殺傷能力を保有する物品は、対人、主に個人への効力を発揮するものまでと決まっている。

「荷物を頼む」

周りを眺めていたところを、八重刃に全て荷物を押し付けられた。その目に、もはや仲間を思う気持ちは含まれていない。武器のことが気になってしょうがないらしい。

結局、俺が荷物を持つことになるうとは。

落としそうになるのを何とか踏ん張りながら、八重刃の後ろについていく。

八重刃がまず立ち寄ったのは、盾、籠手などの防具類が揃えられた店だ。

盾を使う主義は無いはずだから、目的とするのは籠手類か。

八重刃が眺める棚を荷物越しに見ると、そこにあるのは、多目的軽防刃籠手、籠手の中でも一番高い類の品だ。

その籠手は、軽とつくだけあり、袖の下に忍ばせることも可能なほど薄型で、基本的に銃弾や刀剣など、常人が繰り出せる物理的攻撃にはびくともしない。

多目的といわれる部分は、籠手によって様々だが、ワイヤーシューター、弾倉交換機構、ナイフなど、ただの籠手としてだけではなく、オプションも装備されているということだ。

今八重刃がスーツの中につけているのは、一世代古いタイプのものだが、まだまだ現役として使えるはず。だがそれでは気に食わないらしく、新しいのが欲しいらしい。

ちなみに彼のスーツは特注品で、外見はサラリーマンが着るようないや、ホストの類が着るものに近いかもしれない、まあ普通のスーツなわけだが、そんじょそらの戦闘服より数段性能がいい、柔軟性、防弾防刃性、対法術耐性、どれをとっても一級品だ。よって鎧の類も興味は無いだろう。

しばらく吟味した後、少し笑みを浮かべて、八重刃は三つを持って値段も確認せずに店主の元へ行こうとする。

「待て、八重刃！ まずい、真理、止める！」

「え？ なんて？」

「いいからはやく！」

俺にいわれてわけもわからずに止めようとして前に出てきた真理を、八重刃は躊躇なく右手で振り払った。

「きゃっ！ なにするの！？」

先ほどまでひどく優しくしてくれていた八重刃の急激な変化に、不意をつかれて倒れた真理は、驚きのあまりその体勢のままで、少し呆然としてしまっていた。

だが、その小さな悲鳴で、かろうじて八重刃は止まった。

「すまない」

小さく謝罪すると、右手で優しくつかみ上げて、真理を立たせた。
「お前、金無いだろ？ 一つも買えないほどなのに、三個も買うつもりか？ 調子に乗るな！！」

絶望にも似た顔色に変化した八重刃の顔は、まるでおもちゃを買うことを親に止められて今にも泣き出しそうな子供。

なぜここまで表情が豊かになるのかも理解できない。

八重刃の武器に対しての愛情とも言える執着は、彼自身の金銭感覚まで狂わせる。借金作ってまで買おうとしていた。

ひどく名残惜しい顔をしつつも、何とか決心を固め、険しい顔で籠手を柵に戻した八重刃がいた。

がつくりと肩を落とし、周りにまでしつかりとわかる陰鬱な空気を漂わせて八重刃が他の店へ向かう。

最初の店で買えないんだ、他の店でも買えないことはわかりきっているだろう。

はじめから、俺は八重刃に物を買わせるためではなく、ウィンドシヨッピングのつもりでつれてきた。

……もしかしたら、ユーニは、このはた迷惑な八重刃を、俺たちに押し付けたくて今日は休みを取らせたのかもしれない。

いくつかまわるが、銃器に興味は無いらしく中には入るものの、ほぼ素通りしていく。俺は興味があるので、軽く見て行きたいのだが、両手を完全に荷物で塞がれているため、もはや何もすることが出来ない。仕方なく八重刃の後ろを付いていく。

ブースが変わり、いよいよ本命である、近接武器類の並ぶ場所まで到達する。

一段と目を輝かせるが、数秒後に、買えない事実気づき再び黒い空気をまわりに漂わせた。

それでも、武器を眺めることを八重刃はやめはしなかった。何とか自分の買える物が無いかと、値段を注視する姿が、少し痛々しい。

ここでも、俺は暗器やナイフなど、手に納まるサイズの武器を見たものの、荷物という障害のもと断念。

買えないのならそれでいい、そこまで欲しいものではない。あれば便利というだけだ。

ふと、一本のナイフを手に取り、こちらに目を輝かせて視線を送ってくる八重刃。

その視線の意味は、これ、買ってもいい？　だ。

ナイフに目を移すと、それは明らかに安物、粗悪品といえなくも無いものだ。

「そこまで無理して買おうとするなって……」

頭を抱えなくなったが、そのポーズは荷物を落とすので却下。

「そんなに欲しいなら、ナイフくらい俺が買ってやるよ」

「いや、さほどナイフに興味は無い」

じゃあ何で買おうとしたんだよ！　そうツツコむべきだがその気力もうせた。

次に入った店は長物、斧や薙刀などが売っていた。ここもほぼ素通りに近い。というよりも、はじめから八重刃は日本刀にしか興味は無いだろう。

いつの間にかパンフレットを見て八重刃が描いていたまったく無駄の無い移動経路の終着地点に、お目当てである日本刀の店があった。ナイフの値段から数十倍から数百倍に跳ね上がる刀を、八重刃が買えるはずも無いのだが、なぜかその表情には笑み。

一本一本、丁寧に眺めていく、かなりの時間をかけ一本を眺め、眺め終わると、大体は残念そうな顔をして鞘に戻す。

いくつか目に止まる物があったが、少し見比べたりもするが、やはり決め手は無いらしく、それも棚に戻した。

「やはり、これ以上の業物はお目にかかれないか」

そういつて、腰に差した刀に手をやり、熱い視線を送る八重刃の姿。最初の笑みの意味がわかった、初めからこいつは、自分の持つ剣が周りのものより優れているという優越感に浸りたくてここに足を運んできていたわけだ。

八重刃の持っている刀は、日本刀としてかなりの価値を持つらしい

が、そこらへんはよく知らない。昔、一時間にも及ぶ熱弁をされたことがあったが、あそこまで目の輝いていた八重刃は見たことがなかった。

印象に残っている部分とすれば、作者は近年で唯一の最上業物指定であった、みつむら光村かげまさ影真、八重刃の知り合いだったと聞く。

たしか刀銘は、月穿がつせん、由来は、月を穿つという意味だったか、もしかしたら、月で穿つという意味だったかもしれない。

それ意外は、永遠、この波紋はなんだ、この匂いはなんだと、日本刀の知識が無い俺にはまったくわけのわからないことばかり聞かされた。

「終わりだな」

買いたい物が買えなくて下がりまくっていたテンションを、刀で持ち直すことが出来たらしく、普段の八重刃に戻っていた。

「じゃあ、荷物持ってくれ。俺は疲れた」

「ああ」

八重刃が素直に俺が持っていた真理の荷物を受け取り、今度こそ本当に事務所に帰還した。

街に夜の明かりが灯り、昼間とは違った表情を見せ始めたころ、俺と真理が八重刃に連れてこられた場所は、バックミュージックにピアニジャズが流れる、落ち着いた感じの正統派といえるバー。

八重刃がどこの席に座るのかと思えば、カウンター越しに、バーテンドーの前の席に、腰を下ろした。

どうやらかなりの常連らしい、こういうところで席に着くとき、常連でもないのにこの位置の席に着くのはマナーが悪い、そこに本当の常連が来るかもしれないからだ。

もし話がしたい場合は、両隣の席、ここならば、話せもするし、さほど問題はない。

そこらへんのマナーをわきまえてる八重刃が座ったのなら、八重刃はかなりの常連なのだろう。

「おや、誠志君じゃないか、ずいぶん久しぶりだね」

名前を知っているほどの仲のようだ。

「ご無沙汰してました」

そついつて、八重刃が頭を軽く下げると、柔和な笑みをバーテンダーが返した。

「今日は何にするの？」

「この二人には、ブルー・ムーンを、俺は、スティングアーを」

「かしこまりました」

手早くバーテンの前に材料が並んでいく、そのうち三種類の材料がシェーカーの中に注がれた、材料の入っていたビンを見ると、ドライジン、パルフェタムール、レモンジュースだ。

パルフェタムール、リキュールの一つか、シェーカーに注ぎ込まれる液体は紫色だった。

なんだっけかな？ パルフェタムール、聞き覚えのある単語。何語だ？

考えているうちにバーテンのリズミカルな二段振りが終わり、グラスにすみれ色のカクテルが注がれた。

「ブルー・ムーンとなります、二人の秘めた縁が傷つくことの無いよう……」

しゃれた台詞を言いながら、俺と真理の二人の前にグラスが差し出された。

ブルー・ムーン、ロマンチックな名前だが、たしか『言えない相談』という意味もあった。だが、バーテンダーはそれよりも、神秘的な『二度目の満月』、『ひどくまれな』という意味のほうを用いたのかもしれない。

俺が少し詳しい理由は、もちろん八重刃によく飲み連れて行かれたからだ。俺、飲めないけど。

『言えない相談』か。俺には、真理には……あるんだろうか……。

青い月という名前の割には、薄紫色の液体がグラスに浮かぶ。

「きれい……」

グラスを目線の高さまで持ち上げて中のすみれ色、真理の瞳と同じ色の液体を見て、すぐくうれしそうな顔をしていた。

「誠志君、はい、スティングァー。最初は肩慣らしかい？」

その後、すぐに八重刃の前にも白く透明な液体の入ったグラスが置かれる。

「乾杯」

八重刃がグラスを軽く持ち上げ、音頭を取った。

「かんぱーい」

うれしそうにグラスを掲げると、一口真理が飲んだ。

「ウン、おいしい。甘くて、でもレモンのさわやかさがあって、すごく飲みやすい。それに色が、私と似てて好き」

どうやら一発で惚れたようだ。さて、俺も少し飲んでみるか。

注意深く、一口と言えない量を俺は含む、たしかに、真理の言ったとおり甘味の後に口の中に淡いさわやかさが広がっていく。

非常に飲みやすいが、それ以上に俺は飲まれやすいので、注意深く飲んでいくことにする。他が飲んでる時間を俺は煙草に回すとする。

「誠志さん、それも飲んでみたい」

「少しきついぞ」

そっぴいながらも、八重刃がスティングァーのグラスを隣の真理の前に差し出す。

真理がどれくらい飲めるのか測るためかもしれない。

さほど抵抗もなく真理は一口飲み込んだ。

「ウン、ほんとだ、ピリツとしてる、お酒の強さが出てるね、そこにミントのすうつとする感じがとってもいい。ドライって言うのかな？」

「そうだな」

相変わらずのテンション低そうな声音だが、その中にうれしそうな響きがあった。

その後も、話をしつつ酒が進んでいく、俺だけは、まだはじめの一杯だった。

バーテンも華麗なテクニクを披露しつつ、話しに加わり、四人でいろいろなことを話した。半分はお酒だったが。

様々なカクテルを、バーテンや八重刃に教えてもらって次々と飲んでいく真理。

少し顔が赤くなってきた。飲んだ数では倍を行っているはずの八重刃は、何事も無いかのようだ。

「そつえば、八重刃」

不意に思い出した疑問を聞くために八重刃を呼ぶ。

「なんだ？」

「今日の朝、ユー二に物を渡したときなんだが」

「ああ」

「なぜ、あの兵器の使い道までユー二は俺に教えたんだ？」

「それは、口封じのためだろう」

口封じ？ ああ、そういうことが、ユー二がそれを答える前、マフィアに所属していることを俺に言っていた、それに対しての口封じということか。もし口外されれば、情報屋としての立場も微妙なものになるし、それ意外にも様々な障害がでてくるだろう。

「じゃあ、後もう一つ、お前は何で教えてくれなかったんだ？ ユー二がオルタナイトにいることを？」

知っているはずなのに、相棒である俺に教えてくれなかったのだろう。もし俺が知っても、口外しないことぐらいわかっていたはずだ。「周りにばれることよりも、危険なことがある」

「は？」

「ユー二にはばれてみる、何をされるか、わかったものじゃない」

そういうことが、たしかに、どんな責め苦があるかわからない。少し想像してしまっただけ怖気が走った。

同じことを考えてしまったのか、やけどでも言うように八重刃は持っていたグラスをぐいっというて飲み干した。

「おお、すごおいすごおい」

その姿に、小さく拍手する真理。ほほが朱に染まっていて、少し色

っぽい。もう酔っているんだろう。

「じゃあ、私も」

軽く手を上げながら、八重刃と同じようにカクテルを飲み干す真理。
「ん、一気はやっぱだめだよ、おいしく飲めない」

それつはまだ回っているようだから、さほど泥酔とまで入ってないようだ。

「ああ、そうだな。次は……」

首もとに手を当てて、次に飲むカクテルを選ぶ八重刃。

「ロングアイランド・アイステイを二つ」

聞き取って、バーテンダーは作る準備をする、複数の材料を順番にグラスに入れていき、軽くステアした。

流れるようなステアは、まるで生き物のようで、きこちなさがまるで無い。バーテンとしてはかなりの腕だろう。

「ロングアイランド・アイステイとなります」

真理と八重刃、二人の前にグラスが差し出される。

名前にアイステイとついていたが、よくは見えていなかったが、材料の中にはお茶の類は入っていなかった気がした。

「このカクテルはね、アイステイを使わずに、紅茶の色と風味を出した、とても不思議なカクテルなんだ」

ひどくうれしそうに、自慢するようにバーテンが真理に説明した。

どうやらそういうものらしい。

「へえ、あ！ほんとだ、アイステイみたい。叢紫も飲んでみて！」

一口飲んで、驚いた後、真理が俺にすすめてきた。少しくらいなら、大丈夫だろう。

一口飲んでみる、ああ、たしかにアイステイかもしれない、舌がしびれてよくわからない。

「ああ、まずいな」

あまりまずくないかのように、八重刃が呟く。酒のことを言っているわけではないようだ。

じゃあ、なんだ？

ん？ 俺は今、どこを見ている？

焦点が定まっていなかったことがわかる、視界が歪んだかのような感覚。ああ、まずいって言うのは、俺か？

前を向いているのか、耳ははつきり聞こえているのか、自分は寝たのか、よくわからなくなってきた。

「これは、かなり強い酒だ。叢紫には荷が重いな」

テーブルにうつ伏せになろうとして、手をつこうとする、どんどん下げるが、まだ手がテーブルにつかなかった。

ああ、急に思い出した。パルフェタムール、秘めた縁、そうか、フランス語だ、意味は……完璧な愛。

随分と、色っぽい単語を覚えているもんだな、俺も。

それがわかった瞬間、俺の意識はかすむように消えていった。

3・5 BOX SUPER MILD (前書き)

前回の続きです。夢の中で、八重刃がどうしてユーニに買われたかを描いています。

賭け事をやっているのですが、ゲームをやっていないのでどうにもそこらへんが詳しくわからず、間違っている点があるかもしれないので、間違っている点を見つけたらご一報をお願いいたします。

3・5 BOX SUPER MILD

八重刃と二人で、ネオン彩る夜の街を歩く。

二人？ 少ないような？

流れる風景は、あまり見覚えの無い町並み。

だが、とてつもない既視感。

なぜか、充実感で満たされている。そして、違和感。

二つの思考が入り乱れる。それ自体がおかしい。

そうか、今、八重刃と二人で歩いているはずは無い。今もし二人であるとするば、それは八重刃ではなく、真理だ。それにさっきまで俺、真理、八重刃、三人でいたはずだ。

そんな思考をしながら、視線は自然と動いて街を眺めている。よく見ればそれは、一度きりしか行っていないが、あれが起こってしまったため、忘れようとも忘れられない、あの街。

これは、夢、だな。

そう気づいても、なんら変わりなく、夢、過去の出来事は進んでいく。変えようの無い記憶。

こういうのをなんというんだったか、夢とわかっていて見る夢、覚醒夢、明晰夢とかいったか。

あまり思い出たく無い出来事、悪夢といっていいそれを見たくはなかったが、そんなことを望んでも、過去の記憶は止まらず、流れ続ける。

……眠っているからか、頭がぼうつとする。もうどうでもいい、流されるままに見るとしよう。

これはたしか、依頼で、遠距離恋愛をしている女性が、離れている間彼が他の女と何かしていないか、調べて欲しいという、遠方への浮気調査の仕事の後だ。だから、一度しか行ったことがない俺が住んでいる場所とは違う遠い場所。

ちなみに、その浮気調査は無事終了、彼は問題なく、誰とも付き合

ってはいなかった、幸せな結果で無事終了。

今目指しているのは、確かカジノだな。八重刃の誘いで、この街の名物となるほどの巨大なカジノに行くことになった。

夜の中、そこが太陽でもあるかのように、こうこうと輝くカジノの明かり。賭博の音、人の音が入り乱れ、外にまで響いてくる。

高級車が列を作るカジノの入り口を、俺たちは通り抜ける。

中に入った途端、さっきまで遠くで聞こえていた音が、耳元へ騒音となって届いてくる。

なぜか破格だった依頼の前金五十万を、保険のための金十万を残して全てチップに交換する。これで手持ちのチップは四千ドル分となった。

八重刃の独断で取った大胆な行動だったが、俺も口出ししない、八重刃への信頼と、自分の腕への自負があった。

とりあえずは、ある程度チップが増えるまで、八重刃の観戦をする。向かう場所は、一番人気、カジノの花形、ルーレットだ。

八重刃のテーブルのディーラーは女性、ここは高感度アップのためか、ディーラーの女性の数がかなり多い。

じつと、八重刃はディーラーの目を見る、視線に気づき、ディーラーも八重刃を見返した。だが、八重刃は視線をそらさない、数秒後、ディーラーは自分が人とは思えぬ美神に見とれてしまっていることに気づき、はっと目をそらす、その後も少しほほを染めたまま、ちらちらと八重刃の姿を見ていた。

これは、勝ったな。二倍くらいなら、勝たしてくれるだろう。

八重刃の自らの美貌を利用した、卑怯とも取れる最強の戦術。

「ODDに全額を」

ODD、つまり奇数を意味する枠に、持っていた全てのチップを置いた。

「全額は、さすがにまずいんじゃない……」

いくら勝てると予想できても、怖気づく。

「No more bet」

ホイールが回り始めてしばらく後、ディーラーが手を振り、賭けが行なえなくなる。

ボールを放る直前、ちらりとディーラーの目が八重刃へ向いた。彼女たちは、プロだ。熟練の技術により、集中すれば、自ら狙った番号へとボールを落とすことが可能らしい。プロだから、私情を挟んではいけないはずだが、これは別にいかさまではなく、ちよつとした厚意だ。

放られたボールは勢いよくホイールの壁面を転がり、やがてホイールの番号が刻まれた場所へと落下し、からこると音を立てつつ絶え間なく自らの居場所を変えていく。

勢いが収まり、ボールは一つの番号の上で停止する。運か彼女の技術によるものか、ODDの番号にポケットさせていた。

チップが全て回収され、八重刃の前にだけ、先ほど賭けた倍のチップが返される。

「Please your bet」

再び賭けが再開される。

「俺はしばらくここにいます。半分は好きに使え」

戻ってきたチップの半分以上を俺に渡すと、再び八重刃はテーブルに向かった。少しの間は勝てるだろうな。

さて、俺はどうしようか？

ちよつと、ブラックジャックのテーブルが見えた。

ディーラーは女性だが、俺に八重刃が使うような手は使えない、そのディーラーはちよつとカードを切っていた。いいタイミングだ。

まだ席に座らないで、観戦することにする。負け続けて席を立つ奴がいなければ、意味のない行為になるが。

デッキの厚さを見る、どうやら二デッキ、非常に良心的だ。カード・カウンティングを行ないやすい。

カウンティングというのは、配られたカードから、ディーラー、プレーヤーどちらが有利か判断することだ。

数の大きいカードが残っているほど、こちらが有利になる。

三ラウンド見ておこう、カウントが有利なら、そこから勝負する。順調にラウンドは進んでいく、ディーラーの運がないのか、小さいカードばかりが排出されていく。

だが、どこかの大馬鹿が、あまりいい場面では無いのにダブルアップしたり、5のペアが出た時、そのままやればいいのに、手札を二つに分けるというスプリットをして負けたりと、大損をこいて、テーブルに八つ当たりした後、席をたった。

紳士的じゃないし、次やれば勝ってただろうに、技術も運もない奴のようだ。

その空いた席に、俺は座る。これで、かなり有利に進められるはずだ。三ラウンドで稼がせてもらう。

今の手持ちが、四千ドル分のチップ、負けても残るよう、最大で賭ける量を千ドルに決める。となると逆算して、二ラウンド連続で負けたときに次のラウンドに最大金額をつぎ込むとして、最初に賭ける量は二百五十ドルだ。

「Please your bet」

開始の合図と共に二五〇ドルをベット。他のプレイヤーもチップを置き、カードが配られ始める。

やはり予想通り、大きい数が多い、俺の前に配られた二枚のカードは、10のカード二つ、勝ったも同然だ。

右の人間のターンが終了し、俺の番になる。

「ステイ」

何もすることなく俺はターンを終了する、ここで何かするほうがおかしい。

プレイヤーのターンが終わり、ディーラーの二枚のカードのうち、ホールカードという伏せられた一枚が開かれた。

二枚のカードの合計は、17、ディーラーはルールでステイしなければならぬため、俺の勝ちが決定した。

ブラックジャックには、ディーラー側に特殊なルールがあり、16以下の場合は必ずヒット、次のカードを手にする必要があり、17

以上になった場合、その時点でステイ、役が決定するというルールだ。

倍の額の五百となってチップが変換される。

清算が終わり、再び賭けが再開する。俺はさっきと同額の二百五十をベットする。

順調に、このまま勝って行く予定だった。だが、ここでディーラーにいい手が出てきた。サレンダーするタイミングを逃し、俺は負けた。

次のラウンド、負けた分を取り返すために、倍額の五百をベットする。こうやって、負けるごとに倍、倍としていけば、勝った時に確実に利益が出る。この戦法の弱点は、永遠負け続けるといずれテーブルの最高額に達し、戦法自体が使えなくなるということだ。そうなったときのリスクもでかい。

あいにく俺は、そこまで賭ける予定はない。負け越したら、おずおずと退散する。

ゲームは進行していく、俺の予想を裏切って、ディーラーは二枚の合計が6というところから、ドロウをし続けて21ということをやったのけ、再び負けた。

まさかこの状況で二連敗するとは。

しかし、今まで流れたカードからして、かなりの勝率のはず、負けるなんてことはない。

予定外だが、もう一ラウンドやるしかない。もう一回負けたら、俺も馬鹿の仲間入り、ただ大損するだけだ。

冷静に状況を判断していく。

「Please your bet」

俺にとってこのテーブル最後の賭けが始まる。俺は、千ドルをベットした。

俺の前にカードが配られる、二つのカードは、5、6、合計11だ。さらにディーラーのオープンカードは8。これはキタ。

他のプレイヤーのカードを見ると、俺に幸運の神が舞い降りたかの

ように、少ない数ばかり出ていた。

かなりの高確率で、次の一枚で俺の手は強くなる。

ターンがまわってくる、次の一枚で勝てるならば、俺はさらに勝負にでる。一気に稼いでやる。

「ダブルダウン」

掛け金を倍額にして、ワンヒットのみで終了する。これで10ができれば、どんぴしゃ、負けることはなくなる。

ディーラーが手を伸ばして一枚のカードをこちらに差し出し、オープンした。

そこにあるのは、Kのカード。つまり合計は21、負けなしの最強の手。

よし！

これでさっきまでの負け分を全部チャラに出来る。

俺の合計は21、ディーラーは最初に所持したカードの合計が16以下で、そこからのドロウで21にしなければ、俺と引き分けることは出来ない。

ディーラーの番が来る。オープンは8だから、ここで9以上だったら俺の勝ちだ。

ゆっくりと、ディーラーがホールをオープンする。普段どおりの早さだったかもしれないが、俺には遅く感じた。

出てきたカードは、9。観衆が小さくどよめいた。

ラウンドが終了し、俺の手元には四千ドルが返ってきた。

正直、ここまで勝つとは思わなかった。

調子に乗って負ける前に、俺は席を立つ。テーブルを離れる際、二十ドル分をチップとしてディーラーに弾いて渡した。

勝つってのは、気分がいい。賭け事にしろなんにしろ。

その後も俺は、スロットなどで小さく稼ぎ続け、最初の手持ちを倍額にまで増やした。これはもう十分勝ち組だ。

そろそろ引き上げようと思い、あたりに八重刃の姿がないか探す。

すると、ちょうどこっちに来る八重刃の姿があった。どうやらあっちもキリがよかったようだ。

こういう賭け事、引き際が肝心だからな。

「どうだった？ そっちは」

八重刃に俺が問う。少し顔が笑っていただろう。

「勝った。どうやらそちらも勝ったようだな」

「ああ、倍になった」

そういった瞬間、八重刃が小さく笑った。

「三倍」

どうやら、俺の稼いだ分の倍を稼いだようだ。小さな笑みは、俺への嘲笑か、二人して勝ったことへの喜びか。

……どちらでもかまわないが、考えないようにしておこう。

「さすがだな」

八重刃は、普段からのポーカーフェイスもあって、かなり賭け事が得意だった。先ほど見せた最強の戦術もあるし、まず負けることはなかっただろう。それにしても、かなり勝ったほうだ。

「どうやら今日は、二人してかなりツイてるっぽいな」

八重刃の方に腕を回し、開いた腕でわき腹を小突きながら俺は喜ぶ。幾分、さっきの笑いへの報復として強めに殴つといたが。

「ああ、そのようだな、そろそろ帰るとしよう」

そう、引き際が肝心、ここで帰ったほうが無難だろう、十分稼いだわけだし。

入るときより気持ち背筋を伸ばして、出入り口へと向かう。

「ちよつと、僕たち」

出ようかと思つた瞬間、俺たちに向けて声が飛んでくる。

立ち止まるが、少しの間、自分たちのことか考えた。まだ相手のほうには振り向かない。

「そうそう、僕たちよ」

少し、周りを見る。僕たちと呼ばれるような年齢の人間は一人もいない、それどころか、俺たち以外に近くに人はいない。

「ぼくたち？！」

どう見ても俺たちは、僕たちと呼べる年齢じゃない。

驚きの声を上げつつ、声の主がいる方向へ振り向いた。そこには、柱に寄りかかって、こちらを妖艶とした瞳でみつめる一人の女性がいた。

そう、俺たちをはめた悪魔、ユー二が。

「そうよ、僕たち、ああ、気に食わないようだからあなたたちにしておくわ。あなたたち、法術士でしょ？ 私の頼みごと、聞いてくれない？」

「頼みごとって？」

「もちろん、頼みを聞いてくれたら、それなりの御礼はするつもりよ。」

どうやら、仕事の依頼のようだ。

「今すぐにして欲しいことなの」

「どれくらい出す？」

「そうね、こんなのはどう？」

ユー二は一目見て高級とわかるハンドバックから、切手を出した。

そしてその額面を、俺たちに見せた。

その額は、正気の沙汰とは思えない高額、さつき稼いだ額とは桁が違う。よほどやばい仕事なのかもしれない。

見た瞬間、俺は依頼内容も確認せずに承諾しそうになったが、八重刃がそれをさえぎる。

「内容を聞こう」

「じゃあ、まずは場所を移しましょう？」

そういつてユー二は柱を離れた。その後ろを俺たちは付いていく。招かれたのは一つの高級車。中に入れば七人は座れそうなほどの広い空間。酒なんかも置いてある。

「最初は自己紹介からね。私はユー二」

それは悪魔の名前。

自己紹介といいつつも、彼女は名前しか申し出なかった。

「俺は空煙叢紫、法術士事務所を経営している。こっちは相棒の八重刃誠志」

俺が八重刃の分まで自己紹介を済ませる。八重刃はただ微動だにしていなかった。

「へえ、叢紫と誠志、ねえ」

含みのあるような言い方だった。

「まあ、あなたたちにやってほしいことはとっても簡単なこと」

簡単なことで、あれほどの額を出すものか。絶対危ない。

「OYCセントラルビルの、十四階にある一室のアタッシュケースを持ってきて欲しいの」

「なんだ？ ずいぶん適当な」

「急な用事で、今すぐ頼みたいの。なおかつ説明するための資料はないわ。アタッシュケースは一つしかないから、すぐにわかるわ」

「どっちにしろ、それは俺たちに物を盗めってことか？ 犯罪の片棒担ぐのはごめんだぜ？」

ちゃんとした依頼の仕事でもないの、あえて仕事口調にはしない。相手もそれでいいようだ。

「大丈夫。あのビル自体、犯罪組織のものだから、そんなことにはならないわ。警察もひどく困っているわ」

ビル自体が犯罪組織って、そりゃ危ない仕事じゃねえか。どこが簡単なんだ。

なんか引つかかる言い方だ。

「まあ、私から話せるのはそれくらいかしら。どう？ 引き受けてくれる？」

「悪いが、そこまで情報不足な仕事は……」

「いいじゃねえか。引き受けようぜ？ 俺たちに掛かれば楽な仕事よ。しかも今日は、二人してツいてるじゃねえか」

八重刃が断ろうとしたのを止め、引き受けるほうに俺は持って行った。まさかこれが、引き金になるうとは……。

「お前がそういうのなら、別にかまわない」

基本的に俺を信頼している八重刃が、俺の意見には口出しせず引き下がった。

ここから俺たちは、全て間違っていた。

「まあ、無事依頼の品をここまで運ぶよう善処しますが、何らかの原因で、それが紛失、破損した場合も、一切こちらは責任を問いかねますが、よろしいでしょうか？」

この部分は、しっかり安全を図っておきたいため、俺は仕事の口調を用いた。

「ええ、それぐらいは、わかってるわ」

そういつて、笑みを浮かべる。昔からなんら変わっちゃいない、笑顔のポーカーフェイス。すでに心の中では、別の意味の嘲笑を浮かべていたのだろう。

「じゃあ、早速行ってきたくれる？」

「ああ、了解したよ」

そういつて俺は、ドアを開けた。その後ろを八重刃が付いてくる。俺たちは、着実に、あの悪魔の糸にからめとられていった。

道中の記憶は薄いらしく、いきなり場面が飛び、すでにビルの中。いや、薄いというのは間違いだ、あまりにも他の出来事のインパクトが強すぎた。

「さて、俺たちは頼まれて荷物を取りにきたんだが」

すでに危なそうな男たちに囲まれている。話しで何とかかなりそうな状況ではなかった。実際は、話せば何とかなっていたんだが。

「とつとそこをどいてもらうぜ？」

そういつて俺は、懐に手を入れる。それに反応して、男たちは懐から銃を取り出す。何名かは法術具を手につ。

だが、俺が取り出したのは煙草。敵は俺が吸い始める姿を見た瞬間、啞然となって硬直した。

ここで厄介なのは、法術よりも銃だ。生身の俺じゃ対応しにくい。十分な量の煙を吸うと、それを吐き出した。そこに含まれるのは、

法力。淡い輝きを放つ。

「まずいぞ！ あれは法術だ、撃て！！」

俺はその煙を、なぞっていく、高速に、精密に。すぐさま法陣が浮かび上がり始める。ようやく敵が動き出した。

一斉の銃撃、第一波。俺と八重刃へ向けて、数発の弾丸が放たれた。殺すためというより、威嚇の類か。

威嚇といえど、数発のうちのさらに何発かは、運動機能を阻害するための位置に放たれている。

着弾音が後から続く、だが、鳴るのは壁面や床のコンクリがはじける音と奇妙な鋭い金属音。やわらかいものに着弾した音、つまり、人間に当たる音は微かもしない。

八重刃が、先読みの法術によって、即座に弾道を予測、俺と自分の体に当たる弾丸だけを、反らし、弾き、払い落とし、斬り割っていた。ありえない事態に、再び敵の動きが停止した。俺も、最初は驚いた。誰が出来ようか、数発の音速さえ超える弾丸を、同時に捌ききるなど。

いくら先を読んでいようと、それを行なうのは非常に難しい、さらに、初速は音速を超える弾丸に、絶妙に刃を真正面から捉えて斬り割るなんて、常人では決して行えない。もし刃がずれ、弾丸の先端に当たらず、さらに力の軌道が噛み合わなければ、刃のほうが折れてしまう。

八重刃が神業を披露している間に、俺の法術は完成する。複雑になぞられ、赤く光りさえする煙は、運動機能を補助する法術。

「風の足よ……」

全身を赤く光がともなった煙が薄く包み、染み込むように俺の体と同化していった。

再び銃口がこちらを向く、引き金が引かれる前に、俺は地面を蹴った。

とんでもない速度で景色が後ろに流れる。それは自分が踏み込んだからだったが、脚力とは明らかに差のある移動速度。おかげで実感

がわからない。

俺を見失い、あたりに視線を走らせる男たちを後ろに、俺はゆつくりと煙草を吸っていた。

今、俺が使った法術は、俺の速度を補助する法術。速度に法力を上乗せして、異常加速している。

しかし、反射速度にまで変化をもたらすわけでは無いから、八重刃のように撃った弾丸を見切って回避、なんてことはせずに、撃たれる前にあたらなそうな場所まで全力疾走。先に逃げておく。

「派手に行くぜ」

十分に吸い終えた煙草を踏み消すと同時に、すでに俺の口には煙草が一本。

俺の声に気づき、八重刃を相手にしてるもの以外全てがこちらに、切っ先を、銃口を、矛先を、拳を向けてきた。

煙草をくわえたまま、俺は宙に身を躍らせる。吹き抜けとなつている玄関ホール、天井近くまで一気に到達、再び俺を見失って右往左往する敵が小さく見えた。

適当な取っ掛かりに右手でつかまる、あいにく空を飛ぶ法術までは使っていない、左手で、真下に向かって法術を描き始める、煙草の火を用いた、俺の中で少し上級の類の法術を構築していく。

威力よりも、範囲を優先させる法陣を築いていく。

ほぼ完成したところで、ようやく敵の一人が俺の姿に気づいた。残念だが、遅すぎるな。

今のポジションなら銃を当てることはそうとう難しい、法術を放つにしても、八割方完成し、なおかつ補助術で加速している俺に今からスピード勝負を仕掛けるなんて、無謀なことだ。

敵が眼下で難しいことと無謀なことをしている間に、無事法術は構築された。

「鉄雨よ……」

数千にも及ぶ鉄の小球が、法陣からショットガンのごとく射出され、下に向けて発動したために、それこそ雨のようにフロア一帯に降り

注いだ。

一つ一つの小さな音が重なり合い轟音と化し、コンクリがはじけ、粉塵で一階は完全に見えなくなった。

音が止むと、うめき声だけが耳に伝わってくる。

数十秒して、やっと粉塵が晴れる。

床や壁のコンクリは砕け、ガラスケースに入れ展示されていた高価そうな骨董品も全て粉々になり、地面には血を流してうめいている人間、惨状といってもいいかもしれない。

その中で一画、人一人入れる隙間だけ、完全な無傷だった、そしてそこに立つ人間も無傷、八重刃だ。

もちろん、俺はそんな細かい制御はしていない、八重刃の腕を信じ、八重刃の部分もまんべんなくあたるように発動していた、予測どおり、法術をかき消す術、崩刃によって、俺の攻撃を防いでいた。喰らっていたら俺まで困っていたわけだが。

「よし、どうする？」

ぶら下がったまま、下にいる八重刃に問う。

「先にいけ」

たしかに、この位置からどこかの階に飛び込んで、単身で行ったほうが早い。

「わかった、早く来いよ」

「承知した」

八重刃が瓦礫を踏み越えて、階段を目指し始めた。俺は反動をつけて飛び、手近な階に転がり込んだ。

周りに視線を走らせ、情報を得る、どうやらここは十一階、敵がないのを確認すると、煙に法術を描き出し、解呪を行なった。

補助法術は、使い勝手はいいが、発動している間は常に法力を持っていられるため、いちいち移動にまで使っていられない。

八重刃が下から上がってくるようだし、ゆっくり行くことにしよう。そう思って、のんきに煙草でも吸いつつ、俺は階段を上っていった。どうやらさっきの戦闘でほとんどが下に降りていったようで、九階

抜かしてここまで来た俺は、誰とも鉢合わせせずに、十四階まで到達した。八重刃のほうは大変かもしれない。

階段から通路を覗く、人が五人は余裕で通れる通路の先に、その大さめの通路を半分埋め尽くすかのような、巨体が一つ。

煙草に火をつけ、くゆらせながら悠然とそいつの元へ向かう。

筋骨隆々の巨漢、近づけば、見上げるほどにでかい。体に見合った角ばった顔には、照明で影が差していた。

「用事があるんだ。通してくれないか？」

「俺はこの階の守護を命ぜられた。なんびとたりともここは通さん
！！」

暑苦しい男だ。

「力ずくで行くぜ？」

「ならば貴様の力を示してみよ！」

がばつと両腕を開いてきた、一瞬攻撃かと思いき身構えたが、巨漢はそれ以上動かない、ほんとにこっちの力を試しているようだ。見た目どおり、頭の回りはあまりよくないようだ。

全力で付き合う気はない、気絶させるだけで十分。

煙を吐き出し、術を描き始める。法術が隠れて張られている可能性もあったが、初撃は、生身の体を気絶させる、ひどく簡素な雷撃法術を作る。

「痺れてろ」

放たれた雷撃を、やはり避けることなく巨漢は受けた。大きく後ろに下がり、卒倒、するはずだったが、巨漢はひざをつくだけにとどめた。気絶していない。

威力を測り損ねたか？ それとも根性とかいう奴か？

とにかく、敵はまだ倒れていない。二発目を撃つのは卑怯といわれそうだが、法術を張られる前にケリをつける。

「きかん……きかんわあ！！」

重低音の大声を出しながら、巨漢は立ち上がった。そして、その体には、異変が現れ始めた。法力が収縮していき、歪みが起きる。

おかしい、何も法術を発動させた様子はなかった。

男が立ち上がるころには、鈍い輝きを放つて過ぎて過ぎる重鎧が装備されていた。そして周りを、衛星のように回転する三つの三角の盾が現れる。

「貴様の攻撃など、この俺様の『パーフェクトスーパーアーマー』と『グレートビットシールド』の前には、貴様の攻撃は石ころと同じよー！」

そんな説明どうでもいい、防御性能もどうでもいい、何で発動したんだ？ モーシヨンはなかったはずだ。

……まさか自然発動型か！？

ありえねえ、あんな馬鹿にそんな才能があることが認めたくねえ。法術の構造自体は単純だが、あの法力の量もおかしい。自然発動だとは認めたくない。

鎧に覆われてさらに一回り大きくなった男は、背中に背負っていた折りたたみ式の巨大な戦斧を取り出し、豪快に横薙ぎに振ってきた。モーシヨンが大きすぎてバレバレだ。容易く下をもぐって避ける。そこから連動して地面に法術を描き始める。横で通路の壁に斧が激突し、コンクリがはじけ、瓦礫がこつちまで飛んでくる。

とくにダメージを受ける大きさの物は飛んでこないから、無視して法陣を描き、完成させる。

「雷蛇よ……」

地面に放たれた細い三条の雷撃が、うねるように複雑に地面を跳ね回りながら、大男の足元に直撃。

したと思ったら、男の周りに浮いていた三つの盾がそれぞれを受けきり、まったくダメージがない。

雷撃との衝突により砕けた盾は、すぐに新しい物が再構築され男の周りを回っている。

「ガッハッハ！ 効かぬといっている！ 早々に立ち去れい！！」
くそ、ふざけんなよ？ 雷撃は人間の反射速度を超えてるんだぞ？

そして今の法術は、標的の足元に狙いが集中するというのが弱点

だが、複雑に跳ね回るランダムな軌道で多角から攻撃するものだ、なぜ全て防御できる？

敵の能力を把握しようと頭をフル回転させつつ、再び煙の法陣を築き始める。

「穿て……」

一つの腕の太さほどはありそうな、鉄の杭が法陣から打ち出される。敵の動きを注視する。相手はそれを無視して突進してくる、当たる直前でさえ、完全に意識していない。見えていないかのような動き。ぎりぎりのところで、俺は突進を回避した。相手はそのまま壁に激突した。

鉄杭は盾を砕くが、次の瞬間には新しい盾が男の周りに回っていた。そうか、無意識下で、勝手に防御してるな、自然発動、おそらく敵の法力に対し反射的に発動する自動防御、厄介だ。

壁に埋もれた半身を引き抜くと同時に、再び俺に向け突進、斧の質量に任せた豪快な縦振り。

豪快すぎる、一発あたれば、体が真っ二つだろうが、あれを当たってくれるお人好しいない。

「おのれちよこまかとお！！」

「でくのぼうがいうなよ」

その言葉に、男の額に血管が浮き出る。

挑発しつつ、俺はすばやく法陣を描き出す。盾が今出ている三つだけなら、それ以上の技を繰り出せばいい。

だが、敵もそこまでとろい奴じゃなかった、法術を編みこむ前に、次の一撃が肩めがけて飛んでくる。法術を描くのを中断してそれを回避。

法陣に敵の刃が当たり、途中まで形成された法術が、煙を霧散させる形で無効化された。

ここは一気に距離をとって、大きい奴を一発決めたいが、あいにく通路には限りがある、しくじればこっちが八方塞だ。鎧の強度もわからない、測り損ねる可能性が高い。

相手の法術は防御一辺倒、全精力を防御に回している、攻撃は自身の怪力のみのような。

現状じゃ、勝てもしないし負けもしない勝負だ、我慢比べしてる時間もない。

八重刃を呼んだ方がいいな。俺じゃ少し状況がわるい。

ポケットから携帯を呼び出し、八重刃へコール。

「携帯だと！ なめたまねをお！」

さらに顔を真っ赤にして、猛烈な突進、元から頭のない攻撃が、さらに単調になる。

「そっちはどうだ？」

『敵と交戦中』

たしかに、携帯越しに戦闘の音が微かに聞こえてくる、敵はそれなりに人数がいそうだな。

「今、目的の階にいるんだけどな、少し厄介な馬鹿がいる」

「ばかだとお！！」

大声でわめきつつ、風を巻き込みながらの攻撃が飛んでくる。もちろん俺は避けた。

『確かに』

男の声が聞こえ、八重刃もうなづく。

携帯越しに響いてくる音は、さっきから剣戟音と敵のうめき声ばかり。片手でよくやる。

「俺じゃ少し分が悪いんだ。大変そうだけど、こっち来てくれるか？」

『分が悪いとは？』

「防御力を生かした、突撃戦法。倒せるほどの法術を構築する暇がない。来てくれるか？」

『持ちこたえられるか？』

俺が来るまで、ということだな。

「安心しろ、あたりやしないさ」

当たるはずがない、携帯を持って片手がふさがった状態で、話しな

がら避けられるんなら、余裕だろう。

『承知した……』

そして通話が切れる。さて、適当に捌いていけば来てくれるか。再び振るわれた戦斧を、俺は難なく避けた。

何発避けたか、すでに通路はぼろぼろ、倒壊しかねないころ、瓦礫の崩れる音の中に、微かに背後からの足音。

「来てくれたか。早かったな」

「少し遅れた」

俺からしてみれば十分早いが、八重刃はそうは思わなかったようだ。

「貴様も敵かあ！ 二人に増えようとも俺は倒せんぞお！！」

「俺達も倒れないんだがな。このままじゃ……」

「なにをお！」

俺に向かって突進してくる巨漢、さっきからこれの繰り返しばかりだ。

「少し時間稼ぐ。一撃で倒せる法術を準備しといてくれ」

後ろにいる八重刃に指示を送ると、再び俺は幼稚なダンスに付き合いつつ始める。

「どういうことだ？」

疑問を八重刃が投げかける。

八重刃は、敵の鎧が法術によるものと判断して、準備の掛からない崩刃で一気に倒すつもりだったのだろう。

「崩刃は駄目だ。奴の鎧は確かに法術によるものだが、厄介なことに自然発動型。消しくて後から形成されて、刃が止まる可能性がある」

崩刃で分解した法術の鎧を、一瞬にして再構築されてしまえば、鎧の途中で刃が固められ、そのまま折れる。

「承知した」

倒す術を思いついたか、鞘から剣を抜き、両手で前に掲げるように水平に構えた。

そこから、彼は踊るかのように動き始める。剣を振るい、空間を切

り裂いていく。

その軌跡には青き光が帯び、一つの形が形成されていく。

動きはさらに加速され、まるで剣だけが踊るがごとく、八重刃の周りには無数の線が浮かび上がっていく。

「零刃」

最後に、血振るいをするかのように右足元へ刃を振るうと同時に、静かに喝を放って法術が完成する。

描かれた蒼き線の群れが、微動だにしない刃の元へと収束していき、刀自体が蒼く輝きを帯びた。

八重刃の持つ、かなり高位の法術だ。この男の法術を破るためには、一番効率がいいだろう。

八重刃のほうをずっと眺めながら攻撃を捌いていた俺に激昂し、ひたすらに俺に向け攻撃していた男は、八重刃が喝を放ってようやく法術を発動することに気づいた。これで、男の勝ちはなくなった。

「何をやってても無駄だあ！」

俺から八重刃へ標的を変更し、地響きを立てながら八重刃に突進し始めた。

それに対し、八重刃は霞下段に構え、静止する。

動かない八重刃に向け、斧が振り下ろされ、直撃するかと思われた瞬間、八重刃が男の脇をすり抜ける、同時に金属音。

男と八重刃が交錯した後、三つの盾が両断されると共に、男の両腕と両足から血が噴出し、転倒した。四ヶ所を斬っていたというのに、斬撃の音は一つしか聞こえなかった。

男はもがこうとするが、腕と足に力が入っていない。的確に腱を切り裂かれたためだ。

再び、本当の血振るいを八重刃がする、しかし、すでにその刃に血はついていない。礼儀上でそれを行い、八重刃は納刀した。

今、発動していた八重刃の法術は刃の先に、単分子の刃を付着させるといふ高位法術、分子一つ分という極薄の刃は、切断する物体の、分子と分子の隙間を通り、分子間結合力を消失させて斬るといふ、

物質の硬度を無視し、全てを断ち切る絶対の刃。

男の鎧も、例外なく切り裂いた。さらに、物質の形をまったく変形させず、消失させたわけでもないから、総量の決まっていた鎧は再構築が行なわれず、刃を止められることもなかった。

だが、ただ使えるものじゃあない、刃自体が薄すぎて、少しでも角度を間違えたり、切断している最中に物が動いたら刃が欠ける、それに、極薄の刃だけでは形を保てないから、どうしても厚さのあるもの、今の八重刃のように刃などに装備しなければならず、それが邪魔をして刃が進まない。

八重刃の、達人の域を超えた剣術と、刃の摩擦抵抗を少なくして、邪魔にならないようにするという法術を平行発動させる巧みさがなければ扱えない代物。

「強いな」

「時間があれば、お前も倒せたらう」

もし時間稼ぎをするのが八重刃だったら、俺が高位の法術を築いて吹き飛ばしていた。

「まあ、そうだろうがな。でも、俺とは違って動きもすごいもんでさ、改めておどろいたよ」

法術の技術、身体能力、戦術、どれを取ってもハイレベルだ。

「さて、もうここはお留守みたいだ。さっさといわれた品を探して持って帰ろう」

「承知した」

散策すると、目的の物は、豪奢な一室にある一つの机の脇に置いてあった。

「これだろ？ よし、いこうぜ」

「ああ」

ケースを持って、俺は踵を返した。後を八重刃がついてきた。煙草を吸いながら、夜の街をゆっくりと俺達は歩いていった。

再び場面はユーニの車の中。目の前には笑顔を浮かべるユーニ。こ

の場から逃げ出したいが、夢だから無理。

「もってきたぜ。これで依頼は終わりだろ？」

そういつた瞬間、眉根を寄せ、頭を押さえ始めた。まるで、待っていましたとでも言うように。

「困るのよねえ、なんてことしてくれたのかしら」

「どういうことだ？」

「あんなにめちゃくちゃにしてくれちゃって、これが請求よ？」

そういつて見せた紙には、もらう報酬よりさらに桁が違う額が記載されていた。

「は？ どういうことだ？」

理解できなかった。俺達は、何もユー二のものを壊していないつもりだったから。

「あのビルは……私の所有物なの。壊したものは全部お金、払ってもらうわ」

やっぱり何を言っているのか、理解できなかった。冗談とは思えない。

「は！？ 犯罪組織のビルって言ってたじゃねえか！ そもそも何でそんなところに俺達を行かせたんだよ！ 俺達は仕事をやってただけだ、払う必要はねえ」

言った瞬間、前者の問いに対し、一つ答えが浮かび上がった。

「そうよ、あそこは、犯罪に手を染める、私たちのビル」

「なっ！？」

嫌な予想の中しやがった。

「そして、あなたたちは払う義務があるわ。私は、とても簡単な仕事、といったわけよ？ 何も、戦闘する難しい仕事とは言っていないわ、あなたたちが勝手に勘違いしただけ。それに、もってきて欲しいといったの。あんな奪うようなことなくてよかったの」

「お前が説明不足なんじゃねえか！ 知ったこっちゃねえ！」

「でも、あなたは確かこういつたわよねえ。無事依頼の品を運ぶよう善処しますが、それが紛失、破損した場合も、責任を問いかねま

す、て。つまりは、それ以外の責任は負ってもいいってことでしょ？ 言葉が足りないのはどちらかしら？」

完全な揚げ足取り、しかし、俺についていた足は全部取られてしまった。

「……くそが！」

怒りのあまり、殴りたくなっただが、ここでそれをしてもまったく意味がない。もう、俺達には、その金を払うしか道が残されていないかった。

「今すぐ払うのは無理だ。それに、何とか少なくならねえのか」
少しでも楽になるよう、交渉を開始する。

「ん、そうね、あ、こんなのはどうかしら」

そういつて、しばし俺達を見比べて考えるユーニ。

「八重刃、だっけ？ 私の彼氏になりなさい、そうすれば、少し安くするし、定期的に報酬を払うから、それで返済も出来て、一石二鳥よ」

つまり、八重刃を買うということだった。はじめから、そのために俺達をハメていたのかもしれない。

「断る」

そう一言で切り捨てた。

「じゃあ、私と勝負しない？ 私が勝てば、全額払うまで私の彼氏、あなたが勝てば、全部チャラにしてあげる」

「勝負とは？」

「カジノで、ドロップカー、手持ちはこれの返済額」

「いいだろう」

その一言で勝負することが決定し、二人が立ち上がった。

向かった先は、カジノのエクストラルーム、最低賭け金、アンティが一万ドルという金持ちが道楽に使うとは思えない破綻した部屋。手持ちは五十万、賭けるだけなら五十回分、実際はもっと短期決戦になるだろう。

二人が一つのテーブルに着く。他には誰もいない。

八重刃の生死を分かち戦いが、始まった。

二人ともかなりの好勝負をしている。とられたら取り返すの繰り返

し。
八重刃は勝てそうにないと悟ると、すぐにフォールドして、被害を
最小限に抑えている。

対するユー二はまだ一度もフォールドしない、ぎりぎりで競り勝ち、
ハイリスクハイリターンに攻めている。

八重刃の手札を見たいんだが、それをして俺の動作でユー二に何か
悟られてしまつては困るから、二人の手札が見えない位置で俺は観
戦している。八重刃に迷惑はかけたくない。

配られたハンドを見ると、ユー二は小さく痙攣させるように、人差
し指を親指に打ちつけていた。本当に小さな動作だったが、彼女は
ワンペア以下の手札のとき、必ずこれをしている。無意識に弱い役
のときに行っているようだ。

八重刃はこれに気づいているだろうか、いや、気づいているだろう、
戦闘で培った洞察力が、それを見逃すはずがない。

「チェック」

やはり役が弱いのか、掛け金を増やさないで八重刃に番が回る。

「ベット」

八重刃がかなりのチップをポットに押し出した。

「コール」

同額をユー二が賭ける。

チェンジさせるターンが来る。

無言で八重刃が一枚のカードを場に出す。となると、ツーペア、フ
ォーカードどちらかの可能性が高い。フルハウス狙いもありうる。
新しいカードが八重刃の手元に渡った。

「スリーカード、チェンジ」

ユー二は三枚を交換した。配られたカードを見た後、打ち付ける動
作は行なわない。それなり、ということだろう。

「ベット」

さらに八重刃がチップを賭ける。

「コール」

掛け金を上乗せすることなくユーニがチップをポットに置く。さほど強くないということか。

ドローパーカー、単純そうに見えるが、それが故に、敵の手札を読みにくく、戦略が立てにくい。

「ショウダウン」

ディーラーが合図し、手札が開かれる。

「スリーカード」

八重刃が手札をオープンする。10のカードが三枚並ぶ。

「スリーカード」

三枚交換したというのに、同じ役を、ユーニが出した。そのカードはQ。八重刃の負けだ。

賭け金が回収され、全てユーニの元へ帰ってくる。これはかなりの痛手だ。ユーニがずいぶん有利になってしまった。

再び賭けが再開される。

配られると、再びユーニは指を打ちつけ始めた。また弱いわけだ。

この癖が出ていることを、ユーニ自身に気づかれる前に、勝負をつけたい。

「チェック」

やはり、ベットは行わない。

「ベット」

大胆に攻め入る八重刃。それなりの役が出来ているのだろう。

「コール」

降りることなく勝負を続けるユーニ。

実は、すでに手持ちが決まっているわけだから、上回っている状態なら、相手が賭けれない額を賭け、無理矢理勝負から下ろして、姑息にアンティを稼いで勝つということが出来るのだが、そこまで卑怯なことはどちらもやらない。

先ほどと同じように、八重刃が一枚カードを交換する。

「ワンカード、チェンジ」

同じく一枚のカードをユー二が変えてきた。しかし、手札を見ると指を打ちつけ始めた。

なぜか、俺は違和感のようなものを感じていた。

「ベット、オールイン」

よりいい役が出来たのか、大勝負に八重刃は出た。全額を、八重刃はベットした。ユー二の手札は弱いはずだから、これなら勝てる。勝てば場がひっくり返せる。

「コール」

それでもなお、ユー二は勝負を降りなかった。

その声の響きに、俺は違和感をさらに覚えていた。

「シヨウダウン」

ディーラーの合図と共に、八重刃が手札を広げた。

「フルハウス」

Jのスリーカードと9のペア。幸運の女神が彼に舞い降りたらしい、かなりの好カード、普通だったら負けない。

八重刃のオープンが終わっても、ユー二はまだオープンしない。負けたことを悔やんでいるのか、それとも、逆か？

「ふふふ」

含み笑いのようなものをカード越しに八重刃に送る。よくがんばったとも言うつもりか？

「負け惜しみか」

札をオープンすることを八重刃が催促する。

「よくがんばったわね」

予想通りの言葉を、ユー二が言った、その意味は、百八十度逆だった。

勝利の女神は、彼女に微笑んだ、いや、彼女が勝利の女神だったのかもしれない。

オープンされたカードは、Kのフォーカード。

八重刃は、全ての手持ちを失った。すなわち全体の勝負に負けたことを意味していた。

ありえない、確かにユーニは指を。

思わず指を俺は注視してしまった、その視線を追うように、ユーニも自分の指を見る。

「ああ、これ、気づいてたの。まさか、こんな癖が本当にあると思っただ？」

そういつて、見せびらかすように指を打ちつけた。

今までのあの癖は、巧みな罠、フェイクだったということだ！

そもそも、弱い役なのに、ユーニは一枚しか交換しなかった、そこからおかしいことに気づくべきだった。おそらく八重刃は、チェンジする前からスリーカードを持っていた。自分の役の強さに、その判断を読み間違えてしまっていた！

「さうて、約束どおり、私の彼氏になってもらうから」

「ぐ……」

その言葉に、愕然とし、八重刃は俯いたまま動かなくなった。

「ほら、さっさと行きましょ？」

腕をとられ、引きずられるように動く八重刃を、俺はただ見送るこ
としか出来なかった。

これが原因で、俺と八重刃はチームを解散した。その後も、俺は自分の給料の半額を八重刃を支援するつもりで仕送りしている、八重刃は受け取ることを拒否したが、引き金は俺だったから、無理矢理受け取らせている。

まったく、嫌な夢を……見ちまった。

ベットのの上に戻り、片膝を抱え込んでいろいろ考える。

初めて仕事をしたときから、ずっと変わらない思考のループ。

あの時は、必死で、何も気づけなかった。何に必死だったのかもわからない、生きることだったはず、だけど、もしかしたら、生きようと必死だったわけではなかったかもしれない。

人が、殺される姿を、生で見ただ、俺は……。

それは、とても近いこと、自分が、いつか八重刃さんのように、人を殺すようになるのかもしれない、自分の手で、人を殺すんだ。自分が、誰かの手で、殺されるかもしれないんだ。

そういう世界に、足を踏み込んでしまった。

恐怖で堪らなかった、自分の命が危ういことに、誰かを殺すかもしれない可能性に。

あの初めての仕事から、俺はずっとこんな感じだ、五日間ぐらいは、食事もまともに喉を通らなかった。

そんな俺に気づいて、八重刃さんが励ましてくれた。それで楽になって、何とか食べれるようになったが、時々今みたいに吐いてしまう。

でも、ずいぶん回数が減った。それはいいことだったが、同時に、自分自身にあきれ返った。

人の生き死にに、慣れていく自分がそこにはいて、そんなことどうでもいいと思い始める自分がいて、記憶が薄れていくのがわかった。それが嫌だった。

それから俺は、今までの日常だった物を、放棄した。そんなものは、学校しかなかったけど。

いわゆる、学校を辞めちゃったわけ。先生に理由を聞かれたけど、適当にはぐらかした。

なんか、もうそれは、どうでもよくなってしまった、勉強とか、最初からやりたくなかったし、意味ないものに思ってしまったわけで、日常が、非日常に感じた。

片手に持っていた携帯の画面を覗く。

唯一のつながりは、携帯に入った友達のアドレス。時々メールしたり、会って遊んでくれたり。

よく友達には、ニートと呼ばれ、若干うらやましがられている。遊ぶのは、そりやすっげえ楽しい。でも足りない奴がいる、いつも一緒にいたあいつと、連絡が取れない。

ずっと前から、メールしても返信来ないし、電話かけても通話不可。彼女とずっといちゃついているのかと思って、他の友達に聞いてみたら、学校にも来ていないって言う。

毎日一回送っているメールを、俺は送る。

『オゝい、生きてるか？ 返信ヨロ』

送信ボタンを押すと、携帯を閉じた。

いったいあいつは、なにしてんだろ。

することがなくなつて、携帯をポケットにしまつと、入れ違いにライターを取り出す。

ジッポ、親父にもらつた奴。死んではいないから形見じゃない。

もちろん俺は未成年だから煙草を吸わないいい子です。

ただ、ずっと子供のころから弄り続けていたから、扱いには長けている。まわしながら火をつけたり、弾き開いたり、指を鳴らしながらつけたりできる。

友達に見せるとけつこうウケがいい、でも、煙草を吸ってるんじゃないかと疑われるのが弱点だったりする。

火をつけると、ボーっとそれを眺める。

火を見るのが、好きだった。子供のころから、火に惹かれるものがあった。

姿をとどめることなく、刻一刻と形を変えるその姿と烈しさに、何かあこがれるものがあつた。

昔、親父に内緒でこのジッポを拝借して、一人で火をつけて遊んでいた。

このとき、ばれて親父にこつてりしられた、とか、草むらに引火して火事を起した、とか、珍しい事件は起きなかったからあしから

ず。

そして、その時気づいたことがあった、なんとなくだけど、火を揺らめかせることが出来ることに。

眺めながら、その炎を左に傾けたり、右に傾けてみたりする。

今は、それが平然と出来た、原因がわかったからだ、自分が法術士ってことに気づいたからだ。

渦巻かせるとか、少し難しい芸当も出来るようになった。

法術の使い方のコツを、いろいろ八重刃さんに教えてもらった。

法術、俺はこの力で、いつか人を……。

また思考が回帰して、鬱になった。

気晴らしに散歩シヨ。

空は真っ暗、街の明かりで星もよく見えない。まあ、自分に星を眺める趣味はないから放置。

時計を確認すると、深夜二時。ずいぶん変な時間に起きてしまった。

こんな時間、開いてるのはコンビニとか二四時間営業の場所か、俺一人じゃ絶対入れないような場所。

とりあえず、どうしようかなあ。

ふらふらと歩き続ける、夜風が吹いててけっこう気持ちいい。

公園が目に入ったから、なんとなくよってみる。

ホームレスの人たちがいなかったから、俺一人しかない、静かで平和。

ベンチがあっただけど、俺はあえてのブランコ。

ポーっと座ってたけど、やっぱり暇だったから、こぎ始める、立ちこぎで。

深夜で一人でブランコこいでる俺ぐらいの年って、かなりクレイジーな人間だよな。

ナニやってんだか。

うおお、俺は風、風になるんだあ！

全力でこぐ、そりゃもうイスをつなげる鎖と地面が水平になるくらい全力で。

うわ、ヤベ！ こえええ！

あまりのものはしゃぎすぎて逆に怖くなってきた、慎重にスピードを落とす。

ちようどいいスピードでほっと一息、でも疲れたから完全に停止するまで惰性に流す。

止まる直前になって跳躍、少し距離を稼いで着地。

ふう、やつぱ、暇っちゃ暇だあ。

さすがにこの時間は友達寝てるだろうし、うう、そうだ、コンビニこ。

近くにあるコンビニといえば、八重刃さんがいて、時々ユーニさんがいるあそこしかないな。

とりあえず向かった。こんな深夜だというのに、八重刃さんはまだ働いていた、一体いつ休んでいるというのだろう、気になる。

「こんちわ」

こんばんわというべきだろうね、今の時間は。

「こんな時間にどうした」

そりゃ不思議がるだろうね、今の時間なら。

夢見て吐いて目が覚めたとかいったら、八重刃さん心配するだろうしなあ。

「ああ、なんか深夜アニメ見てたら目が覚めちゃって」

適当な嘘についておく。

どうやらユーニさんはいないらしい、当たり前だろう、普通の人なら寝ている時間だもん。

俺のほかには客がいないのかなあ、と思ったら、いた。よく見かける、三人組のジーさん、通称ジーさんトリオ、そのまんまというのは気にするな。

何でこんな時間にいるんだろ？ おかしいよ、じいさんだったらもう寝てるだろ。

まあ、いいや、読んでない週刊誌立ち読みしよ。

ギャグ漫画を見ているあたりで、なんか騒がしくなってきた。

コンビニのパフェを食いながら、ジーさんトリオがなんか言っている。

「お前らな、今こうして食っていけんわ、俺が今まで田んぼ耕してきたからっぞ？」

「なにいつとるだあ、お前一人じゃなくて、わしら三人で土いじくつてたからだある？」

「ああ、耕した、死に物狂いで耕したあ」

ぜんっぜん意味がわからないから、右の耳から左の耳へ通過、俺は立ち読みを続ける。

ああ、意外と読んでないのが少なかった。暇になってしまった。

とりあえず何か新しいドリンクが無いか見て、ないようだったから何も持たずにレジへ行く。

「八重刃さん、唐揚げ棒一つ」

無言で保温する機械から一本取り出し、手早く袋に入れて渡してきた。

唐揚げ三個で百円という、非常に優しいお値段のこの一品。

知り合いだし、それに先輩だし、おごってくれたっていいと思うのに、八重刃さんはそこらへんがなんかいろいろ大変らしいので、しようがない。

「じゃあ、俺帰って寝ますね」

「ああ、おやすみ」

一言会話を交えて、俺は店を出てく。

唐揚げをかじりながら、ぶらぶらと町を徘徊。

こんなところ見られたら、深夜徘徊で警察に捕まっちゃうだろうなあ。

補導の経験がないから、そうなるかどうかは知らない。出来ればずっと知りたくない。

自分が一人暮らししてるアパートに帰るには、どうしたって街灯の少ない道を帰らなければならない。

暗いのが怖い、とか、そういうことは無い。でも、あまり通りたく

ない、犯罪に巻き込まれたくないし。

ああ、やっぱり暗いよ……。犬のウンチとか踏んだらマジショックなんですけど……。

暗い足元に目を凝らしながら、歩いていく。

すると、なんか空気に違和感、嫌な予感がしてきた。危険信号が鈍く鳴りはじめる。

うつわ、やだな。この感覚が嘘であることを俺は切に願います。細い十字路のところで、二人の人間に出くわす。暗くてよくわからないけど、がたいがよさそうだから二人とも男。まさか、そんなことないよな。

急に俺の方ギロツて向いて、襲ってきたりは、しないでくれよお。

内心びくびくしながら、俺は通り過ぎようとした。

視線が刺さった、本当にギロツて向いてきた！

やばいやばいやばい、そんなふうに目を向けてくるのは、通り魔だ！

何で二人組みなんだよ、強盗かよ！とにかくヤベエ！

死ぬかもしれない！

逃げろ！

足音が、こちらを向いた。俺は一目散に逃げ出す。

追ってこないでくれよ、俺の勘違いであってくれよ！

……

追ってきちゃったよ！

足にはそれなりに自信があったけど、あいにく今はサンダル、踵がついてるけど走りにくいのは変わらない。

必死に俺は街を駆ける。家に帰りたいかったけど、逃げた方向は正反対。

なんで……こんなに追って来るんだよ！

俺のほうが速いらしく、だんだんと離れてきているけど、もし体力があつちが上だったら、いずれ追いつかれる。執拗に俺を追いかけてくる。

急に、足音が消えた、諦めてくれたか？

走りながら、視線を後ろに向ける。

そこにあるのは、不思議な光り。何もなければずの場所に浮く、光の集まり。

なんでだよ！　なんで、法術なんて！

それは明らかに法術で、俺に向けて放とうとしている。

とにかく、離れないと！

出来るだけ距離を稼げば、もしかしたら避けられるかもしれない、威力も減衰していくから、死なないかもしれない。

いや、待てよ、当たって、動けなくなったら、結局殺されるじゃん！何か叫んだのが後ろから聞こえた。多分、法術を放つための引き金、喝を放つと言うものだ。

後ろを振り返る。そこにあるのは、人一人焼き尽くすには十分そうな業火！

逃げ切れない！

なんとか……なるか！！

ぎりぎりの状況下に置かれ、逆に冷静になっていく。

俺にだって、使えるんだ、法術が。火を消すことも出来るはずの、これが。

八重刃さんに教えてもらったことを振り返っていく。

忠実に再現。

俺の体の中の法力を感じ、それを一つの力として発現していく。大事なのは、イメージ。

圧力を、開放するイメージを、強く思う。開放というのが、大事な。

しい。

体の中に流れている法力が、一つの意味を持った、つもり。実際、そんなすごいことじゃない、八重刃さんにそう教えてもらって、なんとなくでやっていること。

「空気よ！」

自然発動型って言うのは、喝さえ必要ないらしいんだけど、八重刃さんがコツとして、喝を放つほうが、一つの定まった力として、制

御しやすいといっていた。

手を前に掲げる、炎の前にある空気の気圧を、一気に下げる！

自分の中で最大の力を発揮するように、全力で。

すると、火は、その空気の壁を通過しようとした瞬間、酸素量が足りず見る間に勢いを失った。

よかった、もしあれが、完全に法力だけによって発動していたものなら、意味がなかった。

男たちは、あっけに取られていたが、無事な俺を見ると、再び追ってこようとした。

地面には、ゴミとか、葉っぱとか、いろいろなものが焼け残っていた。今も火がついている。

しっかりと男たちに目を向けながら、じりじりと後ろに下がる。

まだだ、まだ、俺が操った空気のところじゃない。

足を、男たちが踏み込む。俺が疲れている姿を見て、余裕でゆっくりと歩いてきてる。

まだ、完全に入っていない、後……もう少し。

自分も巻き込まれるかもしれないが、それぐらいじゃないと、本当に危ない。所詮自分の力なんてたかが知れてる。

男たちが、法術の中に入り、急激な気圧の変化と酸素不足で、わずかに驚くのが見えた。

よし、いまだ！

俺は、再び力を発動する。いままでの、圧力というものを開放するイメージから、今度は自分の力から開放するイメージで、その空気の圧力を一気に増やす。

落ちていた新聞でくすんでいた火が、爆発的に膨れ上がり、炎となつて道を埋め尽くす！

酸素がないところに急激に酸素を送ると、爆発のように火がでくなるって、バックドラフトってやつ。

ぶっつけ本番ってか、その場の思いつきでやったけど、うまくいった！

どうせ人を殺すほどの威力ないし、すぐに消されるだろうから、その隙に俺は道を複雑に曲がって相手をまいた。

ずいぶん離れても走ることをやめないで、一気に家に到着、玄関でへたり込んだ。

「ふう〜、あぶなかった〜」

やっと一息つけた、マジで今のは危なかった。

なんで、俺が追われたんだろう？

理由があるのかもしれない、でも、あんな犯罪者の思考なんておれにや読み取れない。

とにかく、疲れたし、汗かいたし、冷たいシャワーでも浴びよ。

汗を流して火照った体を静める。

いいね、冷たいのは。何しろ光熱費が安くて済む！

シャワーを浴びながら、冷静になっていろいろ考えていく。

法術士に、襲われる……かあ。そういえば、ちよつと前にも、連続殺人が起きてたな、法術士の手によって。

すると、俺の中で、繋がらなかったはずの出来事が一つになっていくのを感じた。

え……待てよ……そんなはずはない、思い違いだ。

確かに、連絡はないけど……まさか事件に巻き込まれて、死んだなんてこと……あるはずない。

法術士の手によって？ いや、あいつはただの一般人、こっちは関係ない人間だ。

どんどん、いやな想像が膨らんでいく。

どうしたら、わかるんだろう。確かめたいけど、連絡が来るまで待つてたらいつまでかかるかわからない、そんなことないだろうけど、死んでたら……連絡来ないし。

……そうだ、ユー二さんに聞いてみればわかるかもしれない！ あの人情報屋してるらしいし！

うん、そうしよう、明日、ユー二さんに聞いてみよう。

決まったからには、すぐ寝よう。

俺は濡れた体を拭いて、さっさとベットにもぐりこんだ。疲れてたのか、夢は見ずにすんだ。

目覚まし時計の音と、それに隠れて聞こえるノックの音で目が覚めた。

ノックしてるのは、八重刃さんだろうな。いちいち起こしに来ている。

集合時間より早くに起しに来る、八重刃さんが悪いのだろうか？

それとも八重刃さんに起してもらってる俺が悪い？

とにかく急がないと。

「ああ！ 今開けます、ちょっと待っててください！」

適当に服を着込んで、ドアまでかけて、鍵を開けた。

やはりそこに立っているのは八重刃さんだ。

「おはようございます！ すぐ支度するんで中で待っててください」

「ああ、邪魔する」

しなやかっというか、なんかきれいに、部屋に上がりこんで、ピシッとした姿勢で座っている。こんなときでも八重刃さんはかっこいい。

「あ、コーヒー冷蔵庫にあるんですけど、飲みます？」

「いや、結構だ」

まあ、ただのパックのコーヒーは、飲まないだろうな。飲み物には結構こだわりがあるらしいし。

とにかく、ええっと、歯磨いて、顔洗って、服ちゃんとして、朝飯食って、アー、こんなもんか？

騒がしく俺は支度をする、その間もただ黙って八重刃さんは正座している。スーツ着てるけど、まるで待みたいに。

朝食に、フレンチトーストとか作ってたけど、時間ないから、とりあえずマーガリン塗りたくって砂糖をぶちまけ、焼く！

出来たトーストとコーヒーを持って、テーブルに向かう。

一つしか部屋にテーブルがないから、八重刃さんの目の前で食べる

ことになる。

「すいません、待たせてるくせして一人で朝飯なんて」

「かまわないさ」

ここで、俺はどっちを選ぶ！ 黙ってとっと朝食を済ませるか、なんかしゃべって暇にならないようにするか！

俺は後者を選択、だって話したいことがあるし。

「そういえば、今日、ユー二さんにあって話したいことがあるんですけど……」

とりあえず、原因である法術士に襲われた件は話さない、心配かけたくないから。

「なんだ？」

「いや、友達のことを、聞きたくて、あの人なら知ってたりしますよね？」

「かもしれんな。しかし……金を請求される可能性も否定できない」

「……ああ、確かに、それだったらどうしよう」

「まあ、聞いてみればいいさ」

「はい」

さて、朝飯食べて、ユー二さんのところに早くいかないと。

最速タイムとは行かないけどそれなりの高記録で食べ終わり、いざ出発……と、その前に、トイレトイレ。

よし、気を取り直して出発。

「お待たせしました。いきましよう」

無言で立ち上がって、俺の先をいつてくれた。

ついたのは、オルタナイトの所有するビルの一つ。

俺は、オルタナイトっていう、組織に組み込まれた歯車のひとつ、だからいずれば、汚い仕事とかも、やるんだろうな。

最近鬱になっただけか。

ユー二の部屋に行くと、ドアを開けた瞬間に八重刃さんの胸に飛び込んできた。

「誠志ちゃん。おそ〜い」

うん、かわいいんだよね、別に年食ってないし、どっちかといえば若いし、すっごいきれいな大人の女性って感じだから。

でも、本性は本当に怖い、八重刃さんも、金で彼氏になってるらしいし。

抱きつかれても、恥ずかしがったり抱き返したりとかは全くせず、ただ冷淡にユー二さんを見下ろしている八重刃さん。どっちかという、より無愛想、機械的になってる感じがする。

俺しか見てないことをいいことにじゃれついてるけど、人前でこんなかわいいとこユー二さんは見せたりしない。

ああ、ポケッと見てないで、早速聞いてみないと。

「あの、ユー二さん、聞きたいことがあるんですけど？」

「ん？ なに？」

笑顔で聞き返してくる、ちょっと上機嫌っぽい。よくわかんないけど。

「えーっと、友達のことなんですけど」

「そう、ちょっと待ってて」

まだ名前とかにも言っていないのに、ポケットから、手のひらサイズの、電子手帳みたいな端末を取り出して、なにやら操作している。

「ああ、聞きたいことってこの子のことかしらねえ。一番不思議な境遇だし」

「え？」

ここで教えてもらうために、お金とかいるんだろうか。

「ん、そうねえ、今日は特別にただにしてあげる、面白いから面白い？ ていうか、今考え読まれてた！？」

気のせいだろう、顔に出てたんだ、きつと。よく八重刃さんにも何考えてるかばれるし。

「多分この子でしょ？」

そういつて、端末の画面を俺に見せる、写っているのは、あいつの写真。

「そうです」

「この子ね、死んでるわ」

……………え？

「しん……でる？」

「ええ、この前の、連続猟奇殺人の、最後の被害者。完全に死体が消滅してしまったから、公表されてないけど」

「じゃあ、あいつじゃないかもしれないじゃないか」

「私の情報を、信用しないつもり？ まあ、その気持ちはわからないくもないけど」

「でもだって、あいつは何にも関係ないじゃないか。それに、法術士が起した事件なんですよ？ なんだあいつが」

「そりゃ、無差別だったから、誰でもよかったの。運悪く標的になつて、それで殺された」

殺された、あいつが？ 殺されたんだ！ 法術士に！

ふざけるなよ！？ なんだあいつが死ななきゃなんない！

ただ、普通に生活してただけじゃねえか、世の中に知られることのない、ただの一般人じゃねえか！

ぶつけようのない殺意が、どんどん沸いてきた。

これほどに人を殺したいと思うのは、きっと力があることがわかってるから。昔、ここまで殺意を抱いたことは無い、自分の中にある力を知ってるから、沸いて来るんだ。力は、引き金になるんだ。止められない、ただ悔しくて、悲しくて、あいつを殺したやつに、復讐したい。

「誰がやつたんだよ！？」

もう敬語とか、そんなこと考えている余裕はなかった。

「ソルエツジって言う組織、初めての仕事のときの相手よ」

あいつらか！ あれが殺ったのか！

復讐の相手を聞いた瞬間、俺はドアを飛び出していた。後ろからの制止の声も聞かずに。

どうする？ どうやって復讐すればいいんだ？

俺じゃ、力が足りない。でも、殺してやりたい、組織が敵？ 関係

ない、潰すんだ。

……俺が知ってる、力のある人……八重刃さんのほかに、もつといるのか？

そうだ、あの人たちに頼んでみよう！　いくら払ったっていい、依頼として、あの人たちに受けてもらおう。

一直線に、俺は空煙法術士事務所を目指していた……

5 BOX MILD

俺の妨げるように、電話が鳴り響く。まるでであることを急かすように。

わりと近いところで、でも、携帯じゃない、着メロではなく、無機質なベルの音、事務所の電話。

依頼の電話だろうか？

でたくはないが、すっぱかすと信用が落ちるから、仕方なくでることを決意。

寝起きでだるいながらも、はいずるようにして事務所の電話に到達。少し気持ちを入れ替えて、受話器をとる。

「叢紫さん！？ うちの口口ちゃんか！！」

いきなり響いてきたのは、元から甲高い声が、さらにヒステリックになって耳障りな女性の声。

よく俺を使ってくれる、美咲夫人からの電話だ。

ちなみに、かなりヒステリックを起してるが、子供がいなくなったわけじゃない。飼ってる猫がいなくなっただけ。

「いなくなってしまうましたか？ 依頼はその子の搜索ですか？」

何度も利用している人間には、ここで二つの対応の仕方がある。

先に依頼内容を言い当てるのと、最後まで聞いて依頼内容を確認するのと。

ここで、その人の好みには合わないことをいうと、いちいちうるさい。例えば後者が気に入らない人に後者を用いると、そんなこともわからないの？ 探偵のくせにどんくさい、とか罵られる。場合によっては仕事をもらえなくなる。

ちなみに彼女は前者を好む。

「そうなのよ！ 今日の朝からいなくって！ 心配なの、早く見つけてあげて！」

ああ、まだ一日も経ってないのに探させるのか。だから口口も愛想

を尽かして逃げるんだよ。

大体猫つてのは、自由主義者だから、そんなふうにならなくても目をかけてたら嫌がる。

「はい、わかりました、それではすぐに探し始めましょう」

「頼みます、うちの子を見つけてください！」

通話が切れたから、受話器を置く。

美咲夫人には、かなり気に入られている。なおかつ報酬がいい。

理由としては、五日間ほどロロが見つからなくて、わらにもすがらないでうちの事務所を利用し、初の依頼でありつつも俺が一日で見つけたため。そのため猫がいなくなるとすぐ俺を利用するようになった。

ロロってというのは、ソマリっていう種類の猫で、見た目は、ライオンを彷彿とさせるゴージャスなえりまきと、狐の尻尾みたいなふさふさの毛並みの尾、毛色はブルー、何より俺の第一印象は、ふてぶてしい。

野良猫になったとしても、ボス猫になりそうなくらいふてぶてしい。そのためか、室内飼いの猫の行動範囲は、三十から五十メートルが基本なのだが、ロロは自由外出猫並みの五百メートルくらいまでが行動範囲。どこかで怖くなって縮こまってるっていうこともない。

とにかく、あの家の近辺に行ってみよう、大体どこにいるかも目星がついてる。

服を着て、煙草の箱をポケットに入れて、俺は事務所を出て行った。

高級住宅街の中でも、結構大きい家が、美咲夫人のお宅。とりあえずその前まで来た。

道で煙草を吸うのはマナーがわるいが、そんなこと気にしないで俺は煙草を吸っている。

吸いつつも、ちょっと辺りを見回して、ロロの姿がないか確認。

ぼったったままじゃ見つかるはずもないので、くわえ煙草しながら猫の目線まで下げる。

ここら辺は、猫の居心地がよさそうな場所はないな。

もう一度立ち上がって、煙を吐いた。

おお、そういえば、おびき寄せるためのエサを買ってなかった。

買いに行きつつ西方面を探すことにしよう。

空を見上げると、まだ明るいけど、時間としては、夕飯時。猫が活発な時間帯だな。

近くのスーパーまで、狭い路地とか、猫が入れそうな小さな隙間とかを見ながら、かなり曲がりくねって行く。

見つからないな、こっちで見つけたことはほとんどない。なぜかあいつは東に行くことが多い。

スーパーの周りを一回りして、猫がいそうにないことを確認すると、店の中に入って、ペットフードの場所へ直行。

てつきり俺は、いつも家で食べてそうな、豪華な食事しか食べないのかと思ったら、口口のやつは意外と普通の缶詰の食いつきがよかった。

いつもお世話になってるお礼に、少し高めのレトルト缶を買ってやる。この前も口口は食べたし。

缶二つだけ買って、俺はスーパーを出る。少し変な人に見えるかもしれないが、気にしない。

さて、こっからだな、大体いそうな場所は、猫がよくいる四ヶ所。湖のような池があるでかい公園と、ちよつと木がある空き地、小さなめの公園、神社だな。

でかい公園は、探すのが大変だからしないで欲しい。まずは一番近い空き地に行こう。

スーパーの前にある灰皿に煙草を捨て、新しい煙草をくわえながら、俺は空き地を目指す。

美咲夫人の家より東側にあるので、それなりに遠い、道すがら口口がいらないか確認しながらゆっくり行く。

空き地に到着、携帯灰皿に吸殻を入れ、中へ踏み入る。

木が二本、あとは膝くらいの草が生い茂るのみ。前に一度だけここ

で発見した。

木の上をよく見てみる、やっぱり、猫の姿は一匹もない。

奥の一本を見るためにさらに進んでいくと、草を掻き分ける音と共に足元を高速で影がすり抜けた。

「ロロか！ 急いで振り向いて後姿を見ると、ふわふわ尻尾じゃなかった、ロロじゃない。」

ふう、危なかった、ああやって逃がすとあとが大変なんだよな。

猫を探してるのにいたちごっこするハメになる。

もう一本の木にも、ロロは登っていなかった。草の中にも、猫がいそうな気配はない。

ここははずれか、次は……神社だな。

また同じように探しながら歩いて、神社が見えた。

石段を登った上にあるから、少し面倒くさい。

なんで神社の石段って言うのはこつも急なんだろう？ 昔から日

本人は土地に困っていたのか？

急だけど、段が少ないからさほど苦労せずに上りきる。

上ったところにあるのは、下に猫がいそうな、涼しそうな床下がある社と、そのうしろに、木々で影になって涼しげな庭が広がる。

境内で煙草を吸うとか、罰当たりなことはさすがにしない。

とりあえず、しゃがみこんで下を覗き込む、結構広いので、奥は暗くて見えない。

懐中電灯はもってないから、携帯のライトで照らす。一気に照らすと驚いて逃げられるから、ゆっくりと下から前に向けていく。

猫の足さえ見えない、ガキだっていない。

いちおう、回り込んでさまざまな角度から調べてみるけど、いない。「ロロ、いないのか？」

名前も読んでみるけど、返事なし。

いなそうだな、庭にいるか？

裏手に回って庭を見ていく、自然のものだから、探すのが難しい、ここにいるのに見つけられないで、他の場所に行ってしまうとずっ

と見つからなくなるから、念入りに探していく。
岩陰、木の上、木陰、とにかくいそうなところから、いなさそうなところまで全部探す。

「ロロ」

時々名前も呼びながら探す。でも反応はない、影もない。

ここも、はずれか。

次だ、次。

連続ではずれくじ引くとは、運が悪いな。

よし、ここで最後にしたい、目指せ小さな公園。

またもや、道程は塀の上とか足元とか、視線をさまざまに変えて探索、猫は見かけるけど、ロロはいない。

小さな公園は、猫が隠れる場所がたくさんある、遊具にも隠れられるし、もちろん木があるし、花壇のところとか。

人が少ないせいか、猫がいつぱいいいた、保健所の野良猫回収は、こちら辺はあまり行なわれていない。

とくにひどい被害が出てないらしいからだ。

適当に、みんなごろごろしたり、遊んでたり、ああ、なごむなあ。

ベンチに座って煙草を吸いながら、しばらくボーっとしていた。

見えてるやつらにロロはいねえなあ、あいつ何やってるんだろ。

立ち上がって、搜索を再開する、結構、猫を見つけるのは得意なんだが、今日に限ってロロだけ見つからない。

やめてくれよ、あの公園搜すとどれだけ時間かかると思ってたんだよ。空を見上げると、日が沈み始め、朱に染まっている。こっから日が動くのは早い、すぐ暗くなる。

暗くなってしまうえば、搜索は困難だ、かといって明日に延期すれば、美咲夫人にいろいろ言われた挙句に、お金なしとかもありうる。

はあ、どこ行ってんだか、本当に。

諦め半分で、橋の上で、煙草を吸いながら黄昏る。

行かなくちゃならないのか、公園、とか思ってたなら、足に不思議な感触。なんか当たってきた。

「むあ？」

くわえてた煙草をはずしつつ、下を確認。

物体は、体をこすり付けてくる口口だった。妙になついてるんだよな、俺に。

ふう、骨折り損じゃねえか、これじゃ。

「おいおい、いったいどこいつてたんだよ？」

かがみこんで、頭をなでてやる。その手にもじゃれ付いてくる。

首もとのゴージャスなえりまきをワシャワシャして楽しむ、ごろごろ口口も言っている、気持ちいいらしい。

「あゝあ、はじめから俺んとこ来いよ、そうしたら、遊んでやれるし、俺も簡単に金もらえるし」

とか、ちよつと腐ったことを猫に言ってみる、飼い主に告げ口されたら大変だな。

おつと、猫缶買ってきていたんだつた。

袋から缶詰を取り出すと、ご飯だとわかっていいのか、口口がはしやぎ始める。

「腹減つてたのか？」

言葉なんてあまり理解できないと知りつつも、ついつい声を出してしまう俺がいる。

缶を開けたあと、中身を載せる皿がないことに気づいた、しょうがないから缶が入ってた袋の上に開ける。

出した瞬間、俺の許可も無くがつつき始める口口、まあ別にいいが夕暮れ時、橋、猫、メシ……そういえば、こんなことが、昔にもあったな。

逃げ出しはしないか確認しながらも、立って煙草を吸い、そんなことを思い出してた。

そうだな、あれは、ずいぶんと前か。

まだ子供のころ、ガキって言う年るときだった。

いくら煙草を用いた法術を扱う家系であろうと、そのころ煙草はも

ちろん吸ってない。

七歳年上の兄貴がいた。俺よりずっとしっかり者だったが、なぜか時々、怖い瞬間があった、怒鳴って怖いとか、そういうもんじゃなく、得体のしれないもの。なぜ兄貴にそんな物を感じるのか不思議だった。

それでもいい兄貴で、俺のことをよく助けてくれた。

夕暮れ時、俺が友達の家からの帰り道を歩いてるときだった。

橋の下ところに、ダンボールを見かけた。中に動くものあり。

気になって下に降りて、中を確認すると、小さな猫がいた。多分捨て猫。

ちよつと痩せてて、体を震わせてた。

どうしていいのか分からなくて、とにかく兄貴に来てもらおうと思つて家へ駆け出す。

自分の部屋で本を読んでいた兄貴を引つ張つて、橋の下まで行くと、まだそこに猫はいた。

「ねえ、どうしよう、兄ちゃん」

助けてあげてをせがむように、兄を見上げる。

「んん、そうだね、まずはご飯、食べさせてあげようか」

実際、飼う意思もないのにご飯をあげるのはいけないことだったけど、俺のために、そう言ってくれた。

そんなこと気づきもしないでうなづく馬鹿一名。俺。

「じゃあ、買ってくるから、そこで待つてて、体が弱つてると思うから、そつとしておくんだよ」

そついい残して、兄貴は買い物に出かけた。

言いつけを守つて、じつと猫を見守つてた、すごいさわりたい衝動もあったけど、兄貴に言われたことは律儀に守つた。

しばらくして、兄貴が戻ってくる。手には猫用の食べ物が入った袋。少し大きい。

「このぐらいの猫だと、何食べれるかよくわからないからね、いちおういろいろ買つて来たよ」

こんな小さいのがそんなに食べるの、とか疑問に思ったけど、すぐに解決した。

「ああ、どうしょ、ミルクは温めないといけないな、入れる皿もないし」

袋の中身を広げて、兄は問題に直面する。

「もう一回待ってて、ちょっと取ってくる」

そういつて、ミルクのパックを持って、家のほうへかけていく兄を再び見送る。

置いてあった食べ物を、どれか食べれないか試せばよかったかもしれないけど、やっぱりわけがわからないでただ兄貴を待っていた。猫が飲みやすそうな浅めな皿と、人肌くらいに温めたミルクを持って、兄が橋を降りてきた。

まず猫を、慎重に箱から出してやって、目の前にミルクを注いだ皿を置いた。

かなり長い時間、びくびくしてミルクに手をつけなかったが、空腹には耐え切れなかったか、少し舐めたあと、しばらくしてがつつくように舐め始めた。

「ねえ、このあとどうするの？」

当面の問題が解決した瞬間、次の問題が浮上した。

「そうなんだよね、どうしようか？ 家じゃ飼えないし」

二人で悩み始める、その間も猫はミルクを飲み続けてた。

家で飼えれば一番よかったけど、あいにく捨て猫を拾ってまで飼うことは出来なかった。

「ご飯あげちゃった責任もあるし、しょうがない、ここで面倒見ようか」

「うん」

それは、飼うわけでも、見放すわけでもない、ひどく曖昧で、猫にとっての、一番の仕打ち。

そうやって育てられれば、いつか、生きる環境と適合できなくなる。兄貴はその時、それを知っていたかもしれない。

それからしばらくは、暇なときを見つけては猫の世話をしようになった。

兄に教えてもらって、一人のときでも世話ができるようにもなった。猫に元気が出てきて、少しくらいなら抱いても大丈夫になって、二人で喜んだ。

俺達が来ると、ご飯ってことがわかって、ダンボールからはいずり出てくる姿が可愛かった。

二人で様子を見に行ったある日、ダンボールの中にその姿が無かった。

どうしたのかな、と周囲を捜すけど、いなかった。

「もしかしたら、独り立ちしたのかもね」

「そうだといいね」

少し悲しいけど、うれしく思ふべきことだし、それだったらしょうがないと思った。

「でも、あとちょっと、捜そうよ?」

「そうだね」

俺の意見に賛成して、二人でもう一度よく捜す。捜す場所を少しずつ広げた。

自分の膝くらいの草が生い茂るところで、一画だけ踏み荒らされている場所を見つけた。

不思議がって寄ってみたら、そこにいた。

ぼろきれのように転がってる、あいつが。

足が間接が増えたようにぶら下がり、体中泥と血にまみれて、腹だつてつぶれて、死んでいた。

捨て猫を、ふざけていじめたやつらがいたんだ。猫にだって、命はあるというのに。

「にい……兄ちゃん!」

半泣きになりながら、その場で兄貴を呼んだ。すぐに気づいて走り寄ってくる。

「これは……ひどいな……」

そういつて、兄貴は死んだ猫をじつとみつめたまま動かなくなる。

「力が……足りなかったせいだ……」

搾り出すかのような兄の声に、その顔を見上げた。

悲しんでいたけど、その表情に、あの得体の知れない怖さがあった。兄貴は、よく力を尺度にすることが多かった。

力で全て決め付け、優劣を測っている節があった。兄貴のいう力は、腕力ではなく、抽象的、全般的な力を指していた。

そして、そうやって話するとき、怖くなるが多かった。

「こいつに力があれば、死ななかった、逃げれたかもしれない。俺達に力があれば、殺されずにすんだかもしれない、ずっと飼えたかもしれないのに……」

震えるほどに、拳を強く握っていた。

「力が……欲しいな……」

「兄ちゃん？」

すでに、いつもの兄では無い気がして、びくつきながら呼びかける。

「ん？ ああ、ごめん。死んだから、猫のお墓、作るうか」

いつもの兄にすぐに切り替わった、不思議なくらい、あっさりと。

二人で掘った穴に、猫のなきがらを埋めて、申し訳程度に石と木の枝を積んだ。

「野良猫になんかなるなよ？ 飼われてた方が、幸せってもんさ」

飯を食い終わってご機嫌なのか、口口がニヤーと返事をする。

でもまあ、こいつの場合、飼い主の運が悪かったな、あまりにも溺愛しすぎて、一時期ノイローゼで毛がはげてた時期があった、そして俺がそれを忠告したら、逆ギレされた。それでも口口が不憫だからなんとか説得して動物病院に行かせたら、案の定飼い主の過保護によるストレス性のものだった。

今の毛並みを確認すると、すっかりよくなっている。たまに外にプチ家出して、ストレスを発散してるんだろうな。

相変わらず美咲夫人は、姿がいなくなると俺をすぐに呼ぶくらい、

過保護なわけだが。

「ちよつと待つてろ、これ吸い終わったら行こうか」

喫煙で猫を待たせるのは、なかなか不思議な感覚。

「久しぶりだな、叢紫、四年ぶりか？」

すると、背後から俺を呼ぶ声。懐かしく、それは俺の心を揺るがせる。

振り向くと、俺より年上の男が、煙草を吸っていた。

七歳ぐらい年上、つまり俺の兄が、そこには立っていた。俺の人生の中で、一番会いたくない相手。

その姿を見るだけで、俺の心は抉られ、自戒の念に苛まれる。

俺の横まで来て、欄干に寄りかかるようにして上を見上げた。ちなみに俺は欄干に肘をついて夕日を眺めてる。

「本当に、久しぶりだな、一輝」

自分でも、とげのある口調になつてるのがわかる。

兄が嫌なんじゃない、過去を思わせる存在が、認められない。

「お前はまだ、法術士事務所なんて続けてるのか？」

煙を上に向かって吐き出しつつ、質問してきた。

「ああ、まだやってるさ、俺はずっと、続けるつもりだ」

煙草を示した後に、足にじゃれ付いてる猫を指した。

「猫探しに、法術は関係ないがな」

「はは、そうだな」

まだ、あんたは笑えるのか？ それは本当に、笑つてるって言つのか？

「じゃあ、あんたはなにやってるんだよ？」

「俺か？ 俺はな……」

しばらく煙草を吸う、俺も吸って返事を待った。

「ソルエッジの、リーダー勤めてる」

……あ？

「本当……なのか？」

「こんな変な冗談、誰も言いやしないだろ？」

嘘なんて、つくような兄じゃなかった。信じたくないけど、それは事実。

「なんで、あんな馬鹿なことしてる？」

「どこまでいけるか、試したくなつてな」

理解できない、兄貴は、何をやってるんだ。認めたくない。

「それだけ……それだけなのか!？」

「ああ、それだけだ」

感じるのは憤りだけだ。

ただ、自分の、力、でどこまでいけるが試したいがために、ソルエツジを作ったってことかよ。

それだけで、なんであんなに人が集まる、兄貴のカリスマ性が、目的の存在しない組織を、あそこまで大きくしたって言うのか。

「大勢の人まで巻き込んで、することかよ!？」

「するべきことじゃないさ。だが、試したくなつたんだ」

意味がわからねえ、狂ってやがる。

昔からの、あの不思議な感性が、何かの線をはみ出してしまったかのような。

あんたが導いた答えは、そんなもんだつたのかよ。

「それじゃ、俺はそろそろ行くよ、忙しいんでね」

「待てよ……おい!」

「おい、猫、どっか行こうとしてるぞ？」

え？ 振り返ると、確かに暇になったのか、とてとてどっかに行こうとしてた。

「じゃあな、今度会うときは、敵、かもな」

猫を追っかける俺の背中に、兄貴が告げた。

逃げられる前に抱きかかえ、もう一度兄貴がいるほうへ振り向いた。そこに姿はなく、法術を描かれた煙と光の残滓が、漂っているだけだった。

くそ、なんだつたんだ一体。

まずは猫のほうを済ませる、そのあと、事務所で考えるんだ。

今は心が揺れすぎている、動揺は、間違いに繋がる。冷静になれ。口口を、美咲夫人のところまで届ける、泣くほど喜んで、口口を抱いていたが、口口のほうはなんだか嫌そうにもがいてた。

もう空は日が沈んで、暗くなり始めた紫紺の空。

事務所の前まで来ると、真理のバイクが停めてあった。

一人で何をやってるんだろうか。

階段を上って、ドアの前まで行くと、話し声が中から聞こえた。話し声？

とりあえずドアを開けると、そこにいるのは真理ともう一人、真だった。

「ねえ、やめようよ、そんなこと」

見た様子、理由はわからないが、情緒不安定になっている真を真理が落ち着かせている。

「あ、叢紫！ 真君が、危ないこと考えてるの。やめさせて」「いきなりそういわれてもなあ。とりあえず、話を聞こうか」まずは落ち着かせて、事情を聞いた。

仕事の依頼として、真は話した、いくらかかってもいい、何年かけてでもいいから払うから、とにかく受けてくれ、といった。

内容は、ソルエッジ、兄貴が作った組織の、壊滅。壊滅は無理でも、主要メンバーを、殺してくれ。

理由を聞くと、前俺達がねじ伏せるように解決した、連続猟奇殺人の被害者に、真の親友がいたということ。その復讐が目的。

こうやって、悲しむやつがいるから、巻き込んだじゃいけねえんだよ。なに、暴走してやがる、兄貴。

真は、殺意で感情が埋め尽くされているようだった。

法術という力が、それを助長している。だけど、俺よりか、まだましだと思つ、金で、人の命を奪うより、ずっとましだ。

「俺の、兄貴がソルエッジのリーダーだ。だから、俺が、落とし前をつける」

驚きの事実、二人とも目を見張った。

「お前の意思が、人を殺すんじゃない、お前は誰も殺さない。俺の意思が、人を殺すんだ」

「え……じゃあ？」

「その依頼、引き受けましょう」

6 BOX FULL FLAVOR

「とにかく早く、やりたいんだろ？」

「はい」

「じゃあ、今夜、仕掛けるぞ」

さすがに早すぎると感じたのか、真が驚く。

「手っ取り早く、ユー二から情報を買っぞ、どうせ金はお持ちだ」
「そ……そんな!？」

ユー二の情報の破格具合を知っているため、真の顔が恐怖に染まった。

「よし、そうと決まればとっとと行くぞ」

「決まってるんですよ!！」

真の意見は無視。俺はどんどん事務所から出て行った。焦ってるんじゃない、もう俺は、平常だ。

「ちよつと!？　なんでそっちの方向に進むわけ？」

真理が横まで来て、小声で聞いてきた。後ろからしょうがなくついてきている真には聞こえていない。

「俺が、やらなきゃならねえんだよ」

「じゃあ、真君を巻き込む必要なんてないでしょ!？」

小声で怒鳴るとか、結構器用なことをしてくれる。

「すでに、巻き込まれてるんだよ」

「そんな……」

友達を殺された時点で、法術士になった時点で、すでに真は巻き込まれてるんだ。

「でも……」

「でもじゃねえよ、俺は、あいつに誰も殺させないし、死なせもしない」

「そこまで叢紫が言うなら……わかった、私も協力する」

「それはすでに決定事項だが……助かる」

協力するという意味の本質は、一緒に戦うことなのか、真を守ることなのか。

「ほら、とっとと行くぞ、真」

「わかりましたよ!」

真も隣まで来る。三人で、ユー二のところへ向かった。

「あら、諸田、おかえり。おまけも来てるわね」

「おまけ言つな」

すでに来ることが予測済みだったのか、ユー二は八重刃を率いて待ち構えていた。

「ソルエッジについての情報が知りたい」

「いくら出すの?」

「真に聞いてくれ」

「え!？」

急に話を振られ、あたふたとする真。

「ああ、冗談だ。ところでユー二、ソルエッジのリーダーの名前知ってるか?」

「名乗ってる名前はもちろん知ってるけど、本名についてはわかっていないわ」

「じゃあ、それと引き換えにそのリーダーの居場所を教えろ」

「あら、あなたたちが潰すって言うのなら、その時点でその情報の価値はなくなるんだけど。……いいわ、それはこっちの情報も変わらないしね」

「じゃあ、いうぞ? 本名は、空煙 一輝、俺の兄だ」

「あゝら? 驚きの新事実発覚ね。じゃあ、私からの情報は……」
全く驚いてないかのような言い方だ。

ソルエッジが本拠地としてあるビル of 場所を教えてもらう。さらにそのビルの間取りと、正確な居場所まで教えてもらった。

「ほかの情報はいる? 敵の数とか」

「どうする、真? 俺はいらないんだが」

「じゃあ、いいです」

これでユー二に取られる金は無くなった。

「用件はそれだけだ」

踵を返して俺は出て行こうとする。

「俺も行こう」

八重刃が俺達と一緒にしようとする。

「誠志ちゃん、何してるの？ 私は許可してないわ」

その言葉に立ち止まり、ユー二のほうへ振り向いた。

「友が死地に赴こうとしている。放っておけない」

「あなた、私に許可無く行動したら、ただじゃおかないわよ。わか
つてるの？」

笑顔の中に、畏怖させる何かを潜めてユー二が言った。

「ただじゃなくていいさ」

何事もないように、八重刃は冗談交じりに受け流した。

「言うじゃない、いいわ、あそこは私達にとっても邪魔。潰してき
なさい」

まるで八重刃の覚悟を試していたかのように、すぐに行くことを許
可した。

「承知した」

無事、八重刃が加わることで、これで四人になった。

「さて、どうするか？」

「少しでも敵の手を減らすべきだろう」

「なら、深夜の方がいいか？」

「予測がつかない以上、それが最善だ」

ということになって俺達は深夜まで待機することになった。その間
も真は落ち着きが無かった。

俺は、ずっと煙草を吸って待ち続けた。ほとんど会話は無かった、
決戦に向け、全員神経を研ぎ澄ましていた。

それほど危険なことだった、たった四人で組織の本拠地にかちこむ

なんて。無謀ともいえる。

途中、俺は煙草が吸いすぎて切れそうになってることに気づき、買いに出かけた。二箱もあれば十分だろう。

これで準備は整った。

「そろそろ、行こうか」

「承知した」

「はい」

「うん！」

八重刃の表現を借りれば、死地へ赴く、だが、誰も死なせはしない。

空は完全に闇に染まり、今ある照明は切れそうになってチカチカしている街灯と、ソルエッジ本拠の入り口に設けられたライト二つ。入り口は鉄扉で、見回りが三人。

とりあえず相手から見えない位置でそれを確認した。

「私が行くよ」

「頼んだ」

俺が許可すると、すぐさま真理が物陰から走り出した。

闇夜にまぎれ、音も無く接近し、光の中に躍り出たと思った瞬間には、反撃する暇も、増援を呼ぶ暇も無く、三人の男は気絶していた。周囲を警戒し、安全を確認すると真理がこっちに合図した。

鉄扉の前に四人がそろつ。

「さて、どうする？」

回りくどいことをすれば、被害は最小限に抑えられるかもしれない。だけど、そんな気分じゃない。

「正面突破だな」

俺と八重刃の意見があつと、八重刃は門の前に歩を進めた。剣の間に合いまで。

居合いの構えで、意識を研ぎ澄ます。

突如、一連なりの金属音、網膜に焼きついた、照明を照り返す刀身の輝きの残滓だけが、数発の剣戟を放ったことを教えた。

鉄で出来ているはずの扉が、斬撃で斬り崩れた。

「相変わらずのお手前で」

法術もなしに、普通できるか？ そんなことが、ただっ広い一階フロアには、意外と敵がたまってた。

ほとんどが哑然としているが、何人かはすでに戦闘体勢、さらに数人は何か連絡をとってる。

崩れた扉を踏み越えて、真理と八重刃が集団へと突っ込む。敵はまるで奇襲をされたかのように行動が遅れ、何人も倒れる。二人の奮闘に、俺と真の存在に気づいていない。

やはり、今までソルエッジが起きてきた事件からの予想通り、全員が法術士だ。

はきだした煙を、指でなぞる。

「鉄楔よ……」

真理と八重刃の動きを阻害しないように、フロア全体を埋め尽くすように無数の鉄の楔が、法陣から伸びる。

敵の体中が射抜かれ、身動きが取れなくなる、中には致命傷を受けている奴もいた。

「我、麒麟の流麗なる足を両足に纏う」

無事だった敵も、無数に伸びる鉄に動きを阻害され、身動きが取れないまま、棒を足場にして縦横に駆け巡る真理に次々とやられる。

八重刃が、抜刀し、目を閉じて意識を集中し始めた。

蒼き輝きを放つ剣で、空間を刻む。それは、しっかりとした力として、収束し始める。

「灼剣」

血振るいと共に、再び剣へと収束し、刀身が、紅く紅く、空間を揺らめかせるほどに、赤熱する。

ただの鉄で形成された俺の楔を、軽く融解させる温度まで上昇した刀身を使って、地形を無視して全てを切り刻んでいく。

乱戦状態ならば、渾身の一刃で鉄を切り裂くより、法術を使って、鉄を無視して戦ったほうが早い。

敵の体に斬撃が疾ると、切り口から発火していき、瞬く間に灰と化していく。

八重刃と真理が隙を作る間に、俺は続けてもう一発ぶち込む。意識を研ぎ澄ます、紫煙と法力を、同化させるかのようになじませていく。

吐き出した煙に、右腕をすばやく疾らせていく。

紡ぎあげる法術は、遠隔発動の全方位壊滅法術。

すばやく八重刃が俺の援護に回る。

描かれた煙の法陣に、左手で、火の法陣を重ねていく。

法力を宿した煙草の火が、俺が左手を振るうたびに軌跡を残していく。

やがて、完成した二つの法陣が同化し、一つの強大な法陣へと変化する。

「真理！ いったん退け！」

俺の声に反応して、戦闘を中断して真理が俺の後ろまで退避、俺が法術を放つぎりぎりまで八重刃が俺を守護する。

「空の、嵐刃よ！」

俺の法陣が築かれたかなり先、敵の中心地で法術が発現する。

強大なエネルギーの発生が中心に重力が発生したかのように空間を歪ませた。

それは爆発的に広がると共に、巨大な丸い白雲を発生、ほぼ同時に周辺に弾道のように白煙が生じた。

敵や楔に無数の斬撃痕が生じた後、わずかに遅れて爆音が轟く。

血霧と砂塵が巻き起こり、全てを切り刻んでいた。

遠隔法術は、かなりの精度を要求する高等技術、さらに、今俺が行なった法術は、発動地点を中心に、全方位に向かって、極薄の、音速を超える真空波を放つもの。線のように巻き起こった高圧の衝撃波は、不可視の刃として、敵を蹂躪しつくす。

「目指す一輝は五階にいるはずだ。どんどん行くぞ」

階段なんて使わず、一気に入り口から正面に見えるエレベーターに

駆け込んだ。

真が五階のボタンを押してドアを閉じると、俺はすぐさまドアの前に立ち、新しくつけた煙草を吸う。

「やっぱり、八重刃さんと叢紫は、息ぴったりだね」

「ああ？」

とりあえず真理の言うことは放っておく、それどころじゃない。

八重刃は、上からの奇襲がないか警戒している。俺はその間に準備する。

俺は、扉に向けて、大きく円を描くように煙を吐く。

出来た輪に、右腕で法陣をなぞる。

さらに、輪の中心に向かって煙草の火で輪を刻んでいく。

エレベーターは四階を指し、そのまま登っていく。途中で止められることはなかった。

五階に着き、エレベーターが止まる直前、俺は法術を発動する。敵の、さらに先手を取らせてもらう。

「残念だったな」

もちろん、そんな俺の呟きは、外で待ち受けてる敵には聞こえてないだろう。

「光弾よ……」

煙の輪の部分で発生した光が、線に沿って中心へと収束していく。扉全てを巻き込むほどの光の弾丸が、まだ開く前の扉を消し去りつつ、発射される。

その後を追う様にしてすばやく八重刃がエレベーターを飛び出す。扉を開くまで待つなんて、悠長なことしてた奴らは悲惨だったな。少し経って、俺と真が出る。真理がしんがりを勤める。

通路のようになっていて、左右には他の部屋に繋がる扉がいくつもある。そこからの奇襲が考えられるが、俺達が目指すのは一番奥にいる兄貴一人、いちいちドアを開けていって敵を撃退なんてことはしない。

八重刃の近くのドアが開く音と同時に、うめき声、すでに八重刃が

斬り伏せている。

唐突に、八重刃がドアに向かって刺突を放った。引き抜くと、刃には血。

俺と似たようなことをしようとした奴がいたらしいが、八重刃に気配を読まれてあっさり反撃を食らった。

同じタイミングで、後ろの真理もドアごと敵を蹴り飛ばしていた。こっちは動物並みの嗅覚でいることを察知していたな。

どちらも俺には出来ない芸当。

遠距離型と違って、近距離型は身体能力、格闘能力、その他総合的な能力で優劣を決するところがある。俺は格闘と行っても護身術程度しか出来ない。

こういう状況で、一番危ないのが、俺達遠距離型を狙った至近距離からの奇襲。

真横でドアが勢いよく開け放たれる音、考えた瞬間いきなりきやがった！

八重刃が察知できない場所まで離れたたのか？ とりあえず、八重刃が真理どっちかが到着するまでの一瞬の時間を稼ぐしかない。だが、その一瞬で、やられる可能性がある！

一気に俺は飛び退く、横の真を見たら、武器を振り上げてる敵に突っ込みやがった！

振り下ろされる刃を冷静にみつめ、真はその軌道から体を反らすと、振り下ろされる右腕の手首を左手でつかみとり、さらにひきつけ、右側面から敵に密着、右掌打で敵のあごを捉えた。いや……寸止め！？ しかし敵は力なく膝から落ちた。

「やるじゃねえか。何したんだ、一体？」

「動きのほうは、八重刃さんに叩き込まれました。でこっちは……」
右手をみつめる。

「法術で、ごくごく小さな範囲の、酸素濃度を低くしたんです。小さなって言うけど、今俺が出せる最大なんですけどね」

わずかな呼吸の間に、敵は気絶していた。ということは、酸素濃度

を極端に下げて、ヘモグロビンの動きを逆転したということだ。酸素を輸送する役目のヘモグロビンが、体内で酸素を吸収し、肺で酸素を排出する逆転現象が起こり、一瞬で気絶した。そんな空気を吸うより息を止めていたほうがまだましだ。

まだ法術を習い始めて間もないっていうのに、よくやる。これで、広範囲に発動でき、なおかつ遠隔で精密発動できるようになれば、敵は気づく間もなく全員倒れてる。

「怖いよな。自然発動つてのは」

「でも、こんなんじゃない、人は……殺せない」

そういつて、真はみつめていた掌を握りこんだ。

「いいんだよ。殺さなくて。とにかく先を急ぐぞ」

この通路を抜ければ、一つ会議室のような大きな部屋がある、あらにその奥にある部屋に、逃げてなければ兄貴がいるはずだ。逃げるなんてこと、兄貴がするはずは無いと思うが。

会議室へ続くドアを開け、中へ進んでいくと、突然視界が消える。照明を落とされた!?

とつさに真の手をつかんで、明るいうちに把握していた物影へと飛び込む、入ってきた扉と、奥の扉から、敵のなだれ込む足音。

どちらからも安全な場所へと回り込む。かがみこんだ頭の上を銃弾が通り過ぎ、壁ではじける。

銃!?! 法術よりも手っ取り早いを選んできやがった!

反撃に法術を叩き込んでやりたいが、そんな隙はない、第一こんな中で法力の光を見せたら単なる的だ。

銃弾の雨が降り注ぐ中、それに違和感を感じた。まず、敵が余り狙いをつけてないで問答無用にばら撒いてきてること、それともうつ。

……なんでだ!? おかしい、銃火が見えない。

発射するとき、銃口の光が、一切見えないのだ。

明かりを消しただけじゃない? おそらくこの空間は、法術で、光を吸収している。

くそ、状況がどうなってるかわからない、前衛の二人はうまくやってくれているだろうか。

「おい、真理！ この部屋に光は完全じゃない！ 使うなら猫じゃなくて蝙蝠！」

「わかった！ 我、蝙蝠の音眼を眼に纏う！」

一つだけ、歩調の違う足音が銃撃音の中に新しく加わる、おそらく真理だ。超音波を反響を利用し、さらに法術で音を視覚化している。真理にとって暗闇は意味をなさない。

横の真からは、何か張り詰めるような空気を感じた。

八重刃はどうなってる？ あいつも暗闇の中じゃ、さすがに銃弾を捌き切れない、身動きが取れてないか？

「うわ、ちよつと私一人じゃ無理かも、数が多い！」

敵の銃弾から逃れながらこちらに救援を求めているのか、真理が少し焦っている。

どうする？ 光が吸収されてるなら、法術を築けるが、敵の位置がわからない、さらに、結局隙だらけになることは変わらない。

「八重刃さん！ 二時方向、十二メートル先物陰の後ろに二人！

そこから六時方向二メートル先三人、四時方向、一時方向、共に三メートルのところに二人ずつです！」

突然何かを真が叫んだ。……敵の位置？ なんでわかる？

「承知した」

八重刃の足音が増える。発射場所さえわかれば暗闇でも出来るのか、剣で銃弾が割れる音が時々響く。

「叢紫さん！ 七時から九時方向、二十から二十四メートル先に十三人います！」

わけがわからないが、ここは真を信用するしかない。場所さえわかれば、物影に隠れたこの体勢から、遠隔法術を発動して、いける。暗くなった瞬間とつさに消してしまった煙草の変わりに新しい煙草を取り出し、火をつける。やはり火さえ見えなかった。

肺に入ってくる煙で火がついたかわかるなんて、不思議な気分だ。

「剣龍寺さん！　いったん退いといってください！」

「了解！」

煙を吐き出す。全く見えていないが、すばやく法陣を築いていく。ずつとやり続けた行為、見えなくなつて問題ない。

鉛弾を、お返ししてやるよ！

「鉄雨よ……」

真に指定された場所に、上から弾丸の雨を降らせる。自分の周りを跳ねてた弾丸とは比べ物にならない量をお見舞いしてやった。

八重刃のほうも終わったか、ほとんどの銃撃が消える。後数人だろう。

「真理！　後は頼んだ！」

「任せて」

再び真理が動き出した。次々と銃弾の量が減っていく。

「なあ、なんで敵の位置がわかつたんだ？」

「ああ、これは、空気の対流を読んで、敵の居場所を察知できるように、やっぱり八重刃さんに叩き込まれました。距離感とかもすっかり身につけさせられて、大変でしたよ。まだ、空気になじむまで時間がかかつて、遅いんですけどね」

それにしても、すごいことをやってくれる。飲み込みも早いし、化けるかもな。

会話してる間に銃撃は完全に消え、敵が全員倒れたことがわかった。しかし、まだ部屋は暗いまま。

発動者はどこにいる？　まあいい、大体構成は読めてる。

左手で法陣を築き、そこに手を当てる。

「解呪。闇に光を」

法陣を中心に、その部屋の色彩が復活していく。照明が落とされていたりはしなかった。

「全員。無事か？」

「心配ない」

俺とは部屋の対角線に位置する場所から、八重刃の声。

「大丈夫だよ」

真理の声も上がった。机の陰から立ち上がるのが見えた。

真のほうも、疲れてはいるようだったが外傷はないようだ。

正直、ここまで無傷だとは思わなかった。

残すはあと一人。それでこの戦いは終わる。ソルエッジが終わる。

奥にある、兄貴がいる部屋へと向かおうとしたら、そこに続くドアが開かれた。

出てきたのは、兄貴一人。

「敵として会いに来たぜ、兄貴」

「そのようだな」

悠然とした動作で煙草を吸っている。もちろん、それは俺達の持つ、法術の行使にも繋がる。

「なあ、もう一度聞く。なんで、こんなことをしてるんだ？」

「……………」

無言は、答えることへの拒否か。しかし、その顔には、哀愁の感情が極わずかに含まれていた。

「目を、覚まさしてやるよ！」

同時に、左手を宙に躍らせる。先手を取る。

兄もほぼ同時に空間に指を走らせ始めた、速い。

俺の前で赤い線の法陣が築かれていく。

兄は、煙と火の、重ねがけの法陣を築いていた。

「紫炎よ……」

「駆けよ！」

法術を放つタイミングも、ほぼ同時。なんて構築速度だ。

赤き円から発生した力、蒼の炎が一輝に向け放たれる。結果を見ることなくその場を退避、相手のほうが高位の法術を放った、なら負けるのは確実だ、直撃しないよう逃げる。

だが起こったのは、力がぶつかり合い、そこで止まる、相殺。炎が揺らめきを残して消失した。

こっちのほうが威力が高いのか？ このまま、いけるか？

だが、ただの相殺じゃない、法術と法術の衝突が起こった場合、互いの力を潰そうとする過程で、法力の発光現象が起こるはずだった。それが発生していない、だが、あれは確かに法術のはずだ。

回避運動を取っていた俺を尻目に、すぐさま第二撃を準備し始める一輝。

「我、獵豹の疾風の足を両足に纏う！」

構築している隙に、真理が俊足で懷に踊りこむ。一輝には護衛となる前衛がいない。初めから勝負は見えていた。

「遅いな」

「……ぐうう！！？」

手を休めないまま、肉薄しようとしていた真理に絶妙なタイミングで蹴りのカウンターを放っていた。

目で捉えきれてたつてのか！？ あのスピードを！

鳩尾に蹴りをもらった真理は、腹を押さえて崩れ落ちそうになりつつもなんとか後ろに引く。

追い立てるように、一輝が法術を真理に向け発動。

「駆けよ！」

まずい、と思った瞬間には、すでに八重刃が真理の前方に割り込んでいた。

放たれた氷塊を、真っ向から斬り割る八重刃。その間に真理をつれていったん退く。

まずい、いいところにもらっちゃったらしい、真理はまだ動けそうにない。

「真、真理を頼んだ、俺と八重刃で行く」

「わかりました」

物影まで真理を運んでいく。

一輝は次の一撃を構築しようとはせず、煙草をくゆらせている。

八重刃は追撃しようとせず、俺達と一緒に退いてきた。

「まずいな」

さつきからまずいばかりじゃねえか、俺達は好みが激しいらしい。

「どうしたんだ？」

「彼の使う法術は、崩刃では切り裂けない」
敵の法術が消せない？」

「どうということだ？」

「放っているものに、法力が伴っていない、放つ過程に、法術を用いているようだ」

放つ過程？ 法力を使っていないのなら、なぜ何もない場所から氷を飛ばせた？

よく考えるよ………そういえば、この前会った時も法術を一輝は使ってた。

あれはなんだったんだ？ 足音はしなかった、空を飛んでた様子も無かった、………なら………転送法術か！？

なんでそんな超高等法術を一人で構築できる？

転送法術は、他の次元から異形の物を召喚するより簡単と思われるかもしれないが、それは間違った解釈だ。

自分のいる部屋から、他の部屋へ続くドアを作るのは簡単だ、しかし、自分のいる部屋へ繋ぐドアを作るのは、ひどく難解なことだ。

しかも、召喚法術はすでに『契約』済み、作ってあるドアを通るだけだが、一輝の構築している転送法術は、いちいち新しいドアを作っている。

まだ強くなってやがんのか、あんたは。

転送法術や、召喚法術で呼び出されたものは、それ自体が実在し、法力で作られたものではないため、崩刃でかき消すことが出来ない。

「兄貴は転送法術を使ってるんだ。かなり厄介、てかヤベエ」

「だな」

俺達の会話が済んだのを見届けたか、再び一輝が法術を構築し始める、高速展開されていくのは、先ほどと同じ転送法術。

「どうやら、あれだけで勝負するつもりだ。転送法術は、出すものにもよるが、扉から放出されるものだから、法陣の前にしか攻撃できない。回避は余裕のはずだ」

一撃を回避した後、もう一発放たれる前にこっちの法術で殺す。
神経を張り詰める、発動した瞬間に回避しなければ、法陣の角度を
変えられて狙われる。

「駆けよ！」

来た！ 何が来る？ 避けられるか？

だが、言を放った後も、法陣から何かが射出されることはなかった。

……なんでだ？ なんで何も来ない！

失敗した？ そんなことがあるはずはない。

かすかに感知した、法力の揺らめき、それは、上方から感じた。

一瞬の後、数発の弾丸が降り注いだ。回避に遅れ、足を撃たれた！

「くっ！」

焼けるような痛みと共に、右足の感覚が失せる。やばい、動けない。
とにかく、俺は死んでない、今のうちに、一撃を。

簡単な法術でいい、人一人殺せるだけの威力で、十分なんだ。

「貫け！」

「駆けよ」

すばやく、一本の鉄槍を放つ。

一輝の心臓めがけて飛んでいった槍は、しかし、眼前の法陣で消失
していく。

飛ばされた！？ あんな一瞬で再び築いたのか？

まだ構築速度が上がるってのか、しかも、こっちの法術をどこか他
の場所へ転送された、転送法術は攻防一体の技か。

体を転送されかねない、近接戦は無理だ。八重刃と真理の本領は発
揮できない。

俺は出来るだけ死角の少ない場所へと転がり込む。
さつき、上から飛んで来たのはなんだったんだ？

再び理解できないものに直面し、俺は思考を回転させる。

なんで上に法術を発生させられる？ 元から遠隔地と法陣を繋ぐ法
術だから、遠隔発動は不可能のはずだ。

……まさか、転送法術の二重発動？

遠隔地と繋いだ法陣を、さらに転送法術で俺の上へ転送したつていつのか？

さっきから、俺の予想のはるか上を行ってくれる。

転送法術による多角攻撃？　しゃれになんねえぞ、おい。

どうやって勝つ？　勝ち目はあるのか？

さまざまな戦略を頭の中で構築していく。どれも決定的ではない、ほとんどが潰される。

くそ、仕留めるには、一番単純にいくしかない、敵の構築速度のさらに上に行く、全員での波状攻撃。

さらに、最後の一発は、もしものために、転送可能量を超える極大法術。

「真理、動けるか！」

「う……ん、なんとか……」

なんとかしてもらうしかないな。

「真、なんか飛び道具になるようなもんあるか！？」

「護身用のナイフ投げるくらいしか出来ないっすよ！？」

「いい、それで十分だ！」

これで二枚壁を崩せる、後もう一枚、八重刃も俺の意図を読んでもはずだ。

さっき発動した三枚が一輝の限界だと信じたい。法力をなじませるために、それ以上はラグが出るはず。

「俺が合図したら最初に真理、次に真、最後に八重刃、攻撃頼む、兄貴に攻撃の暇を与えないで行くぞ！」

胸が熱くなるくらいに、煙草の煙を吸い込んでいき、限界まで肺につめ、法力と共に圧縮していく。

同時に、左手に持った煙草にも力を収束させていく。

紫煙を目の前に吐き出し、巨大な法陣を描き出す。

一輝も俺と同じ動作をしていた、真っ向勝負に、受けて立つつもりだ。

「いまだ、真理！」

紫煙を右手でなぞり、すばやく文様を描き出しながら、真理に指示する。

「我、火竜の赤き炎を吐息に纏う！」

「駆けよ！」

灼熱の吐息を一輝に向け放つ。それは、予想通り転送法術に吸い込まれ、一輝には到達しない。

展開する時間が過ぎたか、法陣が消失していく、すでに二枚目が構築されようとしていた。

俺の法陣は、煙の部分が描き終わり、次の行程、火で重ね掛けし始めるところ。

「次！」

俺の声に反応し、すばやく真がナイフを投擲。空力を操作して、加速と軌道修正を行い、一輝の胸めがけて飛翔する。

攻撃に使おうとしていた法陣の一部をすばやく書き直し、ナイフに対応させる。

「駆けよ！」

ナイフはどこかへ転送され、消失する。

火は法力の紅き軌跡を空間に残し、形を成していく。

何重にも、より深く空間を刻み込むように、俺の手は何度も往復していく、次第に軌跡は力を持った光を宿しはじめる。

先ほどのナイフで、攻撃から防御に法術を変化させたためか、一輝の法術のテンポが少し遅れる。

煙と火は重なり合い、より強く光を放ち始める。

「八重刃！」

すでに空間に刃を踊らせ、法術を発動する直前だった。

「飛刃」

「駆けよ！」

霞下段に構えた刃の刀身に沿うように、光の線が出来上がる。同時に、刀身の根元には寄り添うように浮遊する一発の弾丸。

「ふっ！」

力を込め、小さく息を吐くと共に、神速で剣を振りぬいた。刀身をレール代わりに、電磁加速して、弾丸が放たれる。

通常のライフルを軽く凌駕するスピードの、法術のレールガン。すでに展開されていた転送法術に、一瞬にして吸い込まれた。

俺の準備も整った。詠唱を行い、喝を放つ！

「時に型成す破壊の神よ

生を現し

死を現す

災禍の蒼炎よ

総てを葬り

蒼空を切り裂け

天無……龍蒼……！」

詠唱と共に掌打を法陣に叩きつけ、俺の最大法術が発動する。

翼を持った蒼き光の龍が法陣から飛び立ち、一輝の下へ飛来する。

その光の奥、一輝が法陣を築いているのが見えた。もう一枚、出せるってのか。

龍を転送しきるのは無理と判断したか、転送法術から、俺へ向け無数の雷が放たれる。刺し違えるつもりか。

あいにく俺は龍の制御で手一杯、ついでに足も撃たれてるから、動きが取れない。

弾丸と化した氷のつぶてをまともに受けながらも、俺は倒れない。

体中を激痛が打つ。

「龍よ……閃けえ！」

翼を大きく広げ、龍が強く、蒼く輝き、一輝に向け突進する。

空間が全て切り裂かれ、消失、一輝がいた一帯は跡形も無く消し飛んだ。

「やった、な……」

龍を消失させると、完全に力を使いきって地面に崩れ落ちる。

体中が、痛みを通り越して感覚がない。ひどくぼやけてる感じがす

る。

紫煙のように、自分の体が不確かなものに思える。

白くかすむ視界の中、誰かが駆け寄って俺の横でひざまずいた。

「ねえ、大丈夫！？ 叢紫！！」

ああ、真理か。大丈夫だよ……きっと死なない。

なんだ……泣いてるのか？

「お願い、ねえ、死なないでよ！？」

大丈夫だって、ああ、なんか返事しとかないと、ずっと心配するんだろうなあ。

口を開け、肺を動かそうとするだけでそうとう痛かったが、なんとか声を出す。

「大……丈夫、死には………しないさ」

それでもまだ泣いている、頬に落ちる涙の暖かさだけは、しっかりとわかった。

唯一まともに動かせる、左腕で、力なく真理を抱く。

今、俺が出来ることは、それくらいしかなかった。

ただ、抱く、心配させないように、出来るだけ、力強く、生きている証をたてるために。

7 BOX BREATH CARE

青い空の下、はためく大量のシーツを、煙越しに眺めていた。

ここは病院の屋上、本当は禁煙。でも時々看護師や医者が吸ってるから俺も使わせてもらう。

吸っている煙草は、隠し持っていたライターと、近くの自販で買ったもの、俺が吸ってる銘柄が無かったから適当なので我慢。

ふう、やっぱりこれがないと、俺は駄目だな。

煙草を吸うことに至上の安堵を得ていた。

真理に、入院してるときくらい禁煙してよ！？ といわれたので、仕方なく今まで我慢していた。煙草の没収もされた。

今日は退院日、病院を出る前、一足お先に吸わせてもらってる。

病院にいる原因は、この前の怪我、どうやらそうとうな重傷だったらしく、二ヶ月の入院、しばらく通院する必要もあるらしい。

その間は、煙草は吸えない退屈な日々だった。ほとんど暇なときは、空を眺めて、結局暇なままだった。

毎日真理が来てくれたから、そのときは暇つぶしになった、逆に、監視でもあったからタバコが吸えなくて辛かったが。

真と八重刃は、三回ぐらいしか見舞いに来ていない。ユー二にこき使われているんだろう。

心の整理がどうついたか知らないが、真もマシな顔つきになってた。次の一本を吸おうとすると、屋上へ続く扉が開く音、見つかったやさすがにまずいから急いで隠した。

「叢紫、ここにいたんだあ」

屋上に上がってきたのは、真理だった。

にこにこ笑いながら近づいてくる、何かいいことでもあったんだろうか？

「ねえ、今日ね……で、なんか、臭うんですけど？」

「ん？ そうか？」

やばい、鋭い嗅覚で察知された。適当にはぐらかそうとしても、もう遅い。

「ちよつと！ 煙草吸ったでしょ！？」

「んゝ、ああ、まあいいだろ？ どうせ今日で退院なんだし」

「いけないよ！ 退院するまでは駄目って言ったじゃん！」

俺の体をあんじて怒ってくれてるのだろうか。

「あゝ……悪かったな」

適当に謝っておく。

「もう、それだけだからね！？ どうせ午後になって退院すればどんだん吸うんだから、そこまで我慢！」

「はいはい」

うるさいなあ。

「で、話を戻すけど、今日って、何の日だかわかってるよね？」

「あ？ 退院日、つまり俺の煙草解禁日」

「それだけ？ 本当にわかってないの？」

んゝ、なんかあったか？

「もう！ 今日は叢紫の誕生日でしょ！？」

……ああ、そうか、最近日付を確認してなかったから、すっかり忘れてた、自分の誕生日なんて。

「で？ それがどうしたんだ？」

「……だから、誕生日、おめでとう……」

恥ずかしそうに顔を赤らめていって、最後のほうは消え入りそうだった。真理らしくもない。

「あんまうれしくないがな」

「ちよつと！？ 後、はい、これ、プレゼント！」

はずかし紛れに、押し付けるように箱を渡してきた。

「開けていいか？」

「いいよ、別に」

紙を破いて、中の箱を開けると、でてきたのはジッポ、少し上等な奴。

「……ああ、こんなものより、煙草本体のほうが俺はよかったなあ……」

「なんでそんなこというのよ!？」

頭を殴りつけられた、グーだったけど、病人に手加減してるのか、ほとんど痛くない。

頭を抱えてその場から逃げる。

「嘘、冗談だ。……ありがとうな」

「どう……いたしまして」

もう一度顔を紅潮させて、真理はそっぽを向いた。

俺達の二人の上では、相変わらず、煙草の煙のような白い雲が青い空を流れ続けていた。

7 BOX BREATH CARE (後書き)

これで、とりあえずは、この物語はひとまず幕が降りました。今まで読んでくださった皆さん、ありがとうございます。

とは言うものの、叢紫の物語は、まだまだ続く可能性があります、まだ書ききれいていませんし。でも次回を書くのはいつになるかわかりません、なにぶん、勢いだったもので。

ここで、小話、この作品が生まれたきっかけ。

はじめに出てきたのは、煙草を使った魔法（法術）でした。これかっこいいんじゃない？ という感じで友達と盛り上がりすぎて、それ、しばらく経ってから、じゃあこんな話はどうだ？ と俺の中で膨らんできました。

始まりは、キャラとか世界観よりも、あの煙草法術でした、なので読者の皆さんにも、あの技のかっこよさが、伝わっていると幸いです。

続き読みたい！ ツて人は、感想とか、評価とか、してくれるとうれしいし、とても参考になるし、 ああ、じゃあ書こうかな！ という気持ちに俺もなるので、どんどんしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5942a/>

Cool Night Smoking

2010年10月14日15時02分発行